

宇田野(2)遺跡  
宇田野(3)遺跡  
草 薙(3)遺跡

— 県営津軽中部地区広域営農団地農道整備事業に伴う遺跡発掘調査報告 —

1997年3月

青森県教育委員会







宇田野(2)遺跡全景（航空写真）



宇田野(2)遺跡・遺構配置（航空写真）





谷出土土器 (宇田野(2)遺跡)



土師器 (宇田野(2)遺跡)



1号土坑出土石鏃 (宇田野(2)遺跡)



土偶・土版 (宇田野(2)遺跡)

## 序

青森県教育委員会は、津軽中部地区広域営農団地農道整備事業に伴い、建設予定地内に所在する弘前市宇田野(2)・宇田野(3)・草薙(3)遺跡の記録保存を図るため、平成7年度(宇田野(2)遺跡は平成6年度にも実施)に発掘調査を実施しました。

今回の調査により、縄文時代から平安時代にかけての遺構や遺物が多数発見されました。

本報告書は、この発掘調査の成果をまとめたものであり、いささかでも今後の文化財の保護及び活用に資するところがあれば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査の実施と報告書の作成にあたり関係各位から御協力、御指導を賜りましたことに対して、心から感謝の意を表します。

平成9年3月

青森県教育委員会

教育長 松森 永祐





# 例 言

- 1 本報告書は、津軽中部地区広域営農団地農道整備事業に伴い平成7年度に実施した弘前市宇田野(2)・宇田野(3)・草薙(3)遺跡(宇田野(2)遺跡は平成6年度にも実施)の発掘調査報告書である。
- 2 これらの遺跡は、平成4年3月に青森県教育委員会が編集発行した『青森県遺跡地図』にそれぞれ遺跡番号 02221・02222・02219として登録されている。
- 3 執筆者の氏名は、依頼原稿については文頭に記載し、その他は文末に記してある。
- 4 資料の分析、鑑定については、下記の方に依頼した(敬称略)。

火山灰の蛍光X線分析	奈良教育大学教授	三辻 利一
放射性炭素による年代測定	学習院大学教授	木越 邦彦
遺跡周辺の地形及び地質	青森県立板柳高等学校教諭	山口 義伸
石器の石質鑑定	青森県立板柳高等学校教諭	山口 義伸

- 5 本書に掲載した地形図(遺跡の位置)は、建設省国土地理院発行の2万5千分1の地形図を複写したものである。
- 6 挿図の縮尺は、図ごとにスケールを付した。なお、遺物写真の縮尺は不統一である。
- 7 竪穴住居跡の主軸方向は、カマドの主軸方向によっている。カマドの主軸方向は煙出し孔の中心と焚口の中央を結んだ線と磁北とのずれを計測した。また、床面積は、住居構築時における床面の面積(壁の下端で囲まれた範囲)を計測した。計測にあたっては、プランメーターを使用し、3回の計測による平均値を採用した。
- 8 遺構・遺物の文、図中での表現は、原則として次の様式・基準によった。

(1)遺構内外の堆積土の注記は、『新版標準土色帖』(小山正忠、竹原秀雄 1993)を用いた。

(2)図中で使用したスクリーン・トーンの表示は次のとおりである。

## <遺構>



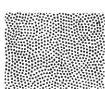
地 山



炭範囲



焼 土



貼 床



火山灰

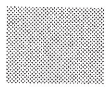


粘 土

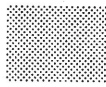
## <遺物>



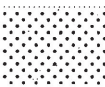
付着物



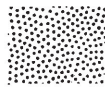
内面黒色処理



火ダスキ痕



スリ・研磨



凹 み



タタキ

- 9 引用参考文献については、本文末に収めた。文中に引用した文献については、著者名・編集機関と西暦年で示した。
- 10 発掘調査における出土遺物、実測図、写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 11 発掘調査及び本報告書の作成にあたり、次の方々から御教授、御指導をいただいた(順不同、敬称略)。 岡田郁雄、瀬川 滋、三宅徹也、田中寿明、長尾正義、天間勝也、遠藤正夫、鈴木徹、清野彰史、北林八洲晴、新岡 巖、内海 剛、田村俊之、千田和文、前田義人、吉留秀敏

# 目 次

口 絵  
序  
例 言

第1章 発掘調査の概要	1
第1節 調査要項	1
第2節 調査方法	3
第3節 調査の経過	5
第2章 遺跡周辺の地形及び地質	6
第3章 宇田野(2)遺跡の検出遺構と出土遺物	15
第1節 検出遺構と遺構内出土遺物	17
1 縄文時代の遺構と出土遺物	17
(1)住居跡	17
(2)土坑	17
2 弥生時代の遺構と出土遺物	20
土坑	21
3 縄文・弥生時代の遺構内出土遺物の観察	25
(1)縄文時代	25
(2)弥生時代	25
4 平安時代の遺構と出土遺物	26
(1)住居跡	27
(2)土坑	72
5 平安時代の遺構内出土遺物の観察	80
(1)土師器	80
(2)須恵器	82
(3)鉄製品	82
(4)石器・石製品	83
6 時期不明の遺構	84
(1)ピット群1	84
(2)ピット群2	84
第2節 遺構外出土遺物	85
1 土器	85
2 土製品	134
3 石器	142
4 石製品	175

第3節	自然科学的分析調査の成果	178
1	火山灰の蛍光X線分析	178
2	炭化材の年代測定	180
第4節	まとめ	181
	引用参考文献	183
第4章	宇田野(3)遺跡の出土遺物	185
第1節	出土遺物	187
1	土器	187
2	石器	187
第2節	まとめ	190
第5章	草薙(3)遺跡の検出遺構と出土遺物	191
第1節	検出遺構と遺構内出土遺物	193
1	土坑	193
2	ピット群	199
第2節	出土遺物の観察	200
1	土器	200
2	石器	200
第3節	まとめ	202
写真図版	宇田野(2)遺跡	203
	宇田野(3)遺跡	245
	草 薙(3)遺跡	246
抄	録	246

## 図版目次

図1	遺跡の位置	4	図35	第11号住居跡 出土遺物	56
図2	岩木山北東麓の等高線図	7	図36	第12号住居跡(第4号掘立柱建物跡付属) …	58
図3	岩木山北東麓の地形分類図	7	図37	第12号住居跡 カマド	59
図4	各遺跡内及び周辺の火山灰層等の模式柱状図 …	11	図38	第12号住居跡 出土遺物(1)	60
図5	宇田野(2)・(3)遺跡の基本層序 …		図39	第12号住居跡 出土遺物(2)	61
図6	草薙(3)遺跡の基本層序	13	図40	第13号住居跡・同カマド	63
<b>宇田野(2)遺跡</b>			図41	第13号住居跡 出土遺物	64
図7	遺構配置図	16	図42	第13号住居跡 出土遺物(2)	65
図8	縄文時代の遺構	18	図43	第14号住居跡・出土遺物	67
図9	縄文時代の遺構内出土遺物	19	図44	第15号住居跡(第3号掘立柱建物跡付属) …	69
図10	弥生時代の土坑配置図	20	図45	第16号住居跡・出土遺物	71
図11	弥生時代の土坑(1)	21	図46	平安時代の土坑(1)	73
図12	第1号土坑出土石鏃	22	図47	平安時代の土坑(2)	75
図13	弥生時代の土坑(2)	24	図48	平安時代の土坑 出土遺物	76
図14	平安時代の遺構配置図	26	図49	時期不明の遺構	84
図15	第1号住居跡・同カマド・出土遺物	28	図50	谷出土土器1	86
図16	第2号住居跡・同カマド	30	図51	谷出土土器2	87
図17	第2号住居跡 出土遺物	31	図52	谷出土土器3	88
図18	第3号住居跡・同カマド	33	図53	谷出土土器4	89
図19	第3号住居跡 出土遺物	34	図54	谷出土土器5	90
図20	第4号住居跡	36	図55	谷出土土器6	91
図21	第4号住居跡 炭化物出土状態	37	図56	谷出土土器7	92
図22	第4号住居跡 カマド …	38	図57	谷出土土器8	93
図23	第4号住居跡 出土遺物(1)	39	図58	谷出土土器9	94
図24	第4号住居跡 出土遺物(2)	40	図59	谷出土土器10	95
図25	第6号住居跡(第1号掘立柱建物跡付属) …	42	図60	谷出土土器11	96
図26	第6号住居跡 出土遺物	43	図61	工字文分類模式図	97
図27	第7号住居跡(第2号掘立柱建物跡付属) …	45	図62	変形工字文分類模式図	97
図28	第7号住居跡 出土遺物(1)	46	図63	装飾突起分類模式図	98
図29	第7号住居跡 出土遺物(2)	47	図64	谷出土土器12	106
図30	第8号住居跡・出土遺物	49	図65	谷出土土器13	107
図31	第9号住居跡・出土遺物(1)	51	図66	谷出土土器14	108
図32	第9号住居跡 出土遺物(2)	52	図67	谷出土土器15	109
図33	第10号住居跡・同カマド	53	図68	谷出土土器16	110
図34	第11号住居跡・同カマド	55	図69	谷出土土器17	111
			図70	谷出土土器18	112



図71 谷出土土器19	113	図94 石槍	153
図72 谷出土土器20	114	図95 石錐	154
図73 谷出土土器21	115	図96 石匙(1)	156
図74 谷出土土器22	116	図97 石匙(2)	157
図75 谷出土土器23	117	図98 石篋	158
図76 谷出土土器24	118	図99 不定形石器(1)	160
図77 谷出土土器25	119	図100 不定形石器(2)	161
図78 谷出土土器26	120	図101 不定形石器(3)	162
図79 谷出土土器27	121	図102 不定形石器(4)	163
図80 谷出土土器28	122	図103 不定形石器(5)	164
図81 谷出土土器29	123	図104 不定形石器(6)	165
図82 土製品(土偶1)	135	図105 磨製石斧	169
図83 土製品(土偶2)	136	図106 礫石器(1)	171
図84 土製品(土偶3)	137	図107 礫石器(2)	172
図85 土製品(土版)	138	図108 石製品	176
図86 土製品(その他1)	139		
図87 土製品(その他2)	140	表1 遺構内出土土器観察表(縄文時代)	19
図88 石鏃(1)	144	表2 第1号土坑出土石鏃計測表(弥生時代)	23
図89 石鏃(2)	145	表3 遺構内出土土器観察表(平安時代)	77
図90 石鏃(3)	146	表4 谷出土土器観察表	125
図91 石鏃(4)	147	表5 土製品観察表	141
図92 石鏃(5)	148	表6 石器計測表	150
図93 石鏃(6)	149	表7 石製品計測表	177

### 宇田野(3) 遺跡

図1 調査範囲	186	表1 土器観察表	190
図2 出土土器	188	表2 土器計測表	190
図3 出土石器	189		

### 草薙(3) 遺跡

図1 遺構配置図	192	図6 ピット群	199
図2 土坑(1)	194	図7 遺構外出土遺物	201
図3 土坑(2)	196		
図4 土坑出土遺物(1)	197	表1 土器観察表	214
図5 土坑出土遺物(2)	198	表2 土器計測表	214



# 第1章 発掘調査の概要

## 第1節 調査要項

### 1 調査目的

県営津軽中部地区広域営農団地農道整備事業の実施に先立ち、当該地域に所在する弘前市宇田野(2)、宇田野(3)及び草薙(3)遺跡の埋蔵文化財の発掘調査を行い、その記録保存を図り、地域社会の文化財の活用資する。

### 2 発掘調査期間

宇田野(2)遺跡 平成6年8月29日から同年10月28日まで(第一次調査)

平成7年4月24日から同年7月21日まで(第二次調査)

宇田野(3)遺跡 平成7年7月24日から同年9月1日まで

草 薙(3)遺跡 平成7年9月4日から同年10月6日まで

### 3 遺跡名及び所在地

宇田野(2)遺跡(県遺跡番号02221) 青森県弘前市大字小友字宇田野555、外

宇田野(3)遺跡(県遺跡番号02222) 青森県弘前市大字小友字宇田野365、外

草 薙(3)遺跡(県遺跡番号02219) 青森県弘前市大字大森字草薙77、外

### 4 発掘調査対象面積

宇田野(2)遺跡 5,000平方メートル

(第一次調査2,000m<sup>2</sup>、第二次調査3,000m<sup>2</sup>)

宇田野(3)遺跡 1,400平方メートル

草 薙(3)遺跡 2,000平方メートル

5 調査委託者 青森県農林部

6 調査受託者 青森県教育委員会

7 調査担当機関 青森県埋蔵文化財調査センター

8 調査協力機関 弘前市教育委員会、中南教育事務所

### 9 調査参加者

調査指導員 村越 潔 青森大学教授(考古学)

調査協力員 佐藤圭一郎 弘前市教育委員会教育長

宇田野(2)遺跡・宇田野(3)遺跡・草薙(3)遺跡

調査員 市川 金丸 青森県考古学会会長（考古学）  
高島 成侑 八戸工業大学教授（建築史）  
佐藤 仁 弘前市文化財審議委員（歴史学）  
山口 義伸 青森県立板柳高等学校教諭（地質学）  
赤平 智尚 青森県立柏木農業高等学校教諭（考古学）

調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター

平成6年度 宇田野(2)遺跡（第一次調査）

調査第二課 課長 三浦 圭介（現、教育庁文化課埋蔵文化財班長）

総括主査 白鳥 文雄（現、主幹）

主 事 山内 実

調査補助員 工藤朝之、斉藤昌、安孫子睦子、尾崎智恵子

平成7年度 宇田野(2)遺跡（第二次調査）・宇田野(3)遺跡・草薙(3)遺跡

調査第四課 課長 大湯 卓二

主 査 下山 信昭（現、今別町立大川平小学校教諭）

主 事 山内 実

調査補助員 斉藤昌、安孫子睦子、尾崎智恵子、中村満人

## 第2節 調査方法

### 1 グリッドの設定

(1) 宇田野(2)遺跡…道路建設用の中心杭No. 564を基準点とし、中心杭No. 564とNo. 565を結ぶ基準線をFラインとした。中心杭No. 564でFラインに直交する基準線を136ラインとして4 m四方のグリッドを設定した(文化課の試掘調査時に設定)。各グリッド杭の呼称は、中心杭No. 564(F-136)を基点として、南西へG, H, I…の順に、北東へE, D, C…の順にアルファベット文字を付すこととした。また、南東へ137, 138, 139…の順に算用数字を付して、アルファベットと算用数字との組み合わせで示した。なお、グリッドのアルファベットラインの基準線は、磁北から41度西へ傾いている。

(2) 宇田野(3)遺跡…道路建設用の中心杭No. 541を基準点とし、中心杭No. 541とNo. 542を結ぶ基準線をDラインとした。中心杭No. 541でDラインに直交する基準線を55ラインとして4 m四方のグリッドを設定した。各グリッド杭の呼称は、中心杭No. 541(D-55)を基点として、南東へC, B, Aの順に、北西へE, F, G…の順にアルファベット文字を付すこととした。また、南西へ56, 57, 58, …の順に算用数字を付して、アルファベットと算用数字との組み合わせで示した。具体的には、そのグリッドの南西隅の基準杭の表示によるものとした。なお、グリッドのアルファベットラインの基準線は、磁北から27度東へ傾いている。

(3) 草薙(3)遺跡…道路建設用の中心杭No. 640を基準点とし、中心杭No. 640とNo. 641を結ぶ基準線をFラインとした。中心杭No. 640でFラインに直交する基準線を60ラインとして4 m四方のグリッドを設定した。各グリッド杭の呼称は、中心杭No. 640(F-60)を基点として、北東へE, D, C…の順に、南西へG, H, I…の順にアルファベット文字を付すこととした。また、南東へ61, 62, 63…の順に算用数字を付して、アルファベットと算用数字との組み合わせで示した。具体的には、そのグリッドの南東隅の基準杭の表示によるものとした。なお、グリッドのアルファベットラインの基準線は、磁北から47度東へ傾いている。

### 2 発掘調査方法

標高原点(ベンチマーク)は、遺跡近くにある道路工事用の仮ベンチマークからレベル移動を行い、調査区域内に数箇所を設定した。

調査にあたっては、遺跡の土層の堆積状況を観察するために適宜セクションベルトを設け、グリッドごとに掘り進めていった。

遺構の調査は、原則として二分法・四分法で行い、土層を観察しながら精査を進めることとした。遺構等の実測図の縮尺は、10分の1、20分の1を必要に応じて使用することとした。

遺物の取り上げは、グリッド単位に層位ごとに行い、必要に応じて平面図を作成し、レベルを記録することとした。

土層の名称は、基本層序については表土から下位に向いローマ数字を、遺構内堆積土については上位から下位に向い算用数字を各々付すことにした。土層観察にあたっては『標準土色帖』を用い注記した。

写真撮影は、適宜行うこととし、カラーリバーサルとモノクロームの2種類のフィルムを使用することにした。

(山内 実)



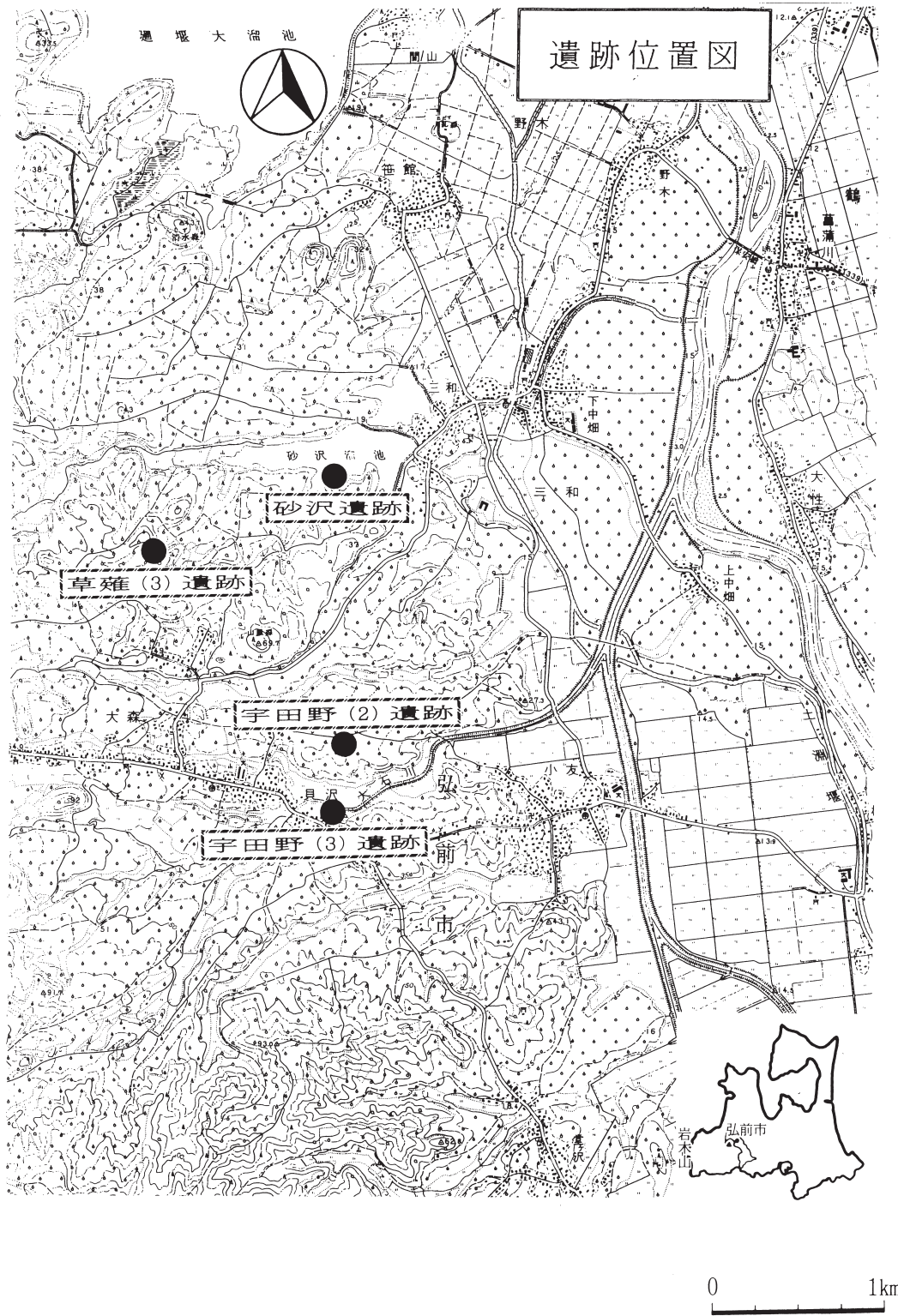


図1 遺跡の位置

## 第3節 調査の経過

### 1 宇田野(2)遺跡

平成6年8月29日、調査器材を搬入し、宇田野(2)遺跡の第一次発掘調査を開始した。調査は、文化課の試掘時に設定したグリッド(道路建設用のセンター杭の2本を基準とした中心軸線を設定)を利用して行った。

グリッドの設定後、20メートルおきに層序観察用のベルトを残しながら、粗掘りを行った。また、遺構の精査も確認順に行った。

調査の結果、遺構・遺物が多数出土した。

10月中旬に予定面積の2,000㎡をほぼ終了したが、第4号竪穴住居跡(焼失家屋)に関しては、調査期間内に精査を終了するのは不可能と判断し、次年度に継続調査を行った。

10月28日、第4号竪穴住居跡をシートや土のうで保護し、器材を越冬することとして、無事本遺跡の第一次調査を終了した。

平成7年4月24日、宇田野(2)遺跡の第二次調査を開始した。調査面積は、第一次調査の結果を受けて、調査区の北側にも範囲を延長することとなり、第一次調査の残り部分も含めて3,500㎡とした。

調査は、第4号住居跡の精査の続きと併行して、調査区の上物除去から行った。

遺物密集地点は、調査区の大半が、数メートルもの黒色土で覆われていることから、重機とベルトコンベアーを導入し、原地形の残存を確認の上、調査を行った。ここの堆積土層中から縄文時代前期の土器片や弥生時代前期の砂沢式土器などが段ボール箱で約150箱出土した。

また、グリッド100~125の平場の調査は、重機によって表土除去後に、遺構精査を行った。しかし、第8・12号竪穴住居跡に農道がかかるため、利用農家の承諾を得て、8月上旬に付け替え道路を設置し、調査を継続した。

調査の結果、遺構・遺物が多数出土した。

7月21日、調査器材を宇田野(3)遺跡に搬送し、宇田野(2)遺跡の調査を無事終了した。

### 2 宇田野(3)遺跡

本遺跡の調査は、上物の撤去とグリッド設定から行った。重機によって表土を除去し、粗掘りを開始した。しかし、遺構の存在は確認できず、遺物もごく少量の出土であったため、調査委託者と協議を行い、調査期間の短縮を決定し、次に予定していた草薙(3)遺跡の発掘調査を繰り上げて行った。

9月1日、調査器材を草薙(3)遺跡に搬送し、宇田野(3)遺跡の調査を無事終了した。

### 3 草薙(3)遺跡

本遺跡は、畑地造成等による削平によって、遺跡が消滅している可能性が高いことが考えられ、試掘調査を先行して行った。

調査の結果、土坑が集中して6基検出された以外には、遺物が散発的に出土するだけであった。北側半分は、黒色土の残存が確認されず、この部分はすでに削平されていた。

このため、調査委託者と協議を行い、草薙(3)遺跡に関しても、調査期間の短縮を決定し、本年度当初の予定にはなかった、弘前市十面沢に位置する轡(2)遺跡の調査を行うこととなり、10月6日、器材を移動して、無事草薙(3)遺跡の調査を終了した。

(山内 実)

## 第2章 遺跡周辺の地形及び地質

青森県立板柳高等学校教諭 山口 義伸

宇田野(2)・(3)遺跡は弘前市大字貝沢に所在する。岩木山頂から約10km北東方にあって、放射谷である大石川が本流の岩木川と合流する地点より約2km西方の中位段丘上に立地し、標高約30~40mである。本遺跡より約2km北方には藩政時代に築造された砂沢溜池があり、また約4km北方には「津軽富士見湖」と呼ばれる廻堰大溜池が位置する。なお、砂沢溜池内には砂沢遺跡が立地している。一方、草薙(3)遺跡は岩木山北東麓の大森北方約2km地点にあって、台地縁辺部に構築された砂沢溜池に注ぐ小谷沿いに位置する(図2)。

この付近の主な水系としては鳴沢川、長前川、大石川などがある。北麓の鳴沢川はその最上流部が岩木山の放射谷である大鳴沢となり外輪山にあたる岩鬼山に源を発する。流域には標高600m付近を扇頂部とする古期の山麓扇状地が展開し、勾配が100/1000とかなり急である。鳴沢川は古期扇状地面のほぼ中央部を北流し、また扇状地内に谷頭をもつ支流の湯舟川は鳴沢川西方を同じく北流し平野部側の鱒ヶ沢町湯舟付近で合流する。東麓寄りの大石川は標高1300~1400m付近に展開する爆裂火口跡に源を発する赤倉沢に連続する。大鳴沢流域と同様に、流域には標高400~500m付近を扇頂部とする古期扇状地が展開する。長前川は山頂北側に位置する扇ノ金目山に源を発し、下流部に築造された小戸六溜池に注ぐ。なお、長前川は大鳴沢流域及び東方の赤倉沢流域に展開する古期扇状地の接合部付近を流れる。この他、山麓扇状地内を流れる数多くの浸食谷があり、台地縁辺部に築造された小戸六溜池・廻堰大溜池・砂沢溜池などへ注ぐ(図2)。

岩木山北東麓の十面沢及び十腰内付近は岩木火山の噴火史を知る上で特徴的な地形を有する。一つは標高140~150m以下の丘陵地内に伝次森山・御月山など直径500m以下の円錐形をなす小丘が点在することである。図2に示したように、主に長前川と大石川の谷間丘陵地にあって、「十面沢円頂丘群」と呼ばれる小丘群は輝石安山岩質の火砕岩及び溶岩からなり「十腰内石」として採石されている。おそらくは現岩木火山の噴火活動以前の、言わば先岩木火山の一連の火山活動と考えられる(鈴木,1972)。ただ、これらの小丘群は赤倉沢から流出した泥流堆積物によって形成された泥流丘群とする見解もある(一色・大沢,1967)。もう一つは、この付近には水蒸気爆発により古岩木火山の山体崩壊で供給された岩屑なだれ堆積物が広く堆積していることである。図3に示したように、この堆積物は安山岩質の岩塊及び垂角礫~垂円礫(一部は風化する)を多量に取り込んだ塊状の粘土質(砂質)凝灰岩であって、十面沢円頂丘群の裾野部分を被覆した標高140~150m以下の起伏に富む谷間丘陵地を構成する。なお、一部は中位段丘相当の山田野段丘面上になだらかな小丘状の分布をなす。この丘陵地をなす岩屑なだれ堆積物は湯ヶ森遺跡の稜線部、湯舟遺跡付近の丘陵地(標高88.0m)及び長平北方の和開(標高190m)などで中部火山灰層に直接覆われ、また夕日ヶ丘開拓では基盤の山田野層に不整合に厚さ数~10mに及ぶ岩屑なだれ堆積物が載るのを確認している。中部火山灰層は上半部が褐色粘土質ロームからなりローム直下には洞爺火山灰(10~12万年前の噴火)に比定される白色細粒軽石層が薄く堆積する。下半部は黄褐色ラピリ質軽石層と暗緑灰色ロームの互層が3~4枚のセットで堆積する。岩屑なだれ堆積物からなる谷間丘陵地周縁の平野側には山田野段丘が発達し洞爺火山灰を載せる



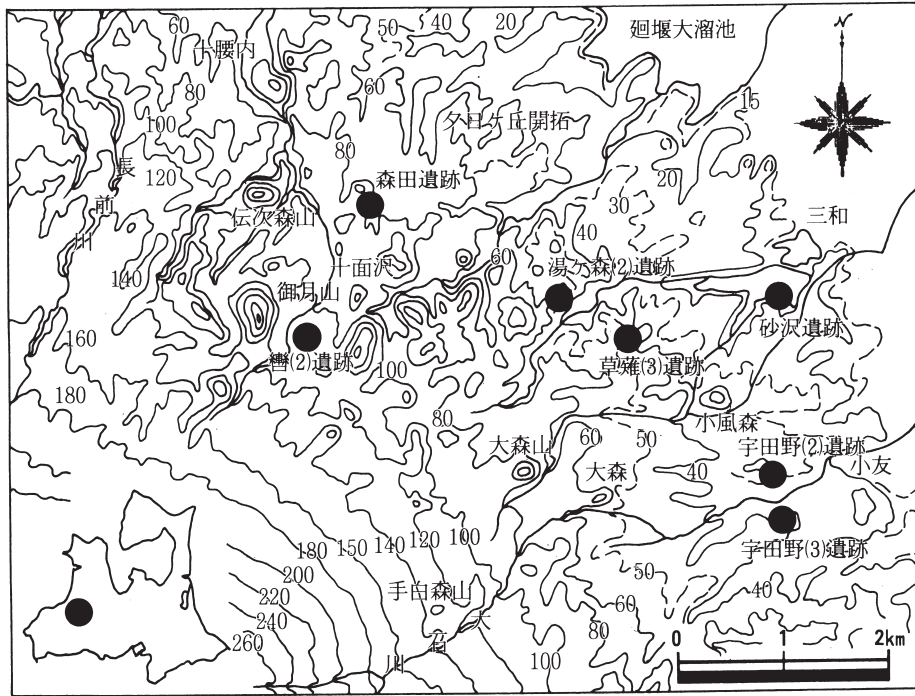


図2 岩木山北東麓の等高線図

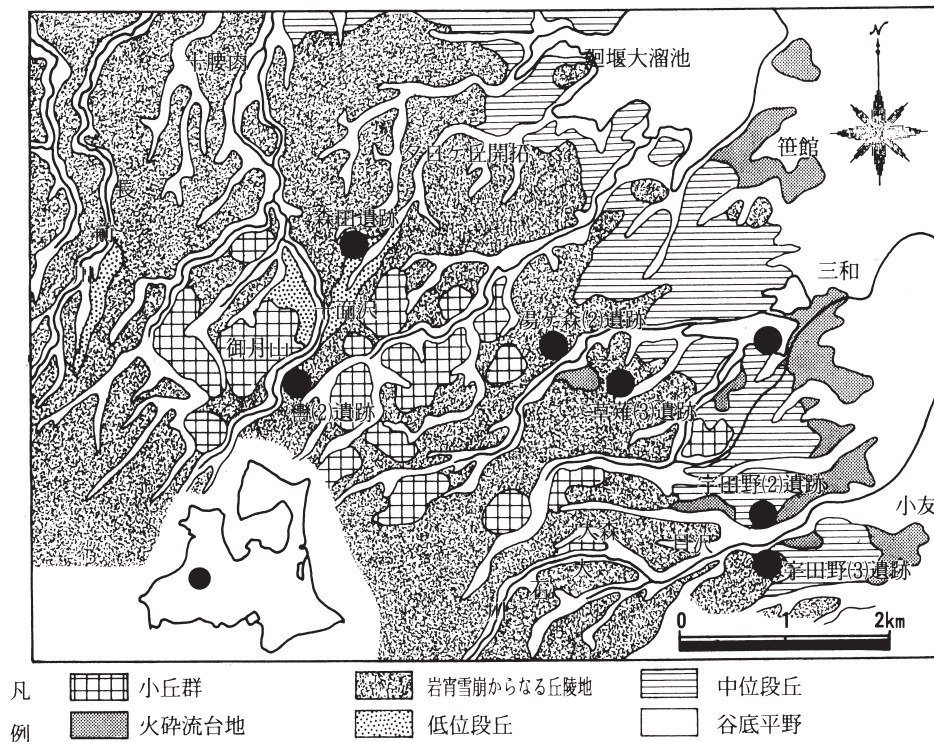


図3 岩木山北東麓の地形分類図

中部火山灰上半部に覆われる。

次に、岩木山南麓から大石川以南の東麓にかけては杉沢森・高長根山・黄金山などを連ねた弧状の火山性丘陵地が展開する。この丘陵地は基盤岩を覆う古岩木火山の火山噴出物によって構成される。丘陵地は火山体側の扇状地面から60～80m程の比高を有し、火山体側の相対的な沈下によって形成されたもので断層崖が認められる（鈴木，1972）。十面沢及び十腰内付近にはこのような弧状の丘陵地は認められない。しかし、標高140～150mを境に火山体側には古期扇状地が展開し、その外側には上述した岩屑なだれ堆積物からなる丘陵地が分布する。このことから判断して、丘陵地内側には南麓から延びる環状断層が北東麓から北麓にかけて存在するものと思われる。

ところで、岩木火山の南麓から東麓にかけては少なくとも新旧2枚の山麓扇状地が展開し、主に弧状丘陵地の火山体側に分布する。上述のように、古期の山麓扇状地は標高500～600m付近を扇頂部とし、標高140～150m付近を扇端部とする円弧状の地形的な配置をなす。なお、古期の山麓扇状地の一部は北麓の湯舟川西岸に位置する鯉ヶ沢町長平・和開付近と鳴沢川～鍋川間の大平野付近にもあって、丘陵地を流れる鳴沢川流域沿いに分布する。鳴沢川の浸食により環状断層を乗り越えて丘陵地へと舌状に張り出したものと思われる。丘陵地内の分布は山麓部と違ってきわめて平坦であって、現在扇状地面は水田として土地利用され面内に谷頭をもつ小谷を堰き止めた灌漑用の溜め池が数多く見られる。新期の山麓扇状地は古期扇状地を浸食する放射谷流域や岩屑なだれ堆積物からなる丘陵地を浸食する小谷沿いに小規模に発達する。なお、大石川流域及び砂沢溜池に注ぐ小谷の流域内には小規模ながら谷底を埋積した火砕流堆積物が認められる。この堆積物は平野縁辺部に断片的に分布し、火砕物中の炭化した樹幹の年代測定では37,000年以上前の数値が得られている（山口，1993）。

宇田野遺跡は岩木山北東麓の弘前市貝沢に所在する。北方には山風森が、西方には大森山があつていずれも十面沢円頂丘群に相当する。遺跡周辺には岩屑なだれ堆積物からなる丘陵地が広く展開し中位段丘へとほぼ連続する。段丘面前縁部及び浸食谷の流域内には小規模ながら火砕流台地が分布する。そして、平野部においては岩木川が蛇行しながら北流している。流域には微高地としての自然堤防が発達し、青女子、種市、中畑などの集落が点在しまたりんご園として土地利用されている。後背湿地は水田として土地利用されている。

宇田野(2)・(3)遺跡は大石川下流域にあつて大森付近に谷頭をもつ支流との合流点に立地している。宇田野(2)遺跡の調査区域は大石川北岸の中位段丘面に立地し標高35～40mと比較的平坦な面である。本遺跡の立地する中位段丘面は大石川流域及び段丘前縁部が火砕流堆積物で覆われ、調査区域内にもその堆積物の一部が堆積している。調査区域東端部は標高25～30mの大石川に臨む小さな谷地形であつて、りんご園造成でかなり盛り土されている。基本層序第II層の段階では深い谷で、縄文時代前期の遺物廃棄ブロックを包含する第IV層の段階では幅の広い馬蹄状の浸食地形を成していたと思われる。一方、宇田野(3)遺跡の調査区域は大石川南岸の急傾斜地に位置している。標高35～45mであり、現河床面から比高10m程の急傾斜地で、ちょうど蛇行する大石川の攻撃斜面側に立地している。傾斜地での黒色土の堆積は宇田野(2)遺跡の東端部に位置する谷地形内と同様に非常に厚い。なお、本遺跡はやや起伏に富む岩屑なだれ堆積物からなる丘陵地及び東方に展開する平坦な中位段丘上に立地している。

草薙(3)遺跡の調査区域は標高35～45mの岩屑なだれ堆積物からなる丘陵地上に立地し、小谷に向



かう北斜面が対象である。遺跡周辺は浸食による起伏に富む谷間丘陵地であり、りんご園の造成によりかなり削平されている。本遺跡南東方には山風森が、南西方には大森山が位置し、十面沢円頂丘群に相当すると思われる円錐丘をなしている。遺跡東方にはきわめて平坦な中位段丘が展開しりんご園として土地利用されている。なお、小谷の流域には一部において火砕流堆積物が確認でき小規模な台地を成している。本遺跡東方に立地する砂沢遺跡での水田跡は中位段丘面から火砕流堆積物で埋積された谷地形にかけての平坦面で検出されたものである。

次に、宇田野(2)・(3)遺跡の調査区域内における基本層序について記述する。調査区域内はりんご園造成のためかなり削平され基本層序の第Ⅳ層あるいは第Ⅴ層あたりまで攪乱されている。このため第Ⅴ層までの混合層が厚さ20~30cm程の耕作土として堆積していることが多い。第13号住居跡で確認したように、一次的な堆積を示す地点での遺構確認面はおよそ基本層序の第Ⅱ層直下であって、主に平安時代の遺構が検出され遺物も出土している。(図4・図5)

#### I層 黒褐色土 10YR2/3 (厚さ10~20cm)

耕作土。粘性・湿性がなく、かたさはあるが締まりなく脆い。軽石など下位層のブロック状(径2~30mm大)の混入が目立ち、炭化粒の混入も多少みられる。乾くと淡黒灰色に変色し、部分的に苔の発生が認められる。台地縁辺部ではI a層及びI b層に細分され、下位のI b層は粘性・湿性がありややかたく締まっている。

#### II層 黒色腐植質土 10YR2/1 (厚さ約10cm)

粘性・湿性があり、全体的には腐食質でソフトな感じもするが締まりがみられる。軽石粒及炭化粒・焼土粒の混入が多く認められる。乾くとクラックが発達する。耕作による削平及び攪乱を受け、台地縁辺部を除いては本層全体が欠如するかブロック状の堆積を示すのみである。なお、調査区域内で検出した遺構は少なくとも本層直下で確認している。ところで、宇田野(2)遺跡の調査区域東端部の160~170ラインに位置する谷地形内には湿地性の黒泥質土が100cm以上と厚く堆積している。本層相当層は約50~100cmと厚い黒泥質土で下位層を浸食する深い谷地形をなし、土層中には未分解の植物繊維(葦)が何層にも堆積している。

#### 間層 黒褐色粘質土 10RY2/3 (厚さ約20~100cm)

谷地形内の堆積物である。粘土質でややかたく締まっている。最上部には苔小牧火山灰(B-Tm)がブロック状に堆積し、中部には谷地形に投棄されたと思われる焼土ブロックがレンズ状に堆積している。なお、本層からは弥生時代及び平安時代の遺物が出土している。

#### III層 黒色粘質土 10YR1.7/1 (厚さ10~20cm)

全体的に粘土質でかたく締まった感じがする。上位の第III層と比して全体的にローム粒等の混入が少ない。谷地形内にあっては、厚さ約20~40cmの腐植質及び粘土質で遺物の混入は認められない。

#### IV層 暗(黒)褐色土 10RY3/4(3/2) (厚さ10~30cm)

漸移層である。粘性・湿性がありかたく締まっている。風化した軽石の粒及びブロックの混入が目立つ。混入の程度によりIV a層とIV b層に細分される。下部のIV b層は軽石ブロックの混入が多く色調の明るい暗褐色の軽石混じりの土層であって、かたく締まっている。上部のIV a層はかなり土壌化が進み黒褐色土を呈している。本層もIV層同様に攪乱を受けている

ことが多く、全体的にブロック状の堆積を示している。調査区域東端部の160～170ラインの谷地形内では粘土質土であって、IV a 層相当層には、縄文時代前期の遺物が密集していて遺物廃棄ブロックを成している。

V 層 明黄褐色ラピリ質軽石層 10YR6/8 (厚さ10～30cm)

緻密堅固である。ラピリ質細粒軽石層で径5～10mm大の軽石粒が目立つ。谷地形内では本層～第V層まで浸食により欠如し、平地では攪乱の影響が少なく層状に堆積している。碓ヶ関浮石(山口,1993)に対比され、約12,000～13,000年前に十和田火山を噴出源として降下堆積したものと考えられるが、岩木火山周辺で約30～50cmと厚く堆積しているため同火山からの供給も考えられる。

VI 層 灰褐色細粒軽石質粘土 (厚さ50～80cm)

かたく締まりのある細粒軽石質(ローム質)粘土である。最上部には暗色帯(厚さ5～10cm)の特徴がみられクラックがよく発達している。

VII 層 明黄褐色細粒火山灰質軽石層 (厚さ30～80cm)

のV層と酷似する。軽石粒のあまり含まないラピリ質細粒軽石層である。第V層と同様に重鉱物組成では磁鉄鉱>紫蘇輝石≧普通輝石を示し角閃石は含まれない。岩木火山周辺で約50cmと厚く堆積している。第V層及び本層は本県における低位段丘の指標火山灰であり、上位の第V層が厚く堆積し下位の第VII層は第V層下部の凹部にレンズ状に堆積することが多く厚さは約20～30cmと平均的である。このことから両層はほぼ同一噴火による火山灰と考えられ、山口,1993も碓ヶ関浮石としてセットで記載している。

VIII 層 灰白色凝灰質砂質粘土層 (厚さ約20cm)

本層は津軽平野縁辺部の火砕流台地を構成する軽石流凝灰岩に対比される。この軽石流凝灰岩は住吉軽石流凝灰岩(鈴木,1972)に相当する。本層及び本層の再堆積相は中位段丘を浸食する谷地形を埋積したり段丘面前縁を被覆するように堆積している。この事実は下恋塚遺跡・砂沢遺跡及び草薙遺跡周辺そして本遺跡よりやや西方の大石川支流域に位置する草薙小学校校庭でも確認している。

IX 層 淡灰褐色ローム(厚さ30cm)

緻密なロームからなる暗色帯で、クラックの発達が顕著である。本層以下には岩木火山起源の赤褐色粘土質火山灰(ローム)が100～200cmと厚く堆積し中位段丘を構成している。

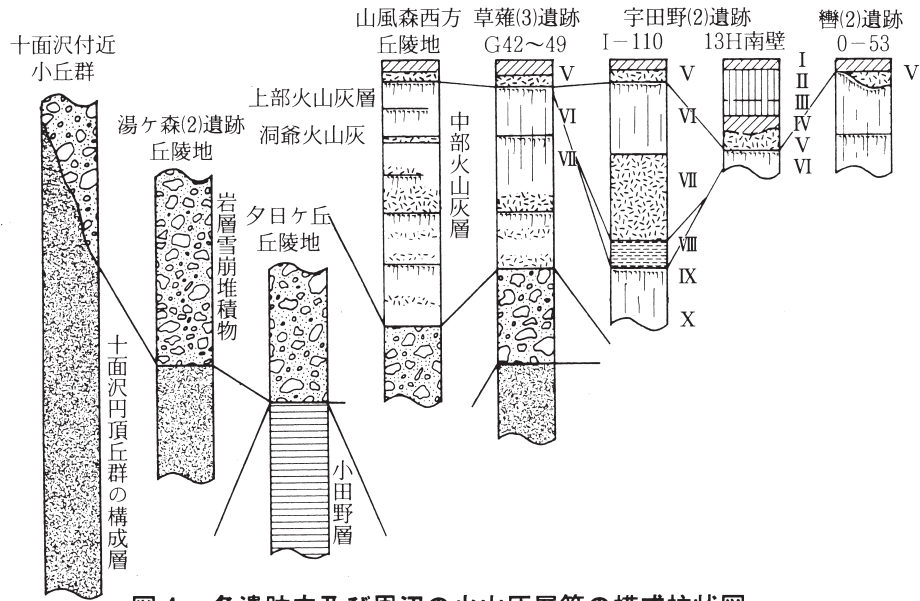


図4 各遺跡内及び周辺の火山灰層等の模式柱状図

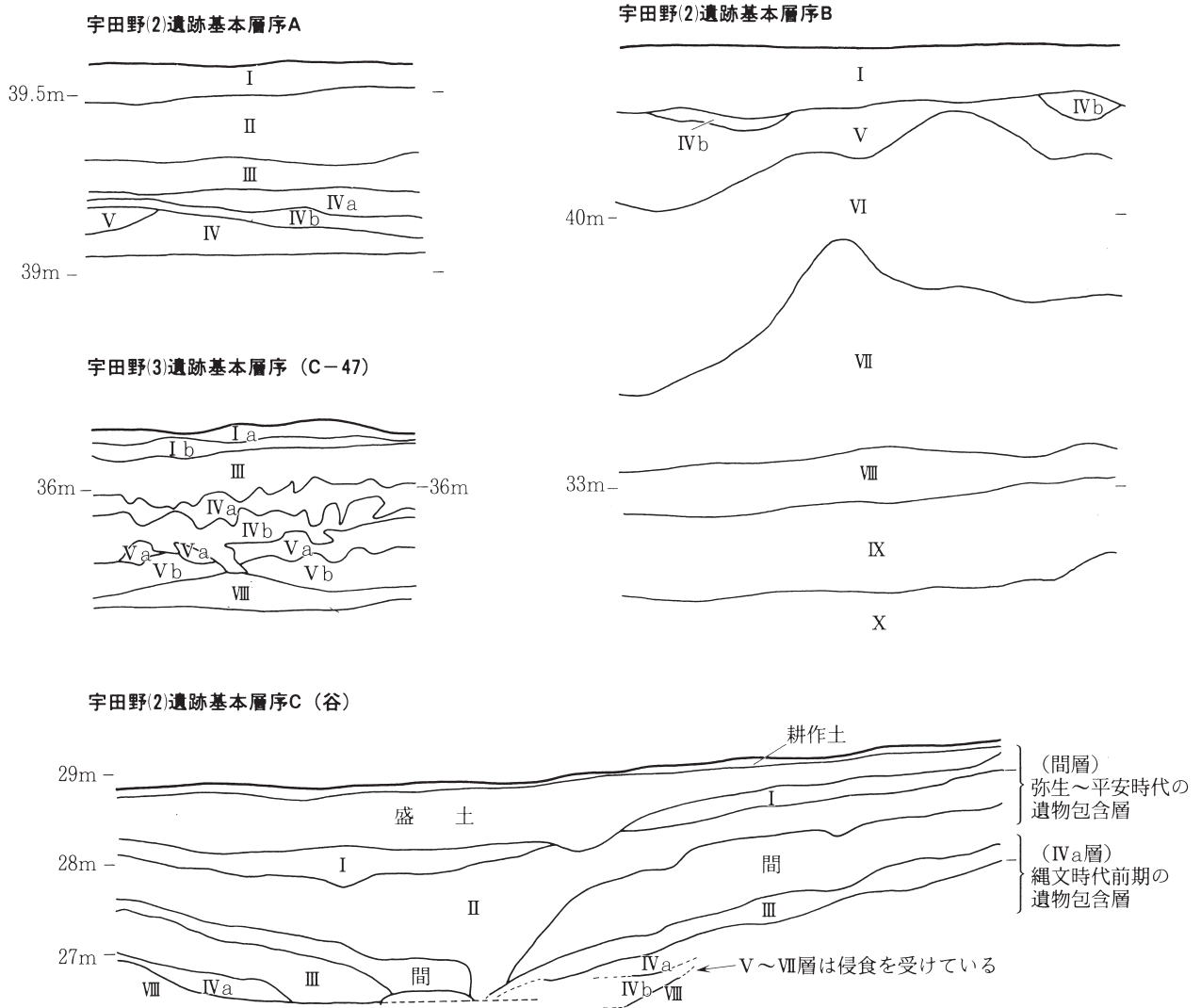


図5 宇田野(2)・(3)遺跡の基本層序

次に、草薙(3)遺跡の基本層序は調査区域のうちG-42グリッド及びG-49グリッドにおける土層区分を基に記述する。図4には本遺跡周辺における土層の模式柱状図を、図6には調査区域内のセクションを表したが、調査区域全体がりんご園造成のために削平され基本層序の第IV層上部まで攪乱を受けている。このため、遺跡周辺における土層区分を補足した上で本調査区域の基本層序を確立した。なお、調査区域北西側の谷への傾斜地にあたるF-24~26付近には古い地層である十面沢円頂丘群を構成する安山岩質凝灰岩がりんご園造成による削平で耕作土直下で確認でき、また東側のF-28~29付近では岩屑雪崩堆積物が同様に確認できた。尾根筋にあたるG-42・49では上部火山灰層及び中部火山灰層の堆積が見られる。

I層 暗褐色土 10YR3/4 厚さ20~30cm。

耕作土である。粘性・湿性がややあり、かたさがあるが締まりにやや欠け全体的にソフトな感じがする。耕作により下位の第IV層まで攪乱され混合土となっている。ローム粒及び軽石粒などの混入が多くみられる。

II層 黒色腐植質土 10YR2/1 厚さ10~30cm。

腐植質で粘性・湿性が十分である。

III層 黒色粘質土 10YR1.7/1 厚さ約10cm。

粘性・湿性が十分である。ローム粒及び軽石粒などの混入が少なく、乾くとソフトな感じがする。

IV層 暗褐色土 10YR3/4 厚さ10~30cm。

漸層で、粘性・湿性がありかたく締まる。2層に細分され、下部のIVb層ほどロームブロック及び軽石粒の混入が多く、明るい色調を呈する。

IV層 黄褐色ラピリ質軽石層 10YR5/6 厚さ30~50cm。

緻密堅固な細粒軽石層で、層相から2層に細分される。上部のVa層は、径5~30mm大の軽石粒が多量の混入し、下部のVb層はラピリが目立つ。なお、宇田野(2)遺跡では本層相当層をV層とVII層とに細分される。間層のVI層はローム層であり、クラックが発達し暗色帯の特徴を有する。本層は上部火山灰層に相当し、低位段丘面及び新期山麓扇状地を構成する山灰層の指標となる。

VI層 明黄褐色ローム層 10YR6/6 厚さ10~20cm。

緻密堅固な粘土質ローム層で、クラックの発達がみられ暗色帯の特徴を有する。

VII層 黄褐色ローム層 10YR5/4~10YR5/8厚さ80~100cm。

緻密堅固な粘土質ローム層である。下位には褐色粘土質ローム層(7.5YR4/4~7.5YR4/6)が100cm以上堆積し、ローム層中には薄層の黄灰色粘土質ロームが波打つように2~3枚堆積する。本層以下のローム層は中部火山灰層に相当する。なお、中部火山灰層上半部は粘土質ローム層が主体でローム層直下には洞爺火山灰に比定される白色細粒軽石層が薄く堆積する。下半部はラピリ質軽石層と緑灰色ローム層の互層が主体を成している。洞爺火山灰層より上位のローム層は中位段丘及び古期の山麓扇状地を構成し、下半部の軽石層を含む中部火山灰層全体を堆積するのは岩屑なだれ堆積物による丘陵地である。



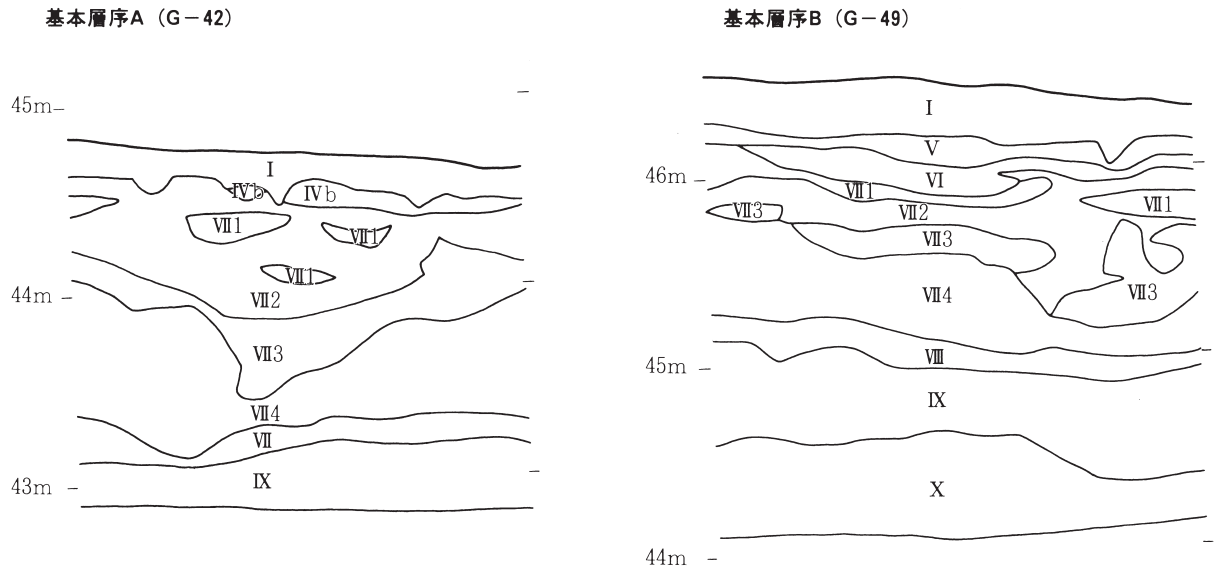


図6 草薙(3)遺跡の基本層序

参考・引用文献

- 大沢 穠 1961 5万分の1地質図幅「弘前」(青森-第28号)同説明書 地質調査所  
 一色直記・大沢 穠 1967 岩木火山北東麓の泥流丘群 火山, Vol. 2 .No.12- 3  
 中川久夫 1972 青森県の第四系 青森県の地質 第二部 青森県  
 鈴木隆介 1972 岩木山の変位 地理学評論45号  
 山口義伸 1993 平川流域での十和田火山起源の浮石流凝灰岩について  
 年報 市史ひろさきNo.2 弘前市





## 第3章

### 宇田野(2)遺跡の検出遺構と出土遺物

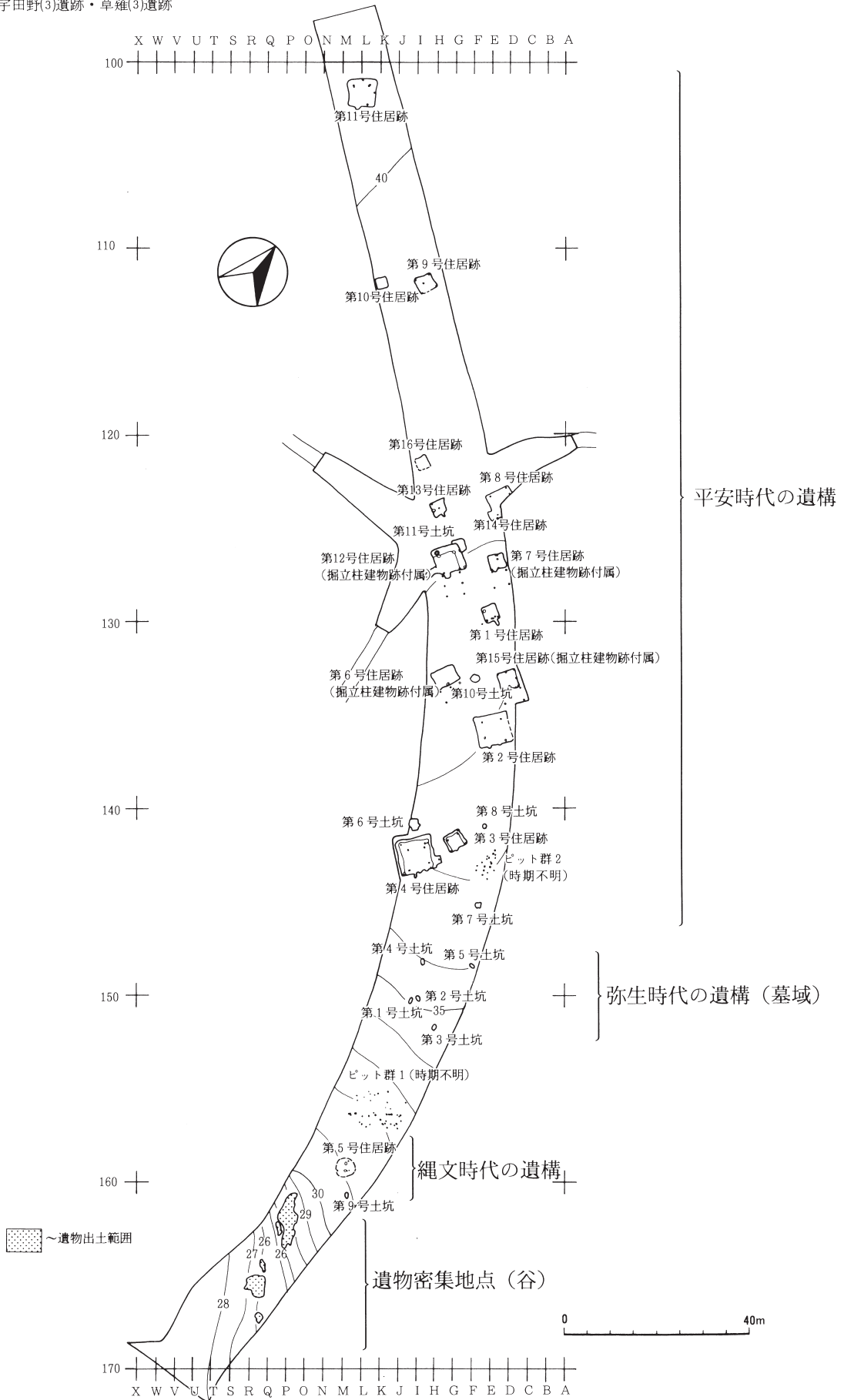


図7 遺構配置図

## 第1節 検出遺構と遺構内出土遺物

本遺跡の調査で検出した遺構は、住居跡16軒（うち、掘立柱建物跡が付属するもの4軒）・土坑11基・ピット群2ヶ所である。記載する遺構番号は、調査時の番号をそのまま使用することとした。以下に、時代ごとにその概要を記述する。

また、調査区南端の谷部分から、遺物密集地点（以下、「谷」とする）を1ヶ所確認し、段ボール箱で約200箱分相当の遺物が出土した。谷出土の遺物については、第2節「遺構外出土遺物」の項でまとめて記述する。

### 1 縄文時代の遺構と出土遺物

本遺跡で検出された縄文時代の遺構は、住居跡1軒と土坑1基である。

#### (1) 住居跡（図8・図9）

##### 第5号住居跡

〔位置〕 L・M-156・160グリッドに位置する。V層上面に黒褐色土の円形プランを確認した。本住居跡の南側には、第9号土坑が隣接する。

〔平面形・規模〕 本住居跡の東側の一部は攪乱を受け、西側は削平されているため、明確な規模は確認できなかったが、柱穴の位置などから、直径約4m程の円形になると思われる。

〔壁・床面〕 壁の残りはわずかだが、緩やかな立ち上がりの一部確認できた。壁は確認面から約15cm程掘り込んであり、床面はほぼ平坦であるが、踏み締まりなどの硬い部分は認められない。

〔ピット・柱穴〕 住居内から、4個のピットを検出した。これらのうち、支柱穴と考えられるものは、ピット1である。ピット2～4は、炉を挟んでほぼ対象的に位置する。

〔炉〕 土器埋設炉である。住居のほぼ中央に位置するものと考えられる。炉は3個体の土器で作られている。口縁部破片を周囲に埋設後、底面より12cm程の厚さでロームを埋め、その上に胴部破片が敷設されている。また、炉の北東部分からは、焼土を検出した。炉内からは焼土は確認できない。

〔堆積土〕 住居内堆積土は2層に分層できた。主な堆積土は黒褐色土で、炭化物・ローム粒が層全体に含まれている。人為的な堆積によるものと考えられる。

〔出土遺物〕 炉に使用されていた土器及び堆積土中より胴部の破片数点が出土し、いずれも縄文時代中期の円筒上層c式土器に比定される。

〔小結〕 本住居跡は、土器埋設炉をほぼ中央に有する住居跡である。構築時期は、土器埋設炉に使用された土器から、縄文時代中期円筒上層c式期と考えられる。

#### (2) 土坑（図8・図9）

##### 第9号土坑

〔位置〕 L-160・161グリッドに位置する。

〔規模・形状〕 開口部が123cm×76cm、底面が9cm×68cmで、深さは確認面から17cmである。平面形は楕円形、断面形状はナベ形である。

〔壁・底面〕 IV層を掘り込んで壁面としている。底面はほぼ平坦だが、東西に段が多少認められる。

〔堆積土〕 粘土の混入が多い1層である。人為的な埋め戻しが行われたと考えられる。

〔出土遺物〕 堆積土中から主に縄文時代前期の円筒下層式土器の胴部破片が数点出土した。

〔小結〕 本土坑は、出土した土器から縄文時代前期以降に構築されたと思われる。

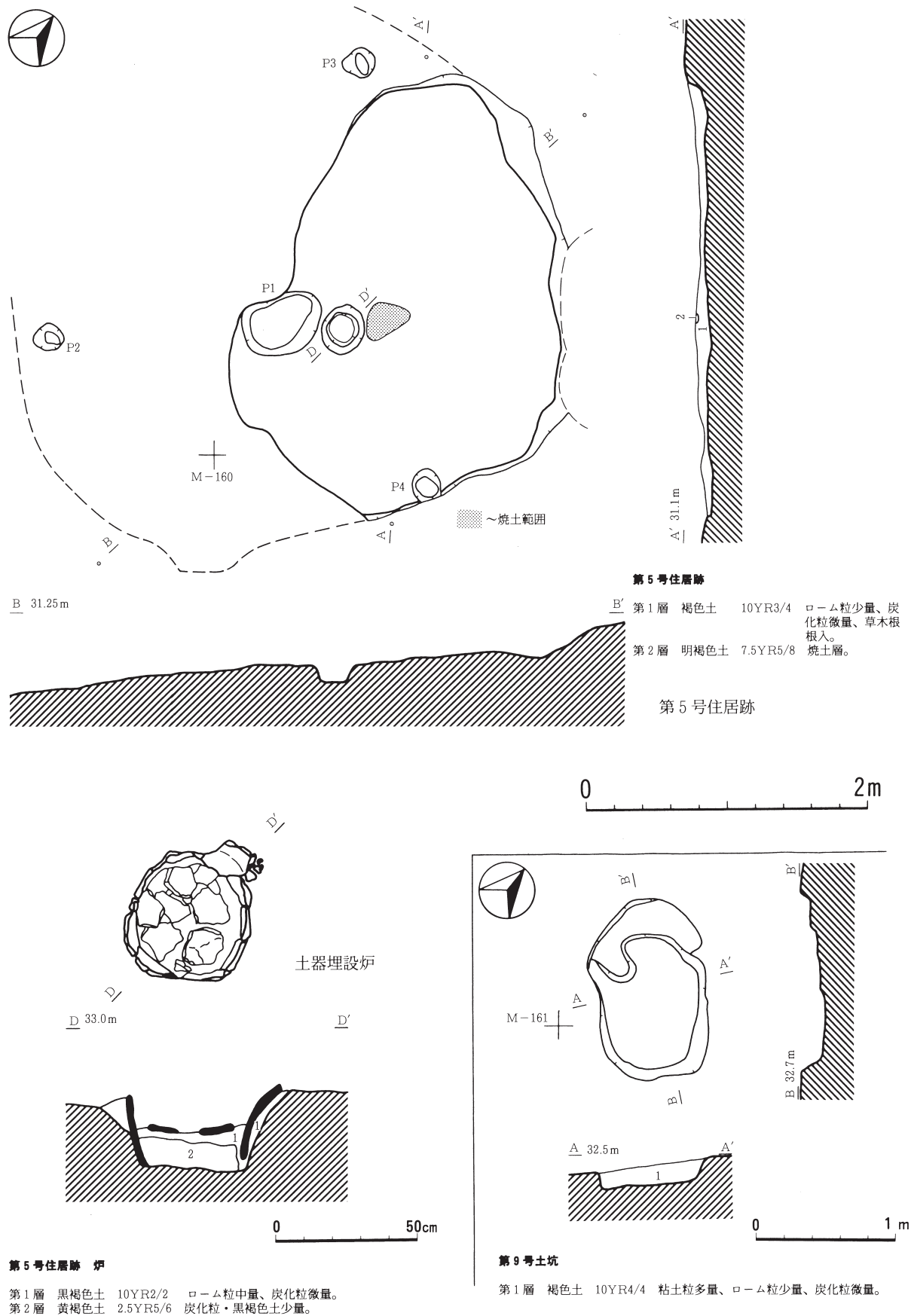


図8 縄文時代の遺構

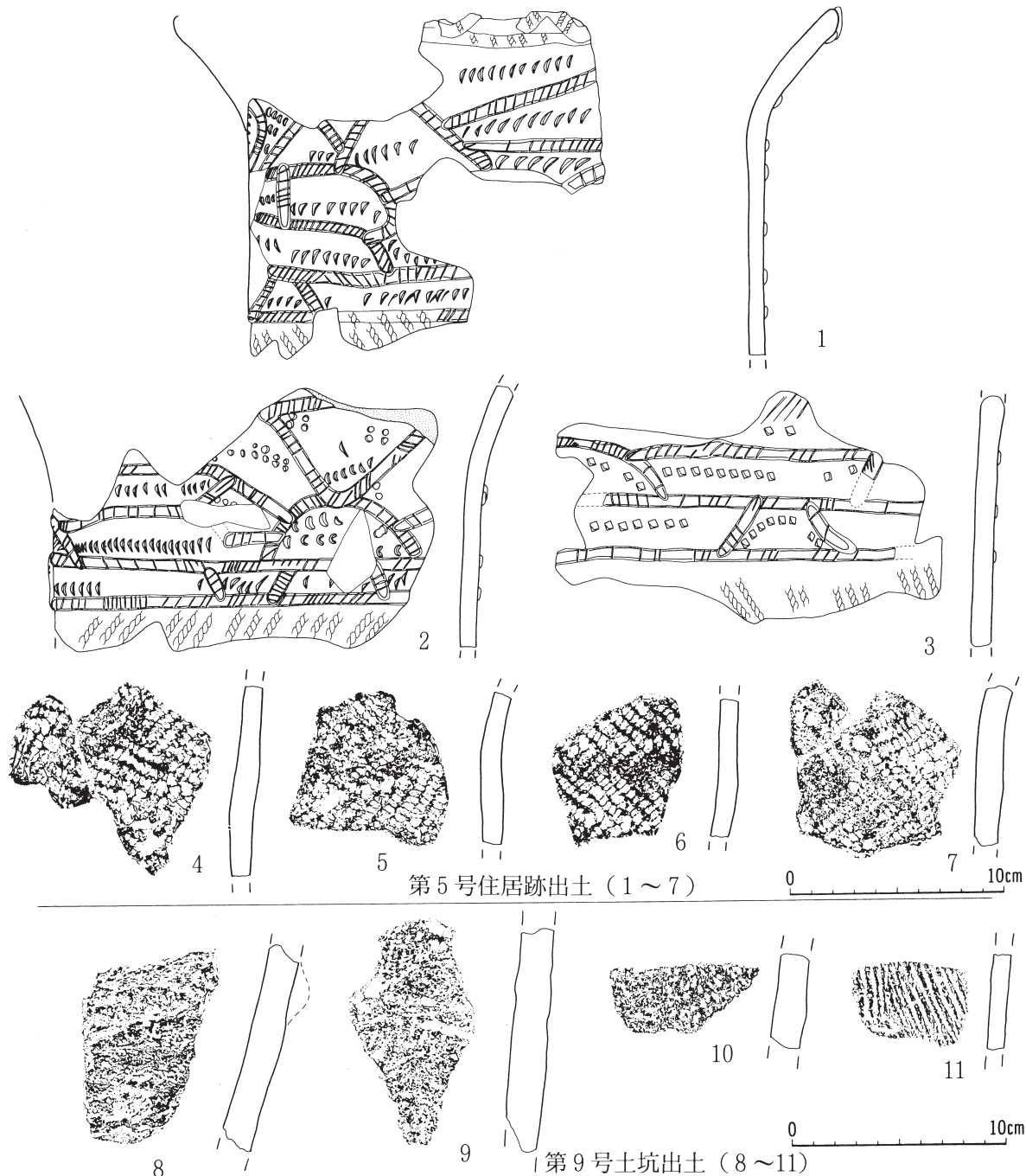


図9 縄文時代の遺構内出土遺物

図版番号	遺構名	層位	器形	部位	施文文様	分類	備考
図9-1	第5号住居跡	土器埋設炉	深鉢	口～胴	粘土紐隆帯貼り付け、隆線の間に連続刺突文	縄文中期	円筒上層c式
-2	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
-3	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
-4	〃	覆土	〃	胴部	羽状縄文	〃	〃
-5	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
-6	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
-7	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
-8	第9号土坑	覆土	〃	口縁	隆帯剥落、結節回転文	縄文前期	円筒下層a式
-9	〃	〃	〃	胴部	結節回転文	〃	〃
-10	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
-11	〃	〃	〃	〃	絡条体回転文	〃	〃

表1 遺構内出土土器観察表（縄文時代）

## 2 弥生時代の遺構と出土遺物

今回の調査で検出された弥生時代の遺構と考えられるものは、土坑5基である。これらは、F～I—148～152グリッドの緩斜面上にまとまって位置し、土坑墓域の一部として捉えることが可能である。

墓として機能したものの条件には、土坑中の遺骸の残存や遺体層の堆積があげられる。本土坑では、それらの確認は出来なかったが、副葬品と思われる石鏃やベンガラが複数出土し、成人遺体を埋葬するのに十分な規模を持つなどの条件から墓と推定される。また、構築時期についても、土坑の特徴や出土遺物、また、50m程南に離れた遺物密集地点（谷）から大量の弥生時代の遺物が出土していることから、弥生時代の墓域と考えた。

土坑の配置は、下図のように第1・2号土坑が隣接する他は、10m程離れて独立した形で位置する。しかし、今回の調査区は、幅15m前後の狭い範囲のため、本土坑を含めた墓域の全容は不明である。

なお、出土遺物の詳細については、「3 縄文・弥生時代の遺構内出土遺物の観察」の項にまとめて記載した。

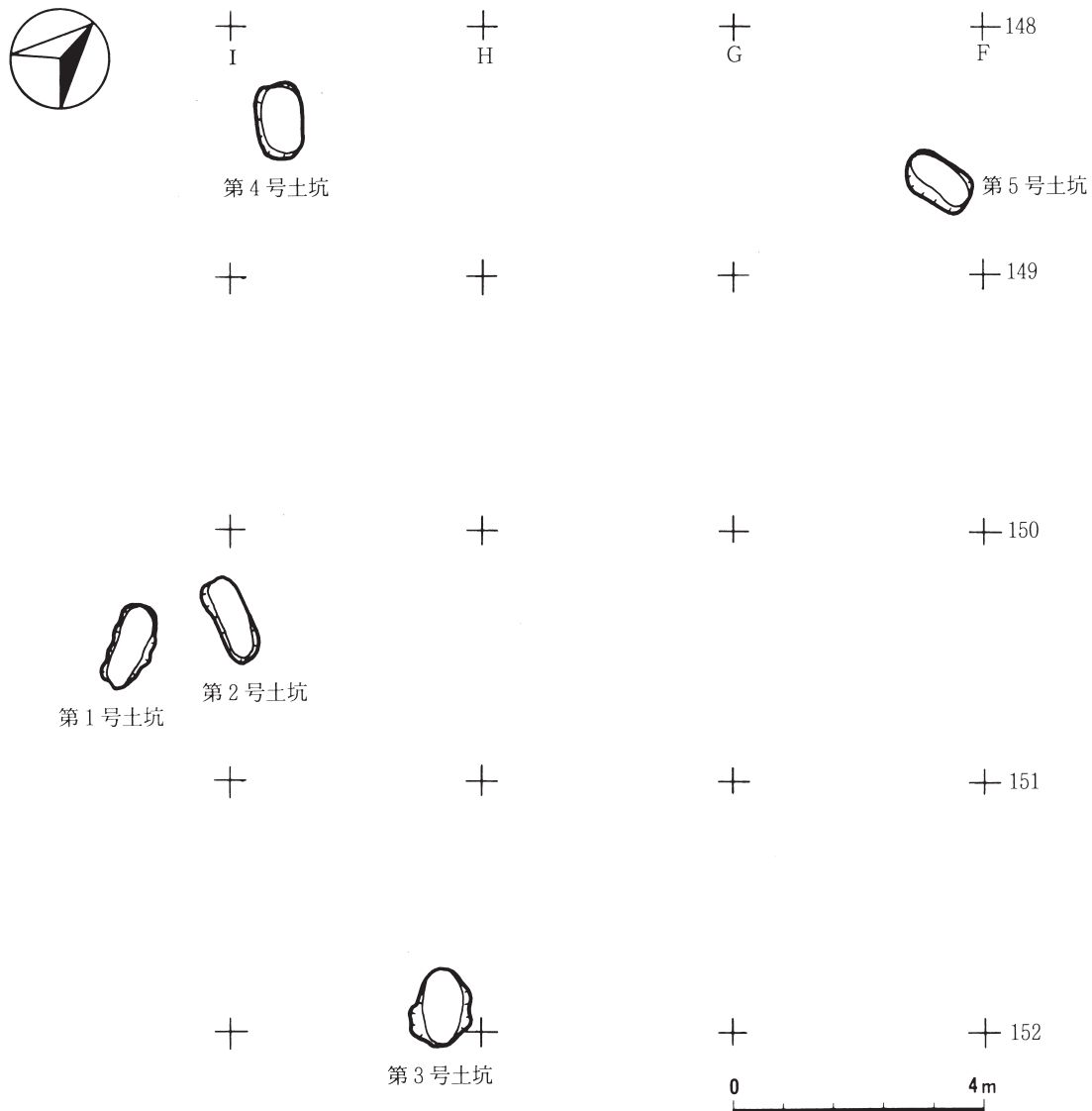


図10 弥生時代の土坑配置図



土 坑

第1号土坑 (図11・12)

〔位置〕 I—150グリッドに位置し、V層上面で褐色土の落ち込みを確認した。本土坑の60cm程北東側には、第2号土坑が隣接する。

〔規模・形状〕 平面形は隅丸の不整長方形を呈する。規模は、開口部が138cm×60cm、底面が124cm×49cmで、深さは確認面から9cmである。断面形は逆台形を呈し、底面は平坦である。東側をやや深く掘り込んでいる。

〔壁・底面〕 V層を掘り込んで壁面としている。底面は平坦で硬くしまっている。

〔堆積土〕 2層に分層できた。褐色土主体で、人為的な堆積と考えられる。

〔出土遺物〕 堆積土から石鏃が28点出土した。そのうち23点(約82%)は黒曜石を使用しており、すべて床面直上からの出土である。

〔小結〕 出土した多量の石鏃は、副葬品と考えられる。

第2号土坑 (図11)

〔位置〕 I—150グリッドに位置し、V層上面で褐色土の落ち込みを確認した。本土坑の南西側には、第1号土坑が隣接する。

〔規模・形状〕 平面形は隅丸の不整長方形を呈する。規模は、開口部が140cm×54cm、底面が133cm×46cmで、深さは確認面から17cmである。断面形は箱形を呈し、底面はほぼ平坦である。

〔壁・底面〕 V層を掘り込んで壁面としている。底面からは、北西側に5cm前後の落ち込みが3箇所、南東側に開口部28cm、深さ12cm程のピット1基を確認した。

〔堆積土〕 11層に分層できた。黒褐色土を基調とし、全体にローム・炭化粒の混入が目立ち、小石の混入も見られる。特に、本土坑の西側底部からベンガラ(赤色顔料)が検出された。人為的な堆積と考えられる。

〔小結〕 第1号土坑と並ぶように出土したことから、これと同時期のものと考えられる。また、ベンガラの分布は、西側に片寄り、遺体の頭部に当たる可能性が高い。

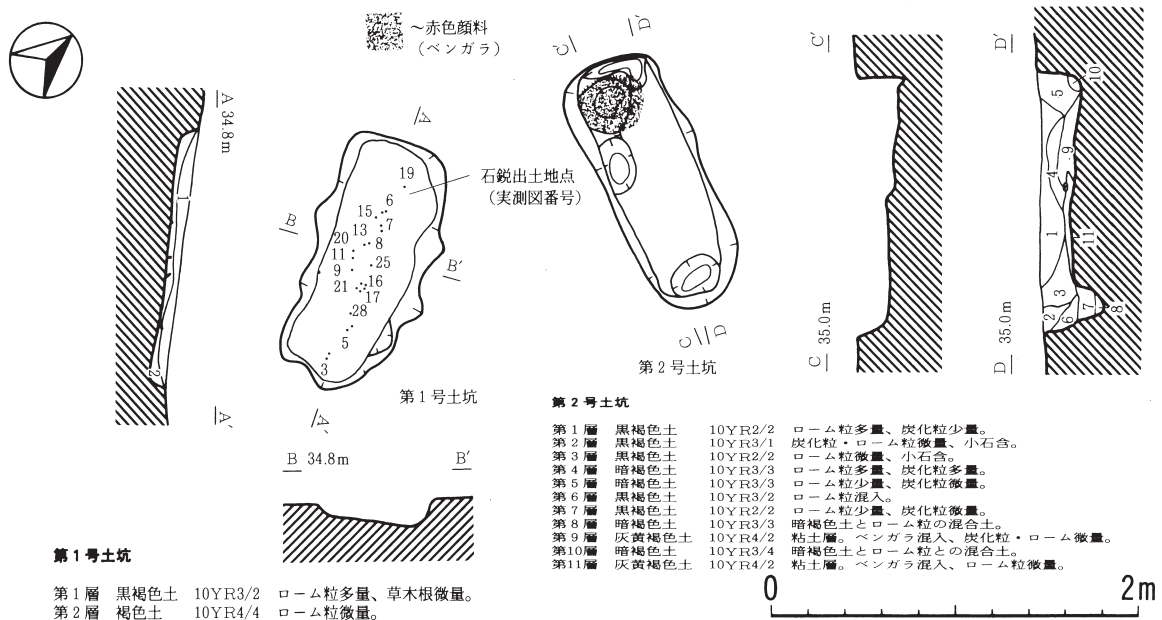


図11 弥生時代の土坑(1)

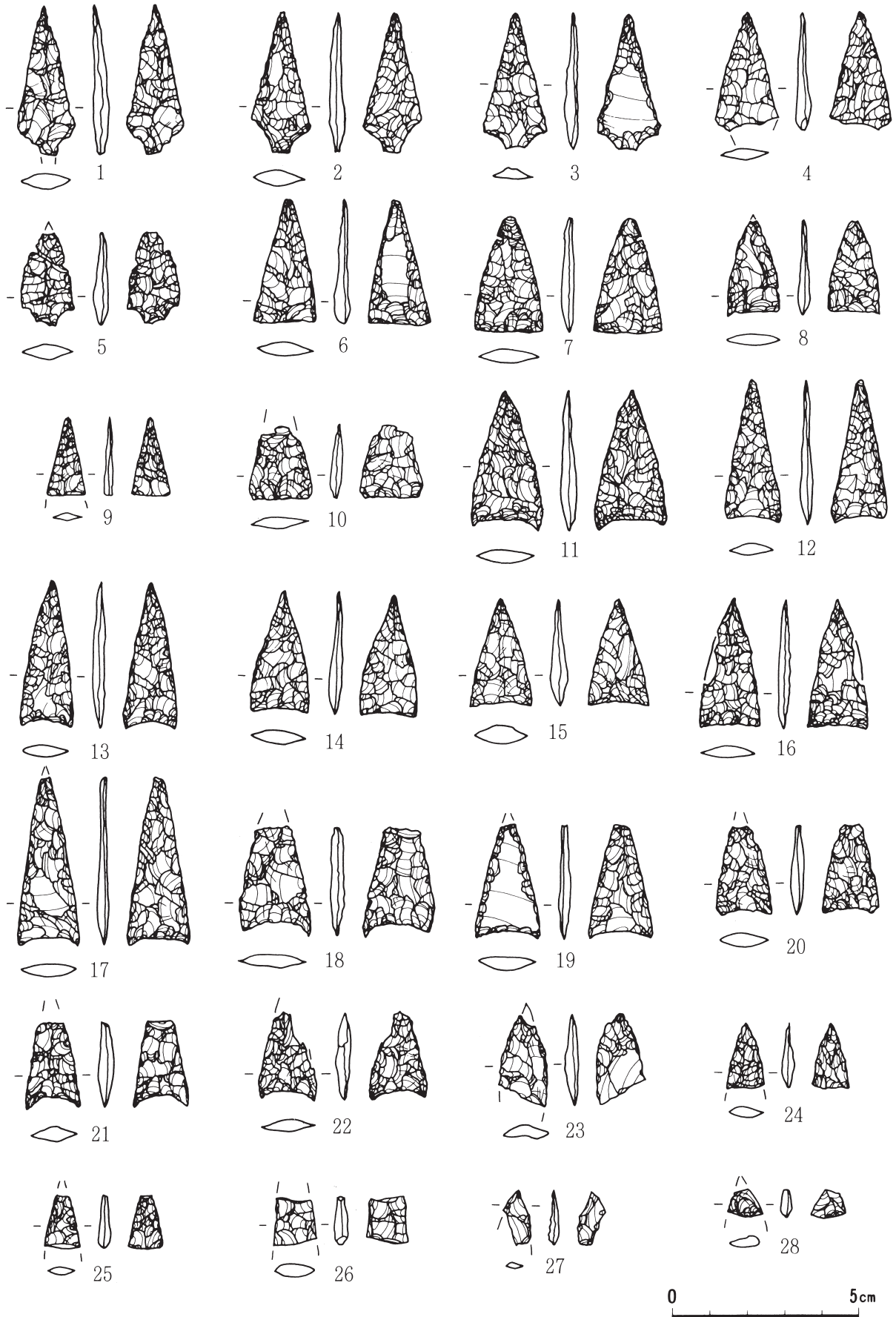


图12 第1号土坑出土石鏃



図版番号	出土地点	層位	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重さ (g)	石質	器種	備考
図12-1	第1号土坑	覆土	(39.5)	15.0	4.0	(1.7)	黒曜石	石鏃	基部欠損
-2	〃	〃	37.0	15.5	4.0	1.5	頁岩	〃	
-3	〃	〃	6.0	17.0	3.0	1.4	黒曜石	〃	
-4	〃	〃	(31.0)	16.5	4.0	(1.3)	頁岩	〃	基部欠損
-5	〃	〃	(24.5)	(14.0)	4.0	(1.0)	黒曜石	〃	先端欠損
-6	〃	〃	(33.0)	16.5	4.0	(1.7)	黒曜石	〃	
-7	〃	〃	30.5	18.0	3.5	1.6	黒曜石	〃	
-8	〃	〃	(25.0)	14.0	3.0	(0.9)	黒曜石	〃	
-9	〃	〃	(20.5)	(10.0)	2.5	(0.4)	黒曜石	〃	
-10	〃	〃	(19.0)	16.5	3.0	(0.9)	黒曜石	〃	先端欠損
-11	〃	〃	37.0	19.5	4.0	1.9	黒曜石	〃	
-12	〃	〃	38.0	15.0	3.5	1.2	黒曜石	〃	
-13	〃	〃	38.5	14.0	3.5	1.4	頁岩	〃	
-14	〃	〃	32.0	15.5	3.5	1.2	黒曜石	〃	
-15	〃	〃	28.0	16.0	5.0	1.4	頁岩	〃	
-16	〃	〃	34.0	16.0	3.0	1.0	黒曜石	〃	側縁欠損
-17	〃	〃	(44.0)	16.5	3.0	(1.9)	黒曜石	〃	先端欠損
-18	〃	〃	(28.5)	19.0	4.0	(1.8)	黒曜石	〃	〃
-19	〃	〃	(30.0)	17.0	3.0	(1.4)	玉髓	〃	〃
-20	〃	〃	(23.0)	15.0	3.5	(1.1)	黒曜石	〃	〃
-21	〃	〃	(22.5)	14.5	4.0	(1.1)	頁岩	〃	〃
-22	〃	〃	(23.0)	15.5	4.0	(0.9)	黒曜石	〃	〃
-23	〃	〃	(24.0)	13.0	4.0	(0.7)	黒曜石	〃	欠損
-24	〃	〃	(17.0)	10.0	3.0	(0.4)	頁岩	〃	〃
-25	〃	〃	(14.0)	(9.0)	(3.0)	(0.3)	黒曜石	〃	〃
-26	〃	〃	(12.5)	(11.0)	(3.5)	(0.5)	頁岩	〃	〃
-27	〃	〃	(14.0)	(7.5)	(2.5)	(0.2)	黒曜石	〃	〃
-28	〃	〃	(7.5)	(9.5)	(3.0)	(0.2)	黒曜石	〃	〃

表2 第1号土坑出土石鏃計測表

## 第3号土坑 (図13)

[位置] H-151・152グリッドに位置し、V層上面で褐色土の落ち込みを確認した。

[規模・形状] 平面形は、不整楕円形を呈する。規模は、開口部が124cm×82cm、底面が124cm×60cmで、深さは確認面から20cmである。断面形は箱形を呈し、底面は平坦である。

[壁・底面] V層を掘り込んで壁面としている。若干掘り過ぎた感じだが、東西の立ち上がりは緩やかである。底面はほぼ平坦で堅く締まっている。

[堆積土] 4層に分層できた。褐色土を基調とし、全体にローム粒・炭化粒を少量含む。人為的な堆積と考えられる。

[小結] 本土坑は、墓として機能していた特徴が乏しく断定し得ないが、規模や位置などから弥生時代の土坑と考えられる。

## 第4号土坑 (図13)

[位置] H-148グリッドに位置し、V層上面で褐色土の落ち込みを確認した。

[規模・形状] 平面形は隅丸の不整長方形を呈する。規模は、開口部が123cm×72cm、底面が110cm×68cmで、深さは確認面から30cmである。断面形は箱形を呈し、底面は平坦である。

[壁・底面] V層を深く掘り込んで壁面としている。底面はほぼ平坦で堅く締まっている。

[堆積土] 7層に分層できた。褐色土を基調をし、全体にロームの混入が多い。また、炭化粒も全体に微量ではあるが、混入している。人為的な堆積と考えられる。

[小結] 本土坑は、墓として機能していた特徴が乏しく断定し得ないが、規模や位置などから弥生時代の土坑と考えられる。

### 第5号土坑 (図13)

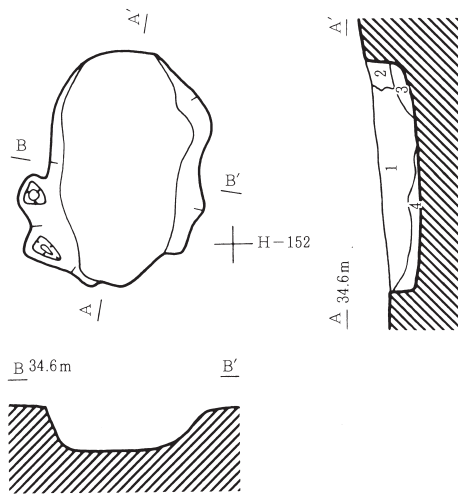
[位置] F-148グリッドに位置し、V層上面で褐色土の落ち込みを確認した。

[規模・形状] 平面形は隅丸の不整長方形を呈する。規模は、開口部が114cm×68cm、底面が103cm×60cmで、深さは確認面から15cmである。断面形は逆台形を呈し、底面は平坦である。

[壁・底面] V層を深く掘り込んで壁面としている。底面は硬くしまっている。

[堆積土] 5層に分層できた。褐色土を基調とし、全体にローム粒・炭化粒を少量含む。人為的な堆積と考えられる。また、本土坑の西側底部からベンガラと思われる赤褐色の塊を検出した。

[小結] 本土坑は、第2号土坑から約12m北に平行するように位置し、ベンガラの分布も西側に片寄り、これと一致する。したがって、第1・2号土坑と同時期に機能したものと考えられる。

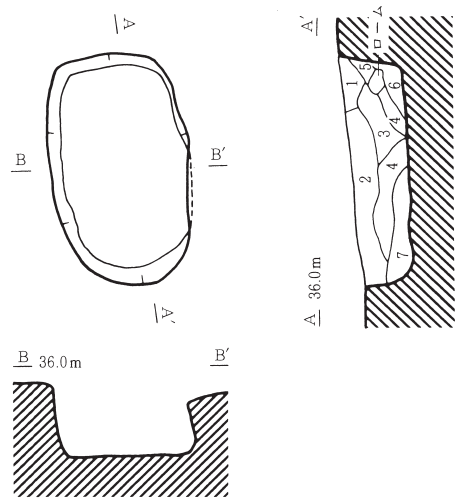


#### 第3号土坑

- 第1層 黒褐色土 10YR2/2 暗褐色土との混合土。ローム粒多量、炭化粒少量。
- 第2層 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒微量。
- 第3層 褐色土 10YR4/4 ローム粒微量。
- 第4層 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒少量、炭化粒微量。

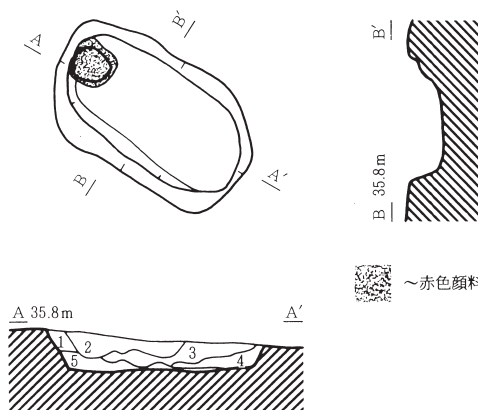
#### 第4号土坑

- 第1層 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒少量、焼土粒・炭化粒微量。
- 第2層 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒多量、炭化粒少量。
- 第3層 褐色土 10YR4/4 炭化粒・ローム粒微量。
- 第4層 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒多量、炭化物少量。
- 第5層 褐色土 10YR4/4 炭化粒・ローム粒微量。
- 第6層 褐色土 10YR4/6 ローム粒多量。
- 第7層 褐色土 10YR4/4 ローム粒少量、炭化粒微量。



#### 第5号土坑

- 第1層 にぶい黄褐色土 10YR5/4 炭化粒・ローム粒微量。
- 第2層 褐色土 10YR4/4 ローム粒多量、炭化粒微量。
- 第3層 褐色土 10YR4/4 ローム粒多量。
- 第4層 にぶい黄褐色土 10YR5/4 炭化粒微量。
- 第5層 褐色土 7.5YR4/4 炭化粒・ローム粒微量、小石含。



~赤色顔料(ベンガラ)



図13 弥生時代の土坑(2)

### 3 縄文・弥生時代の遺構内出土遺物の観察

#### (1) 縄文時代 (図9—1～11)

第5号住居跡から、縄文時代中期の円筒上層c式に比定される土器片(図9—1～7)が出土した。1～3は土器埋設炉の構築に使用されていた。その他は胴部破片4点である。

また、9号土坑の覆土中からは、縄文時代前期の円筒下層式に比定される土器片4点(図9—8～11)が出土した。

##### ① 第5号住居跡からの出土遺物

1と2は、波状口縁を呈する深鉢形土器の口縁部である。口縁部が直線的に立ち上がり口唇部が外反する、口縁部文様帯は、山形及び横位の組み合わせによる隆帯と連続する刺突を施文している。胴部文様帯は、横位と斜位とを組み合わせたような粘土紐を貼り付けている。隆帯の上面には、縄文・刺突・素文の部分が見られる。隆帯間には、半截竹管で刺突を施し、胴部には、二条の隆帯を巡らして、区画を形成している。区画帯の下位には斜行縄文か羽状縄文を施している。器表面は、加熱にり荒れており、隆帯の剥落が著しい。

3は、1や2とほぼ同様の文様構成であるが、口縁形状が不明である。区画帯が比較的狭く、隆帯間には、角張った竹管で刺突を施文している。

4～7は、別個体と思われる胴部破片で、いずれも羽状縄文を施している。

##### ② 第9号土坑からの出土遺物

8は口縁部破片であるが、縄文時代前期の円筒下層式土器の特徴である隆帯の貼り付けが剥落している。文様構成は、器面の磨耗が激しいが、縄文を施文していることがわかる。また、胎土には、繊維の混入が目立つ。

9～11は、胴部破片である。表面に縄文を施文している。11は、断面が比較的薄い。(山内 実)

#### (2) 弥生時代 (図12—1～28)

第1号土坑から、破片を含めて28点の石鏃が出土した。有茎石鏃4点、無茎石鏃16点、基部の欠失のもの及び破片8点である。しかし、本土坑の上面は削平されており、量的にもっと多かったものと考えられる。

1～3・5は有茎凸基のもので、基部端を欠失している4もこの類の可能性が高い。全体に薄手であり、1～4は側縁が直線的に作出されている。

6～8・10は無茎平基のものである。6は側縁が直線的であるが、7・8はやや丸みを帯びている。

11～22は無茎凹基のもので、14～16は抉りが浅く平基に近い。11・13・17・18・21・22は基部先端がやや内傾気味に突出している。他は破片のため形状は不明である。

石材は、28点中20点が黒曜石で、6点が珪質頁岩、2点が玉髓である。また、アスファルトなどの付着は全く認められない。

これらの石鏃は、全て薄手で剥離も非常に細かいものである。このため、非常に損傷しやすい状態であることから、実用品としては疑問が残る。出土した土坑が弥生時代砂沢期の土坑墓と考えられることから、副葬用に作出した可能性が高い。底面上ではなく、やや上部にあったことから埋め土と一緒に埋納した可能性が考えられる。(白鳥 文雄)

#### 4 平安時代の遺構と出土遺物

本遺跡で検出された平安時代の住居跡は、15軒である。そのうち、掘立柱建物跡を伴うものは第6・7・12・15号住居跡の4軒である。なお、掘立柱建物跡を伴う住居跡については、各住居跡の中でそのまま記載する。ただし、掘立柱建物跡の番号については、調査時の番号をそのまま使用し、( )に記載する。

その他、土坑5基が検出した。

以下に、各遺構の特徴を記述する。

また、各遺構の図は、グリッド軸を基準とし、北方向を統一したが、住居跡に関しては、カマドが上面になるように統一して掲載した（カマドが検出されなかった住居に関しても、カマドの推定位置が上面になるようにした）。その他、図中の「P(番号)」はピット番号を、注記中の「L.B.」はロームブロックをそれぞれ表している。

なお、遺物の実測図に関して、坏のロクロ目については定規を使用し、内面黒色処理及び火ダスキ痕についてはスクリーントーンを使用した。甕のナデ・ケズリなどについて、調整方向が解るものは矢印で示した。須恵器の断面には黒色で表現している。また、4分の1以上残存する破片資料については、推定口径及び底径を計測（観察表では、( )で表現）して図化し、中央線を破線で示した。なお、上記の方法で図化したがる、詳細については文末の観察表にまとめて記載した。

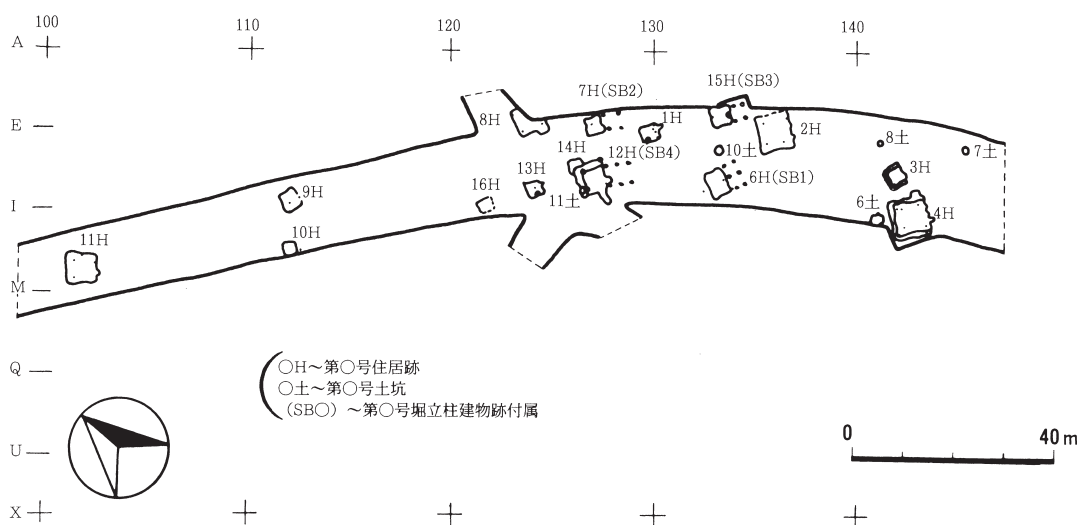


図14 平安時代の遺構配置図



## (1) 住居跡

## 第1号住居跡 (図15)

[位置] D・E-129・130グリッドに位置する。平成6年度の文化課の試掘調査時に本住居跡が確認された。また、本住居跡の周辺には、北側に第7号住居跡(第2号掘立柱建物跡附属)、南側に第6号住居跡(第1号掘立柱建物跡附属)、南東側に第15号住居跡(第3号掘立柱建物跡附属)、北西側に第12号住居跡(第4号掘立柱建物跡附属)などが位置する。

[重複] なし。

[平面形・規模] 南東壁辺300cm、北西壁辺323cm、南西壁辺335cm、北東壁辺345cmの方形を呈する。主軸方位はN-120°-E、床面積は8.92㎡である。本遺跡の中では、中規模の住居跡である。

[堆積土] 9層に分層できた。大半が、ローム粒を含んだ褐色土で覆われている。自然堆積の様相を呈する。

[壁・床面] V層を壁面とし、壁は床面からほぼ垂直に直線的に立ち上がる。壁高は、南東壁12cm、北西壁25cm、南西壁13cm、北東壁8cm程である。床はほぼ平坦で、全体が固くしめられた貼床である。また、床面から溝やピットを検出した。

[壁溝] カマド構築直下も含めてほぼ一巡する。壁溝の幅は4~12cm、深さは10~23cm程である。

[ピット・柱穴] 6個のピットを検出した。支柱穴は、各隅に検出されたピット3~6と考えられる。また、周溝底面より深さ20~30cmで楕円形の小ピットが15個検出した。なお、各ピットの深さは、以下の通りである。ピット1…41.6cm、ピット2…28.3cm、ピット3…15.1cm、ピット4…37.5cm、ピット5…27.4cm、ピット6…16.2cm

[カマド] 南東壁の中央から東寄りに位置し、遺存状態は煙道部を除いてやや良好である。カマド本体の袖部を構築していたと思われる粘土塊を検出した。また、この周辺の床面からは礫が数個出土し、芯材として使用したのと考えられる。燃焼部及び火床面は確認できなかった。煙道部は半地下式と思われるが明確ではない。

[その他の附属施設] 本住居跡の南東壁の延長75cm南西方向に、深さ25cm程度のピットを1個検出した。これは、ピット3・4の延長上に位置するが、堆積土中に火山灰を多量に含む層があることから、本住居跡とは別のものと考えられる。

[出土遺物] カマド付近から、土師器の甕の口縁部と胴部の破片が2点出土した。また、床面直上からは、土師器の甕や浅鉢が数点と、台石として使用されたとと思われる礫が1点出土したが、使用した痕跡は認められなかった。また、カマド脇のピットからも土器片が数点出土している。

[小結] 本住居跡の構築時期は、出土遺物などから、9世紀末頃と考えられる。

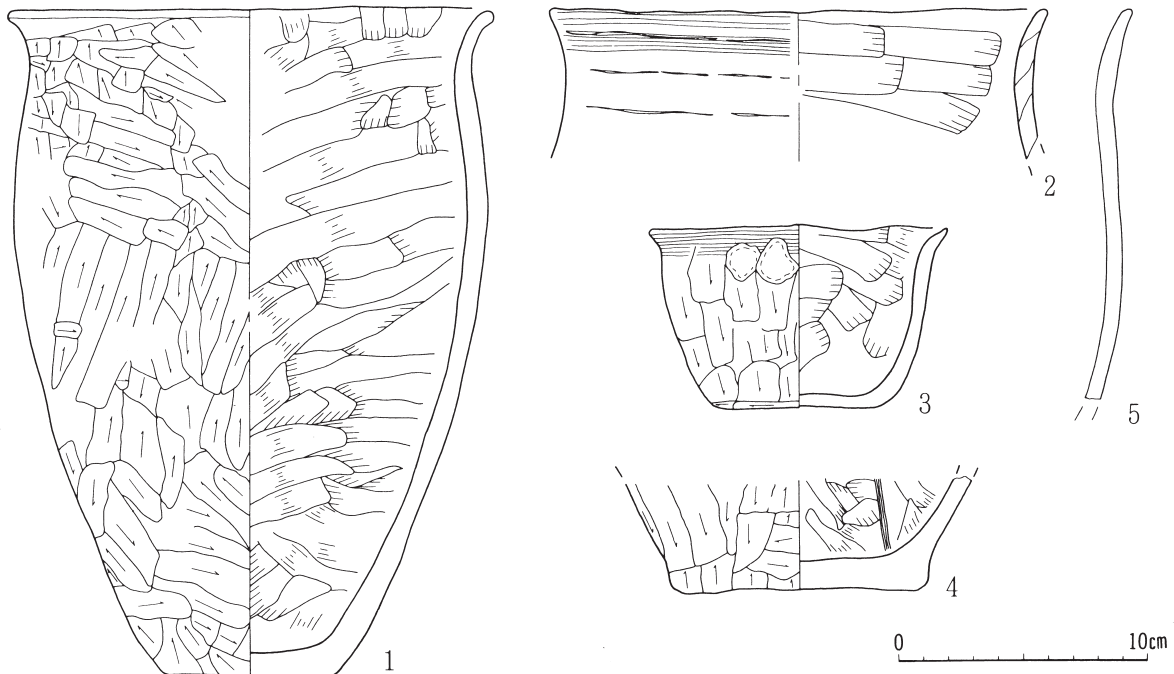
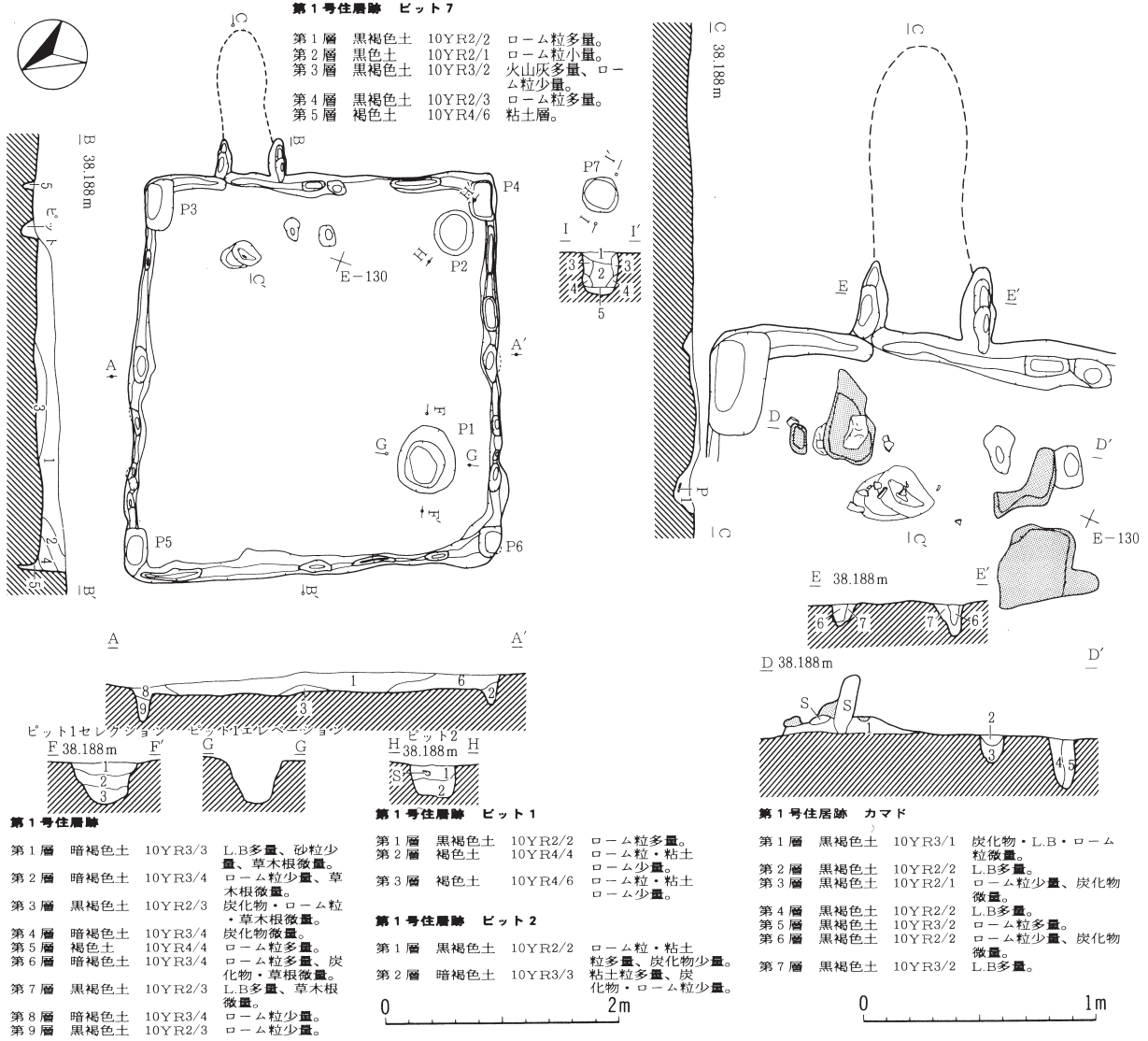


図15 第1号住居跡・同カマド・出土遺物

## 第2号住居跡 (図16・17)

[位置] D・E-135・136グリッドに位置し、V層上面で大型方形の褐色土の落ち込みを確認した。本住居跡の周辺には、北側に第15号住居跡(第3号掘立柱建物跡附属)、西側に第6号住居跡(第1号掘立柱建物跡附属)が位置する。

[重複] なし。

[平面形・規模] 北東壁は大きく攪乱を受け、一部明確ではないが辺654cm、南西壁辺658cm、南東壁辺640cm、北西壁辺780cmの方形を呈すると思われる。主軸方位はN-127°-E、床面積は攪乱部も含めて40.34m<sup>2</sup>程である。本遺跡内では、大規模の住居跡である。

[堆積土] 18層に分層できた。全体にローム粒及び粘土粒を含んだ黒褐色土で覆われている。人為的様相を呈する。

[壁・床面] V層を壁面とし、壁は床面からほぼ垂直に直線的に立ち上がる。壁高は、北東壁31cm、南西壁35cm、南東壁14cm、北西壁33cm程である。床はほぼ平坦で、全体を締め固めたような貼床である。また、床面から溝やピットを検出した。

[壁溝] カマド直下部分を除いてほぼ一巡する。壁溝の幅は3~23cm、深さは10~20cm程である。

[ピット・柱穴] 主柱穴と考えられるピットが4個検出された。また、南西壁の両端にも柱穴と考えられるピットが検出した。なお、各ピットの深さは以下の通りである。ピット1…29.3cm、ピット2…31.8cm、ピット3…51.3cm、ピット4…28.9cm、ピット5…30.2cm、ピット6…29.4cm

[カマド] 南東壁の中央からやや南寄りに位置し、遺存状態は良好である。カマド本体の袖部を構築していたと思われる粘土塊を検出した。袖は粘土をつき固めて構築しており、芯材は使用していない。燃焼部は床面から8cm程掘り込まれており、火床面は径45cm程の不整な楕円形を呈する。煙道部は地山を掘り込んで構築した半地下式で、住居外に25cm程張り出している。

[その他の附属施設] なし。

[出土遺物] カマド付近から、土師器の甕の口縁部や底部破片数点と須恵器の甕の胴部破片などが出土した。また、覆土中からも、土師器の甕や坏の破片数点と、須恵器の坏の底部破片などが出土した。図17-1の土師器の坏は完形品であり、ロクロ成形で底部は回転糸切の平底、器形は底辺部にくびれを有し、内湾ぎみに立ち上がる。また、出土した土師器の甕は、体部にヘラナデやヘラケズリが多用され、口縁部がやや短く、やや外反するものが多い。

[小結] 本住居跡の構築時期は、出土遺物から、9世紀末から10世紀初頭と考えられる。



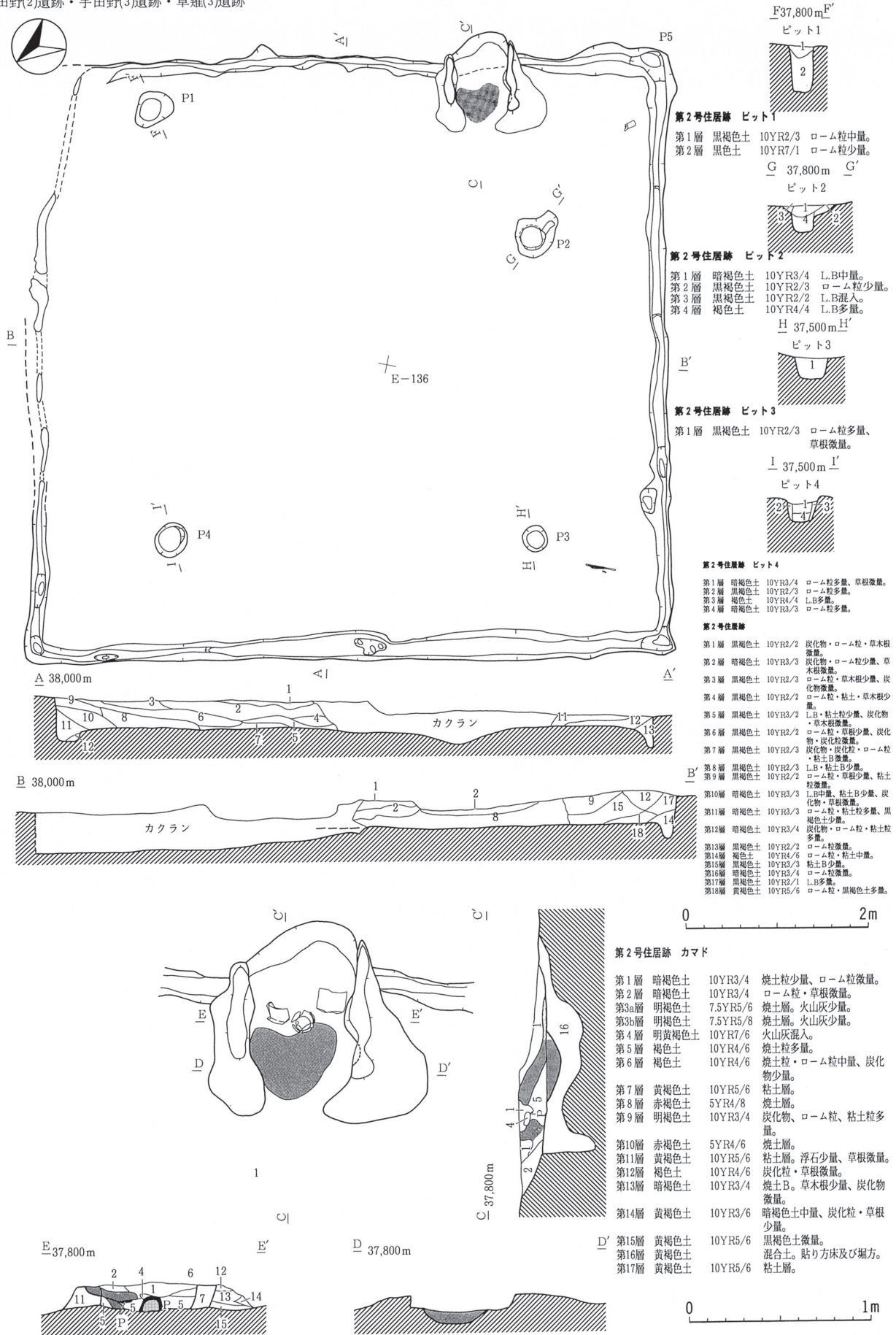


図16 第2号住居跡・同カマド



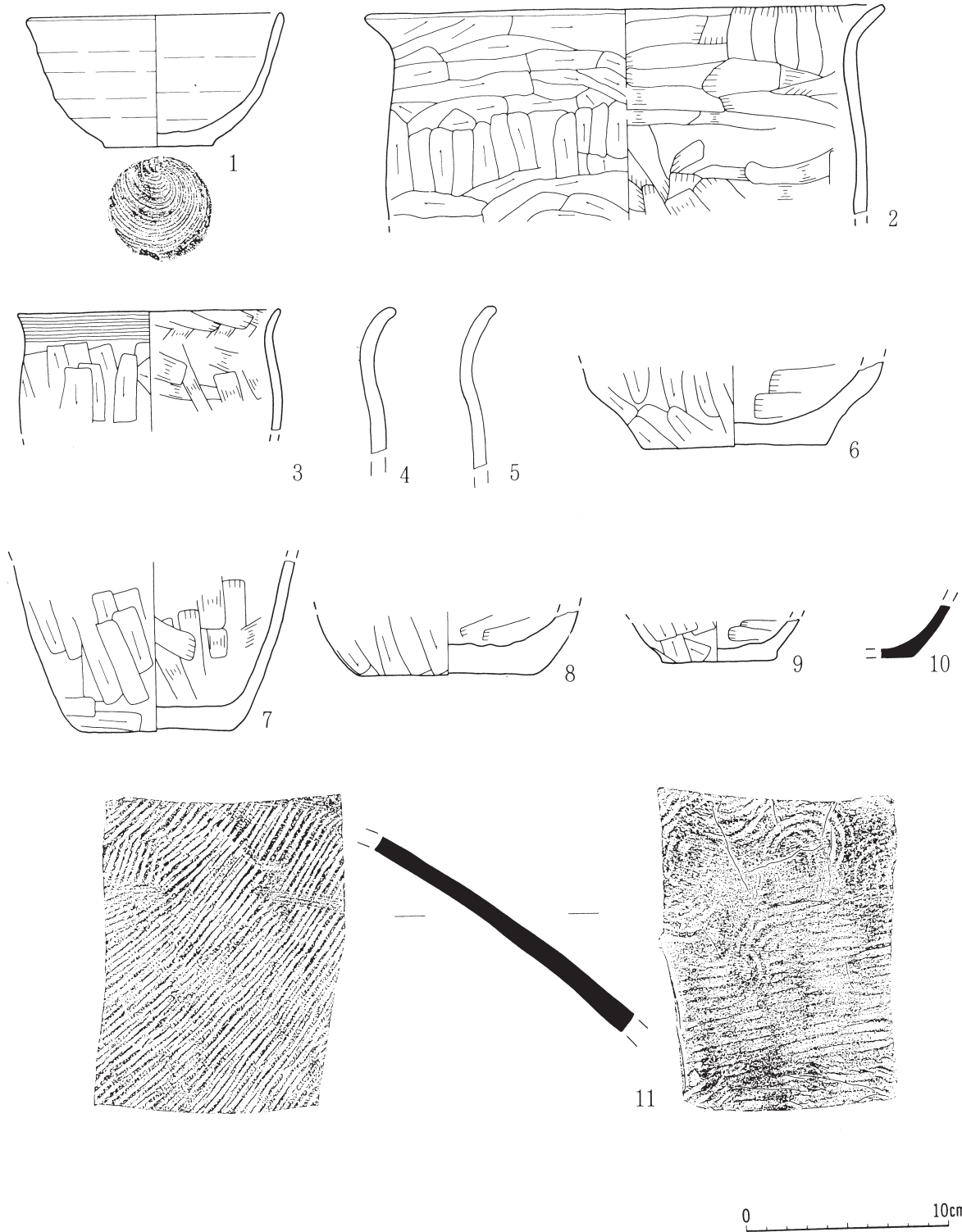


図17 第2号住居跡出土遺物

### 第3号住居跡（図18・19）

〔位置〕 F・G-141・142グリッドに位置し、V層上面で褐色土の落ち込みを確認した。本住居跡の南西側には第4号住居跡、西側に第6号土坑が位置する。

〔重複〕 本住居跡の床面の掘り方を調査したところ、床面の北東、北西、南西側に壁溝を検出したことから、拡張した住居であることが確認できた。当初、一辺約270cmの方形の住居跡であったものが、カマドのある南東壁のみを残して、拡張したものと考えられる。

〔平面形・規模〕 東壁辺397cm、西壁辺380cm、南壁辺327cm、北壁辺345cmの長方形を呈する。主軸方位はN-108°-E、床面積は11.31㎡である。本遺跡内では、中規模の住居跡である。

〔堆積土〕 12層に分層できた。全体にローム粒及び炭化物粒を含んだ暗褐色土で覆われている。床面直上の層には多量の炭化粒と床面には炭化材が散布して出土することから、焼失したものと考えられる。火災後は、自然堆積の様相を呈する。

〔壁・床面〕 V層を壁面とし、壁は床面からほぼ垂直に直線的に立ち上がる。壁高は、東壁25cm、西壁15cm、南壁23cm、北壁15cm程である。床はほぼ平坦で、全体を締め固めたような貼床である。また、床面から炭化材や溝を検出した。

〔壁溝〕 カマド直下部分を除いてほぼ一巡する。壁溝の幅は2～17cm、深さは3～5cm程である。また、掘り方の調査では、幅は3～12cm、深さは20～25cm程の内周溝を検出したので、東壁を利用して建て替えが行われていたことが確認された。

〔ピット・柱穴〕 主柱穴と考えられるピットが4個検出された。また、カマド脇に深さ20cm程の小ピットを3個検出した。なお、各ピットの深さは以下の通りである。ピット1…39.2cm、ピット2…31.7cm、ピット3…20.4cm、ピット4…28.5cm

〔カマド〕 東壁の中央からやや南寄りに位置し、遺存状態は良好である。カマド本体の袖部を構築していたと思われる粘土塊を検出した。袖は粘土をつき固めて構築しており、芯材を使用している。燃焼部は床面から8cm程掘り込まれており、火床面は径40cm程の不整な楕円形を呈する。煙道部は、地山を掘り込んで構築した半地下式で、住居外に30cm程張り出している。また、カマドの中央部には、土師器の甕の底部を伏せており、支脚として利用している。

〔その他の附属施設〕 なし。

〔出土遺物〕 カマド付近から土師器の坏1点や甕の口縁や底部破片が数点出土した。また、床面及び覆土中からも土師器の甕や壺、浅鉢などが出土した。図19-1の土師器坏は須恵器製作の影響を受けたと考えられている「あかやき」土器である。図19-2の浅鉢は、ロクロを使用せずに成形し、外面は若干のヘラナデを施し、内面は黒色処理後にミガキを施すといった、少し変わった作りである。

なお、覆土中位から床面にかけて炭化材が検出された。

〔小結〕 本住居跡は、炭化材の検出状況から、焼失家屋と考えられる。また、出土遺物などから、構築時期は9世紀後半と考えられる。

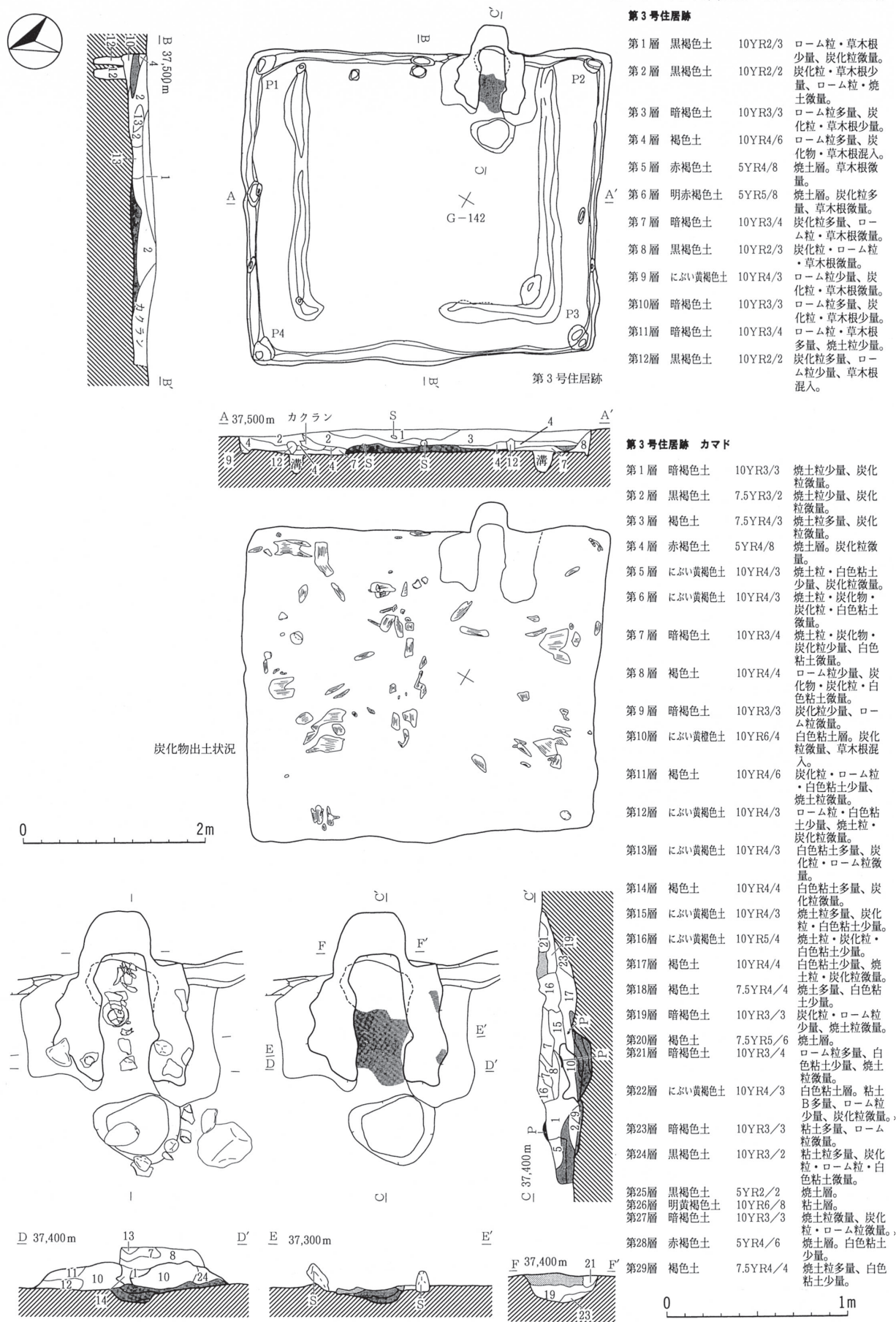


図18 第3号住居跡・同カマド

宇田野(2)遺跡・宇田野(3)遺跡・草薙(3)遺跡

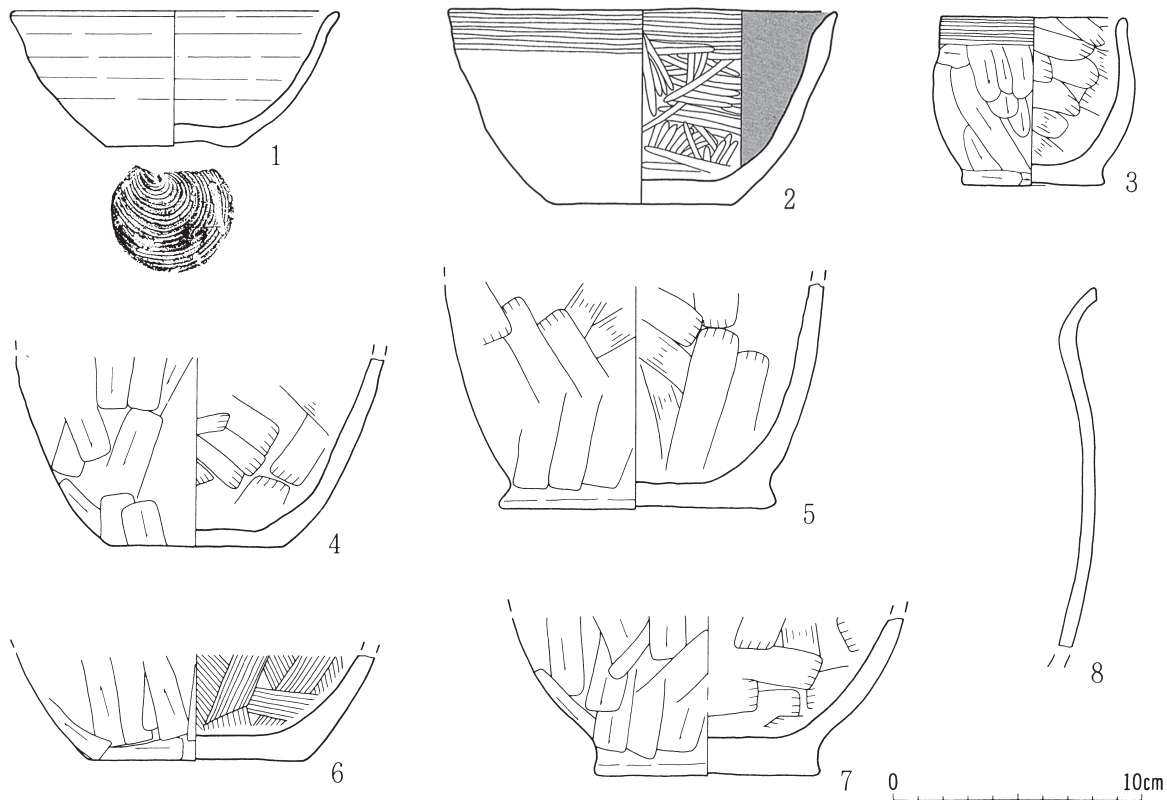


图19 第3号住居跡出土遺物



## 第4号住居跡(図20～24)

〔位置〕 G～I-141～143 グリッドに位置し、V層上面で大型方形の褐色土の落ち込みを確認した。しかし、プランが調査区外に延びるため、地権者の承諾を得て、全容を確認できる範囲まで調査区を拡張した。また、本住居跡の北東側には第3号住居跡、北西側には2m程離れて第6号土坑が位置する。

〔重複〕 本住居跡の床面の掘り方を調査したところ、床面の北東、北西、南西側に壁溝を検出したことから、拡張した住居であることが認められた。当初、一辺約300cmの方形の住居跡であったものが、カマドのある南東壁のみを残して拡張したものと考えられる。

〔平面形・規模〕 南東壁辺755cm、北西壁辺745cm、南西壁辺730cm、北東壁辺725cmの方形を呈する。主軸方位はN-126°-E、床面積は50.77㎡である。北東壁の南東側に張り出し部分を有する。本遺跡内では、最も大規模の住居跡である。

〔堆積土〕 28層に分層できた。全体にローム粒及び炭化物粒を含んだ褐色土で覆われている。また、覆土中から白頭山苦小牧火山灰(蛍光X線分析の結果)を検出した。なお、覆土中位から床面にかけて炭化材及び焼土を大量に検出した。

〔壁・床面〕 V層を壁面とし、壁はほぼ垂直に直線的に立ち上がる。壁高は、南東壁24cm、北西壁42cm、南西壁53cm、北東壁39cm程である。床はほぼ平坦で、全体を締め固めたような貼床である。また、壁面及び床面から火災を受けて残った炭化材が大量に検出された。壁際の炭化材は、腰板が崩壊して住居の内側に倒れた状態のまま検出された(図21及び写真図版参照)。その他、床面からは溝やピットを検出した。

〔壁溝〕 ほぼ一巡する。壁溝の幅は2～15cm、深さは5～17cm程である。また、掘り方の調査では、幅は5～25cm、深さは8～16cm程の内周溝を検出したので、南東壁を利用して建て替えが行われたことが確認された。

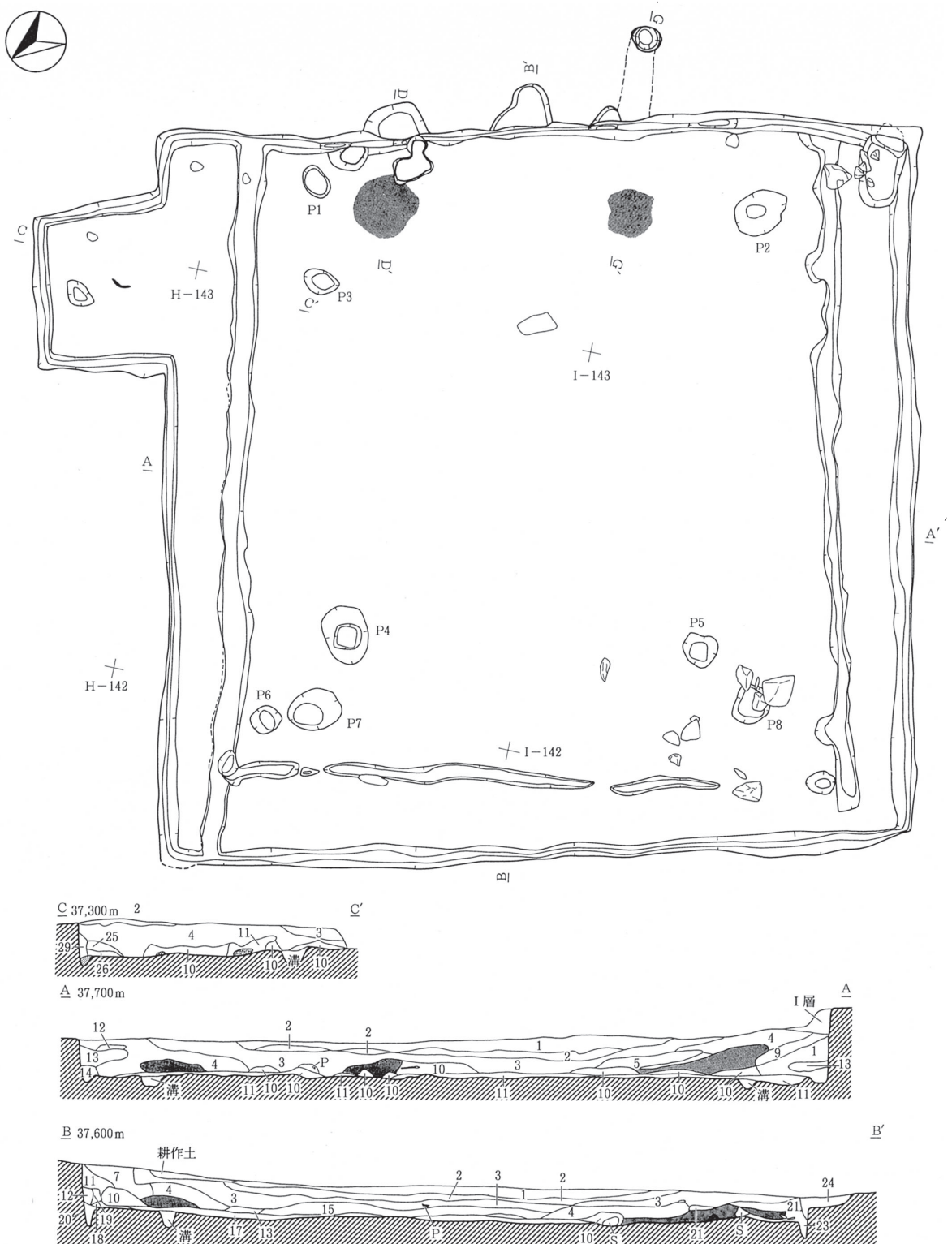
〔ピット・柱穴〕 8個のピットを検出した。このうち、貼り床を剥いだ段階で検出したピットは、ピット4～5である。支柱穴の配置はピット2・3・7・8と考えられる。なお、各ピットの深さは以下の通りである。ピット1…30.4cm、ピット2…38.9cm、ピット3…46.0cm、ピット4…48.4cm、ピット5…42.5cm、ピット6…18.6cm、ピット7…18.5cm、ピット8…9.7cm

〔カマド〕 改築が行われており、改築前をカマド①、後をカマド②として記述する。

カマド①は、南東壁の中央からやや南寄りに位置し、改築されたため本体は残存せず、燃焼部と煙道部のみが検出できた。燃焼部は床面から10cm程掘り下げており、火床面は径40cm程の楕円形を呈する。煙道部は地山を掘り込んで構築した地下式で、緩やかな傾斜で下がりながら煙出し孔まで掘り込まれている。煙出し孔は壁から80cm程離れたところに位置し、径20cm程の円形を呈する。

カマド②は、同じ南東壁の東寄りに位置し、遺存状況は良くない。袖は粘土をつき固めて構築しており、その一部のみが残存する。燃焼部は床面を約10cm掘り下げ、火床面は径60cm程の不整な楕円形を呈する。煙道部は半地下式で、壁の外に30cm程張り出す程度である。。

〔その他の附属施設〕 北東壁の南東側に、131cm×137cm程の張り出し部分を有する。この部分の中位から床面にかけて、多量の遺物がまとまって出土したことから、物置として機能していたものと考えられる。



第4号住居跡・掘り出し			
第1層	黒色土	10YR2/1	草木根中量、炭化粒・ローム粒少量。
第2層	黒褐色土	10YR3/2	炭化粒・ローム粒少量、草木根微量。
第3層	暗褐色土	10YR3/4	炭化粒・ローム粒中量、炭化物少量、焼土粒微量。
第4層	褐色土	10YR4/4	炭化粒多量、ローム粒(小)中量、炭化物少量、焼土粒微量。
第5層	褐色土	10YR4/4	火山灰B多量、炭化粒中量、焼土粒微量。
第6層	褐色土	10YR4/6	焼土粒少量、炭化粒微量。
第7層	灰黄褐色土	10YR4/2	炭化粒多量、焼土粒少量、ローム粒微量。
第8層	明褐色土	7.5YR5/8	焼土層。炭化物多量。
第9層	褐色土	10YR4/4	ローム粒少量、炭化物微量。
第10層	褐色土	10YR4/4	炭化物多量、炭化粒中量、焼土粒少量、ローム粒微量。
第11層	にぶい黄褐色土	10YR5/4	炭化粒・ローム粒中量、焼土粒微量。
第12層	黄褐色土	10YR5/6	L.B混入。
第13層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒中量、炭化粒微量。
第14層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	ローム粒少量、炭化粒微量。
第15層	褐色土	7.5YR4/4	炭化粒多量、焼土粒中量、ローム粒少量。
第16層	褐色土	7.5YR4/4	焼土粒少量、炭化粒微量。
第17層	黄褐色土	10YR5/8	草木根少量、ローム粒微量。
第18層	褐色土	10YR4/4	ローム粒中量、炭化物少量。
第19層	黄褐色土	10YR5/6	炭化物微量。
第20層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	ローム粒少量、焼土粒微量。
第21層	暗褐色土	10YR3/4	焼土粒少量、ローム粒微量。
第22層	暗赤褐色土	5YR5/8	焼土層、炭化物少量。
第23層	黒色土	10YR2/1	炭化物多量、焼土B少量。
第24層	黒褐色土	10YR3/2	L.B少量、炭化物・炭化粒微量。
第25層	褐色土	10YR4/4	炭化物・炭化粒・ローム粒少量。
第26層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	焼土B少量、炭化物・炭化物微量。
第27層	暗褐色土	10YR3/4	炭化物B少量、焼土粒微量。
第28層	褐色土	10YR4/4	粘土層。

図20 第4号住居跡

[出土遺物] カマド付近や覆土中及び床面から土師器、須恵器の坏や甕などの破片が大量に出土し（破片総数約150片）、遺物出土量は本遺跡内の遺構の中で最も多い。また、床面から環状石斧の半欠品も1点出土した（時期は特定し得ない）。

土師器の坏は7点出土した。全てロクロ成形で、底部は回転糸切で平底、器形は内湾ぎみに立ち上がり、口縁部はやや外反する。4点は内面黒色処理後、ミガキを施している。土師器の甕は図23—9や10のように、口径が体部に対して比較的小さいものが認められる。口縁部は、短く、やや外反するものが多い。

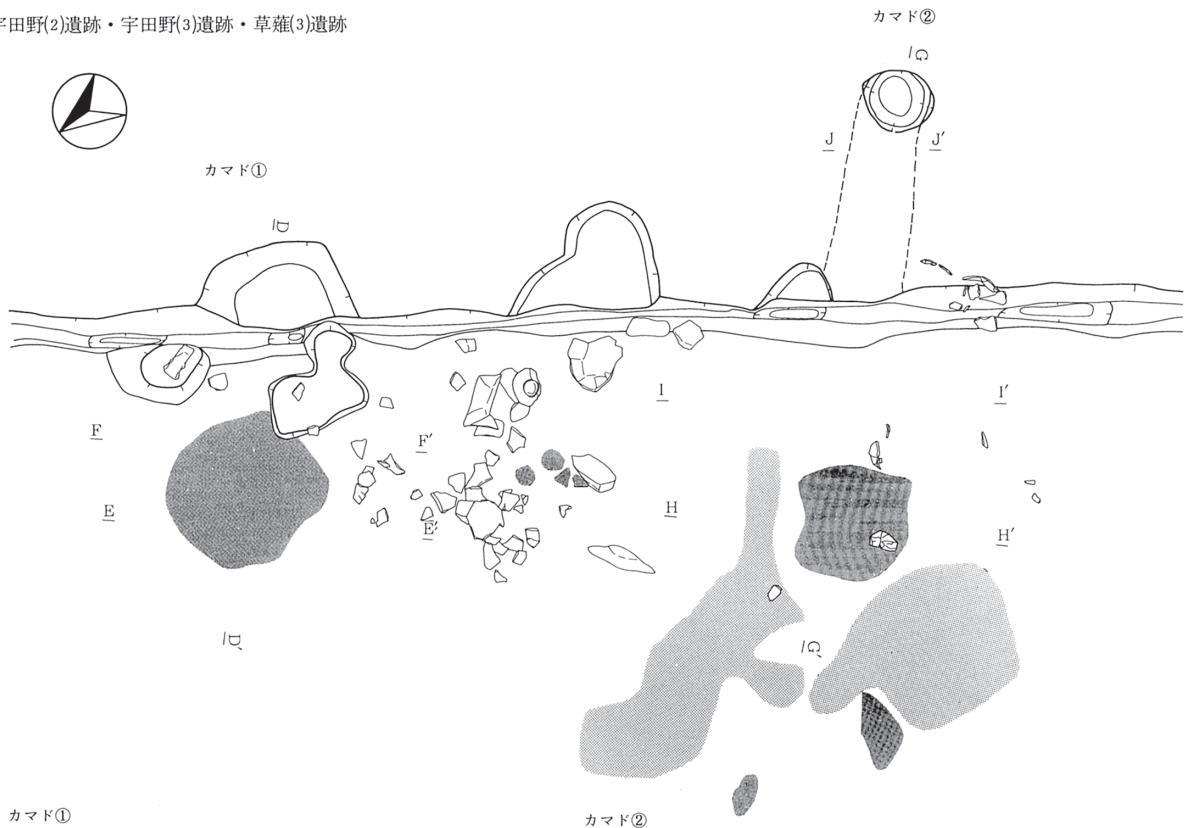
須恵器の坏は、図23—8のように胴部中央にへら記号が認められるものが出土した。同じくへら記号を施した須恵器の坏は隣接する6号土坑からも1点出土している。須恵器の甕は胴部破片だが、木目様格子目状の叩き目が認められる（図24—21）。

[小結] 本住居跡は、炭化材の検出状況から、焼失家屋と考えられる。また、出土遺物などから、本住居跡の構築時期は、9世紀末から10世紀初頭と考えられる。また、白頭山苦小牧火山灰が検出されたことから、この火山灰が降下する以前に生活が営まれていたことは確かである。



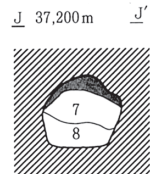
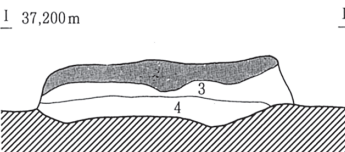
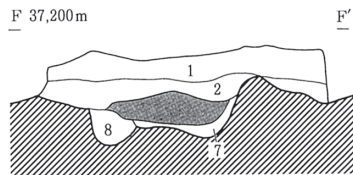
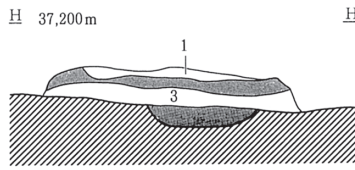
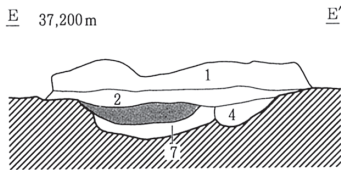
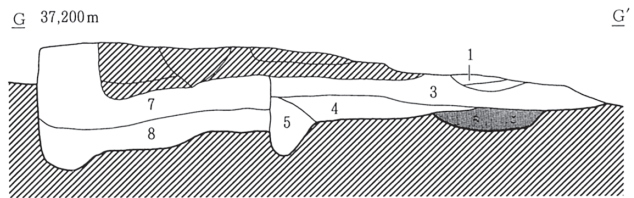
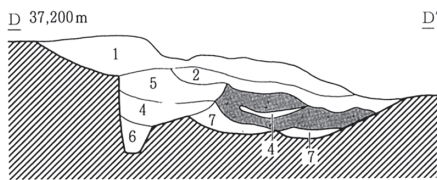
図21 第4号住居跡炭化物出土状態





カマド①

カマド②



第4号住居跡 カマド①

第1層	褐色土	7.5YR4/6	焼土多量・炭化物・炭化粒少量、黒褐色土微量。
第2層	黒褐色土	10YR3/2	焼土B、LB少量。
第3層	褐色土	7.5YR4/4	焼土層。
第4層	暗褐色土	10YR3/4	LB中量。
第5層	褐色土	10YR4/6	焼土粒・炭化物・炭化粒多量。
第6層	褐色土	10YR4/4	LB・炭化物少量。
第7層	黄褐色土	10YR5/8	粘土粒微量。
第8層	暗褐色土	10YR3/6	LB・炭化物少量。
第9層	暗褐色土	5YR3/6	砂鉄層。黄橙土中量。

第4号住居跡 カマド②

第1層	暗褐色土	10YR3/3	焼土粒・炭化物少量、LB微量。
第2層	橙色土	5YR6/8	焼土層。炭化物少量。
第3層	黒色土	10YR2/1	焼土多量・炭化物少量。
第4層	褐色土	10YR4/6	焼土粒・炭化物微量。
第5層	黄褐色土	10YR5/6	炭化物・ローム粒微量。
第6層	暗褐色土	10YR3/4	焼土粒・炭化粒・粘土B少量。
第7層	暗褐色土	10YR3/3	焼土粒・炭化物微量、明黄褐色土B混入。
第8層	黒褐色土	10YR2/3	焼土粒・炭化粒・ローム粒微量。
第9層	赤褐色土	5YR4/6	焼土層。
第10層	明褐色土	7.5YR5/8	焼土層。

0 1m

図22 第4号住居跡カマド



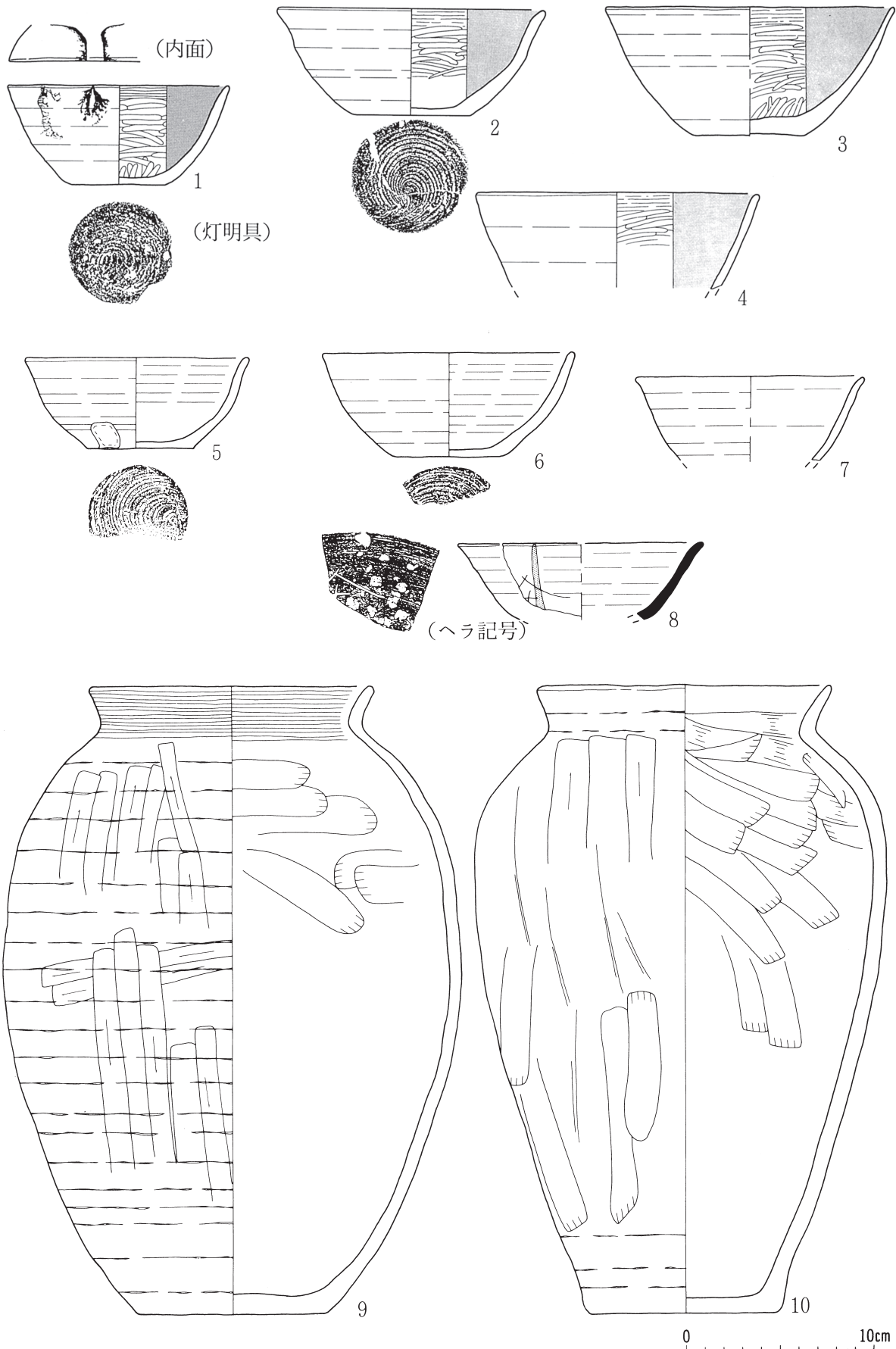


図23 第4号住居跡出土遺物(1)

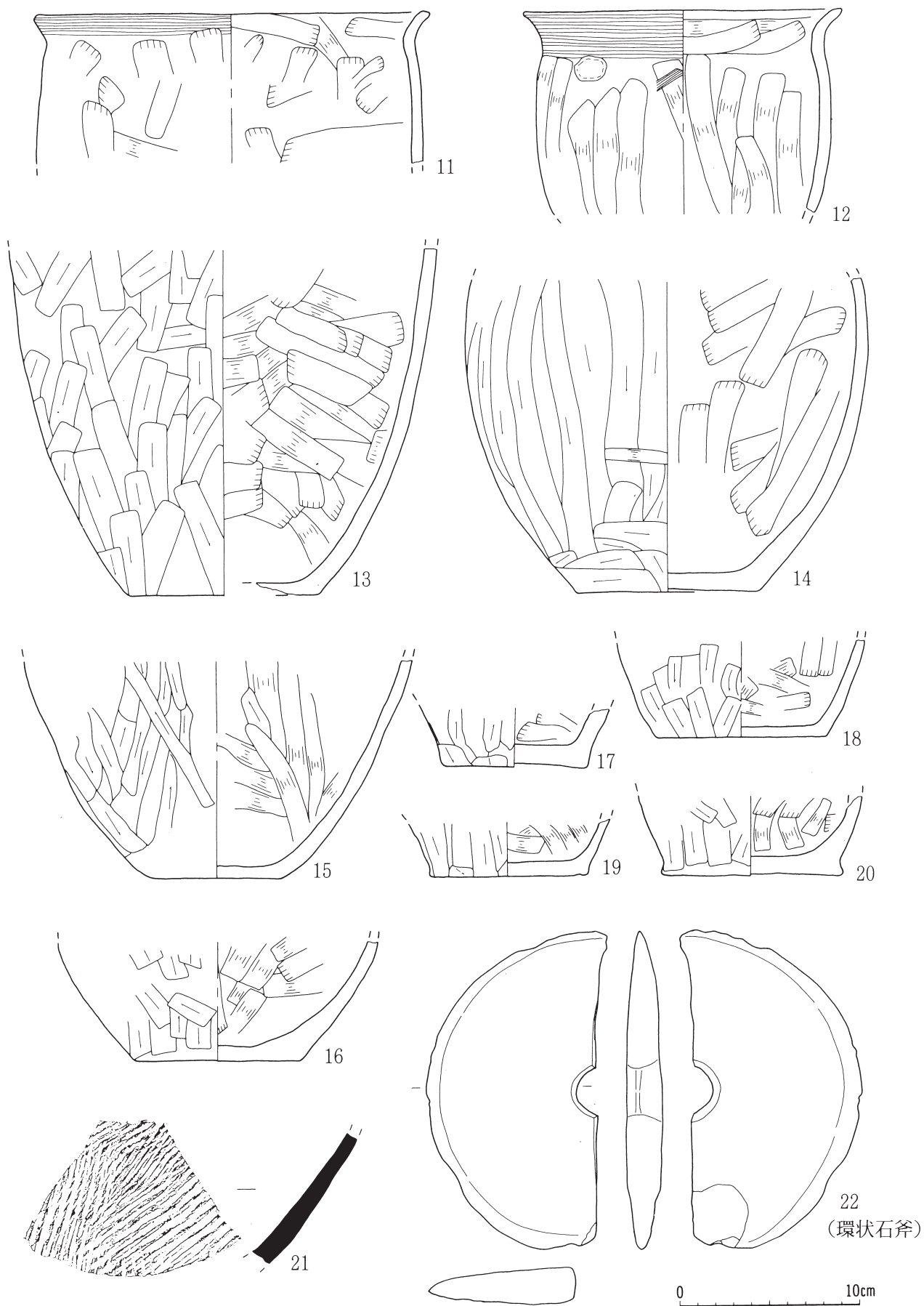


图24 第4号住居跡出土遺物(2)

## 第6号住居跡（第1号掘立柱建物跡付属）（図25・26）

〔位置〕 F～H-132・133グリッドに位置し、V層上面で褐色土の落ち込みを確認した。本住居跡の周辺には、北東側に第15号住居跡（第3号掘立柱建物跡付属）、南西側に第2号住居跡が位置する。また、5m程東側に第10号土坑が位置する。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 東壁辺491cm、西壁辺510cm、南壁辺395cm、北壁辺382cmで、平面は長方形を呈する。主軸方位はN-113°-E、床面積は14.93㎡である。本遺跡内では、中規模の住居跡である。

〔堆積土〕 7層に分層できた。全体にローム粒及び炭化物粒を含んだ褐色土で覆われている。また、カマド付近の床面から火山灰を検出したが、火山灰の蛍光X線分析の結果、風化した粘土であることが確認された。

〔壁・床面〕 V層を壁面とし、壁はほぼ垂直に直線的に立ち上がる。壁高は、東壁25cm、西壁9cm、南壁18cm、北壁18cm程である。床はほぼ平坦で、全体を締め固めたような貼床である。また、床面からは溝やピットを検出した。

〔壁溝〕 カマド直下部分も含めてほぼ一巡する。壁溝の幅は6～16cm、深さは12～22cm程である。

〔ピット・柱穴〕 5個のピットを検出した。主柱穴と考えられるものは、ピット2～5である。ピット1は、カマドの左袖横に位置し、土師器の坏や甕が数点出土した。貯蔵穴として機能していたものと考えられる。なお、各ピットの深さは以下の通りである。ピット1…46.2cm、ピット2…33.9cm、ピット3…31.7cm、ピット4…35.2cm、ピット5…18.0cm

〔カマド〕 東壁の中央からやや南寄りに位置し、遺存状態は良好である。カマド本体の袖部を構築していたと思われる粘土を検出した。袖は粘土をつき固めて構築されている。燃焼部は床面から6cm程掘り込まれており、火床面は径40cm程の不整な楕円形を呈する。煙道部は確認出来なかった。また、カマドの中央部には、土師器の甕の底部を伏せており、支脚として利用していた状態のまま検出された。

〔掘立柱建物跡〕 第1号掘立柱建物跡が竪穴部の東壁側に隣接する。検出状況より、本住居跡に付属するものと考えられる。竪穴部に対応する柱穴状のピットを6個検出した。各ピットの深さは以下の通りである。ピット1…43.3cm、ピット2…40.7cm、ピット3…18.5cm、ピット4…43.3cm、ピット5…23.7cm、ピット6…35.3cm

〔その他の附属施設〕 なし。

〔出土遺物〕 カマド付近から土師器の甕の口縁部破片や小型甕、埴の破片などが数点出土した。また、覆土中からも、土師器の坏や甕の破片数点と石鏃1点及び不定形スクレーパー1点も出土した。埴（図26-9）は、推定口径29.8cmを計測し、反転実測している。底部の形状は不明である。

〔小結〕 出土遺物などから、本住居跡の構築時期は、9世紀末から10世紀初頭と考えられる。また、本住居跡の5m程東側に10号土坑が位置するが、この土坑から出土した土器片と本住居跡出土のものが接合し、その他の土器片の特徴などが類似することから、これとほぼ同時期に機能していたものと捉えることができる。

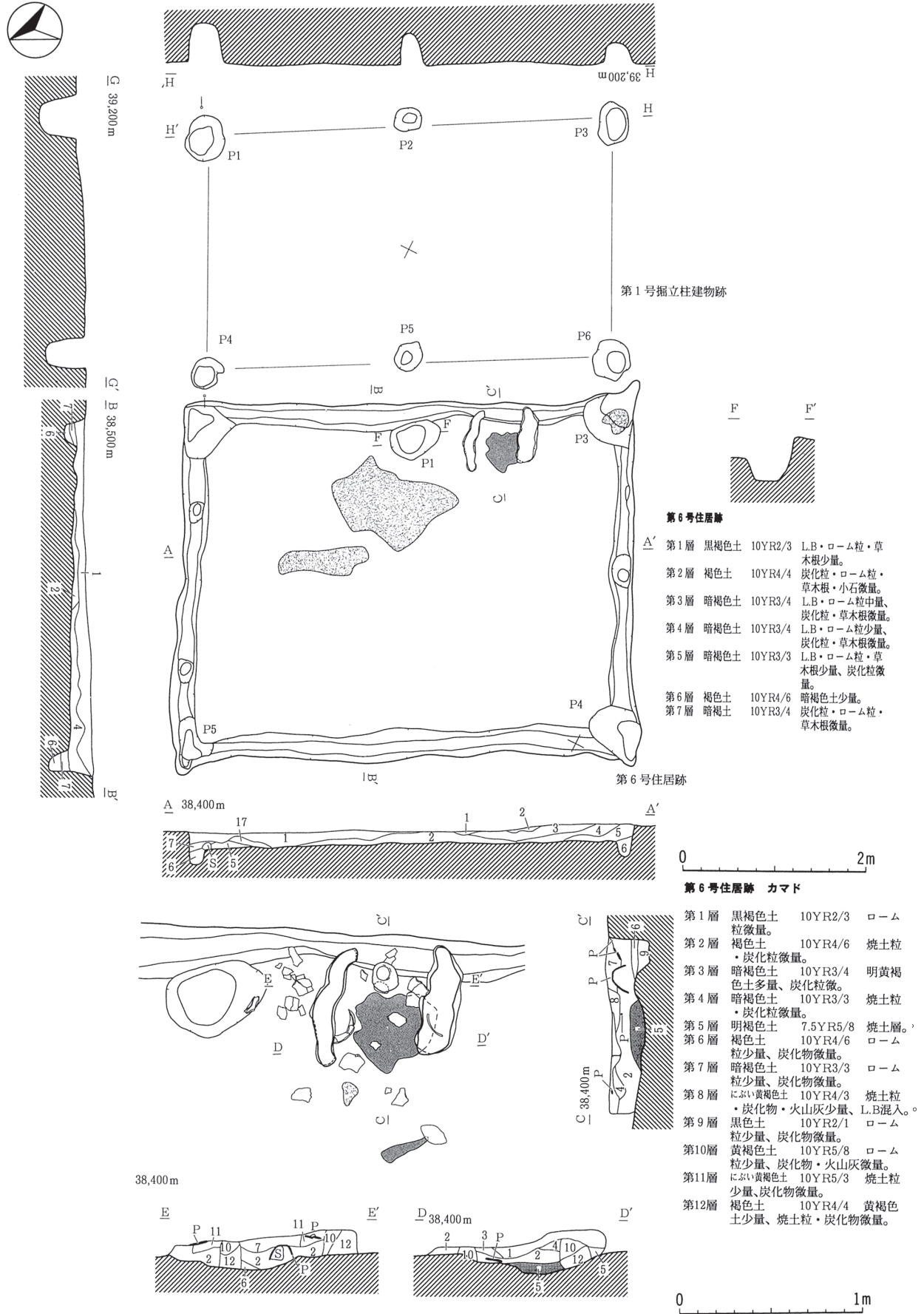


図25 第6号住居跡（第1号掘立柱建物跡付属）



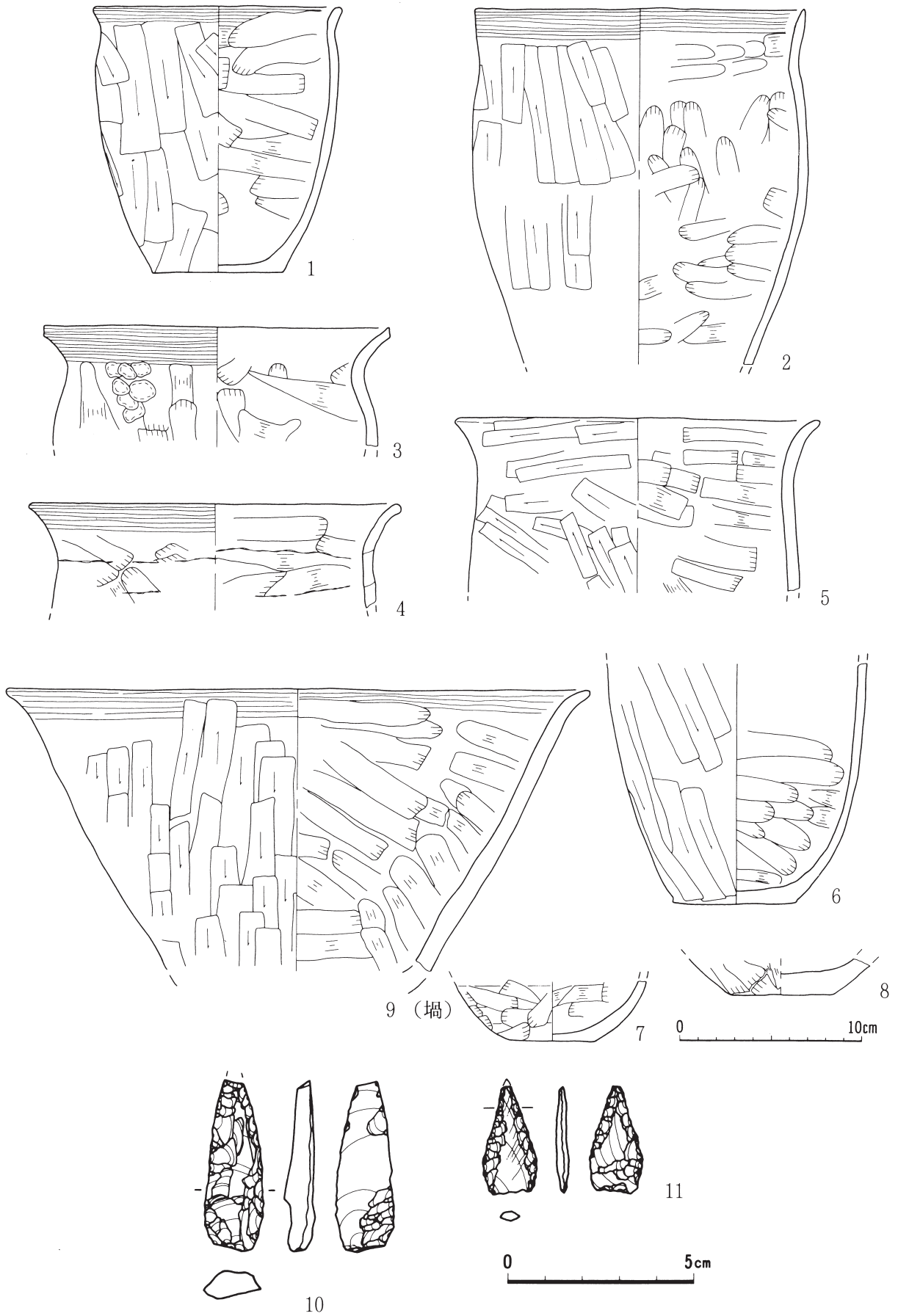


图26 第16号住居跡出土遺物

### 第7号住居跡（第2号掘立柱建物跡付属）（図27～29）

〔位置〕 D・E-126・127グリッドに位置し、V層上面で褐色土の落ち込みを確認した。本住居跡の周辺には、北西側に第8号住居跡、南西側に第12号（第4号掘立柱建物跡付属）・第14号住居跡、南側に第1号住居跡が位置する。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 南東壁辺335cm、北西壁辺325cm、南西壁辺310cm、北東壁辺310cmの方形を呈する。主軸方位はN-128°-E、床面積は8.29㎡である。本遺跡内では、中規模の住居跡である。

〔堆積土〕 19層に分層できた。全体にローム粒及び炭化物粒を含んだ褐色土で覆われている。また、覆土中に火山灰を含んでいる。また、床面直上の層には多量の炭化粒が含まれ、床面には炭化材が散布して出土することから、焼失したものと考えられる。

〔壁・床面〕 V層を壁面とし、壁は床面からほぼ垂直に直線的に立ち上がる。壁高は、南東壁25cm、北西壁35cm、南西壁33cm、北東壁21cm程である。床はほぼ平坦で、全体を締め固めたような貼床である。また、床面から溝とピットを検出した。

〔壁溝〕 カマドの構築直下を除いてはほぼ一巡する。壁溝の幅は2～15cm、深さは6～20cm程である。

〔ピット・柱穴〕 6個のピットを検出した。主柱穴と考えられるものは、ピット1～4である。なお、各ピットの深さは以下の通りである。ピット1…23.2cm、ピット2…21.7cm、ピット3…13.1cm、ピット4…21.2cm、ピット5…37.3cm、ピット6…21.0cm

〔カマド〕 南東壁の中央からやや南寄りに位置し、遺存状態は良好である。カマド本体の袖部を構築していたと思われる粘土塊を検出した。袖は粘土をつき固めて構築されている。燃焼部は床面から3cm程掘り込まれており、火床面は径40cm程の不整な楕円形を呈する。煙道部は半地下式で、壁から50cm程張り出している。また、カマドの中央には、土師器の甕の底部を伏せており、支脚として利用している。

〔掘立柱建物跡〕 第2号掘立柱建物跡が竪穴部の南東壁側に隣接する。検出状況より、本住居跡に付属するものと考えられる。掘り方が対応する柱穴状のピットを4個検出した。ピットの深さは以下の通りである。ピット1…52.5cm、ピット2…47.6cm、ピット3…45.1cm、ピット4…59.0cm

〔その他の附属施設〕 なし。

〔出土遺物〕 カマド付近から土師器甕が大量に出土した。カマドの支脚として使用されていた甕は図28-1と5であり、1はカマドの袖右横に完全な形で出土した（写真図版参照）。また、覆土中からは、土師器の甕や埴の破片が数点出土した。埴（図29-10）は、推定口径29.8cmを計測し、反転して実測しているが、底部の形状は不明である。輪積み痕が目立ち、粗末な作りである。その他に、凹み石1点が床面から出土している。

なお、床面から炭化材を出土した。

〔小結〕 本住居跡は、炭化材の検出状況から、焼失家屋と考えられる。また、出土遺物などから、本住居跡の構築時期は、9世紀末から10世紀初頭と考えられる。

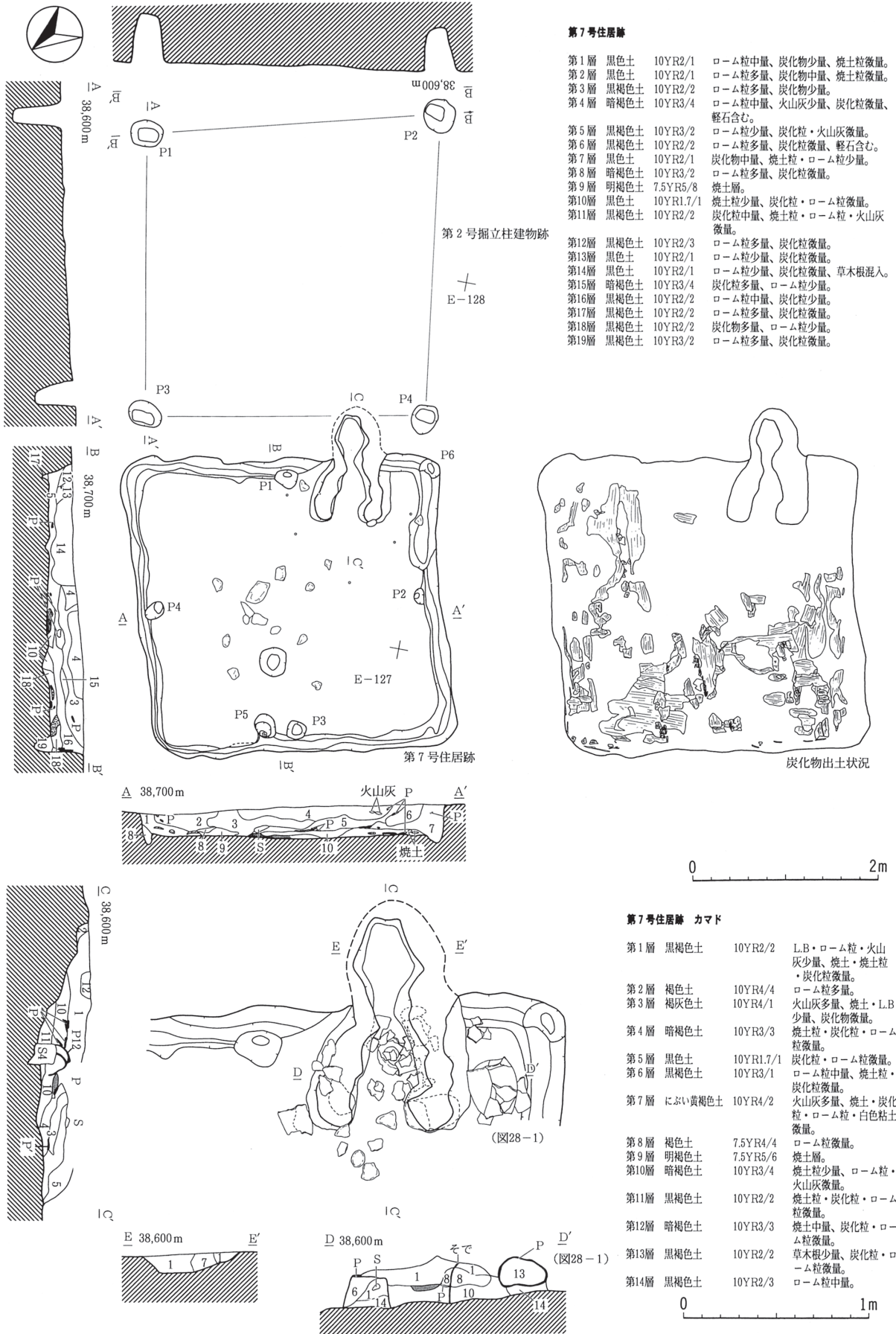


図27 第7号住居跡（第2号掘立柱建物跡付属）

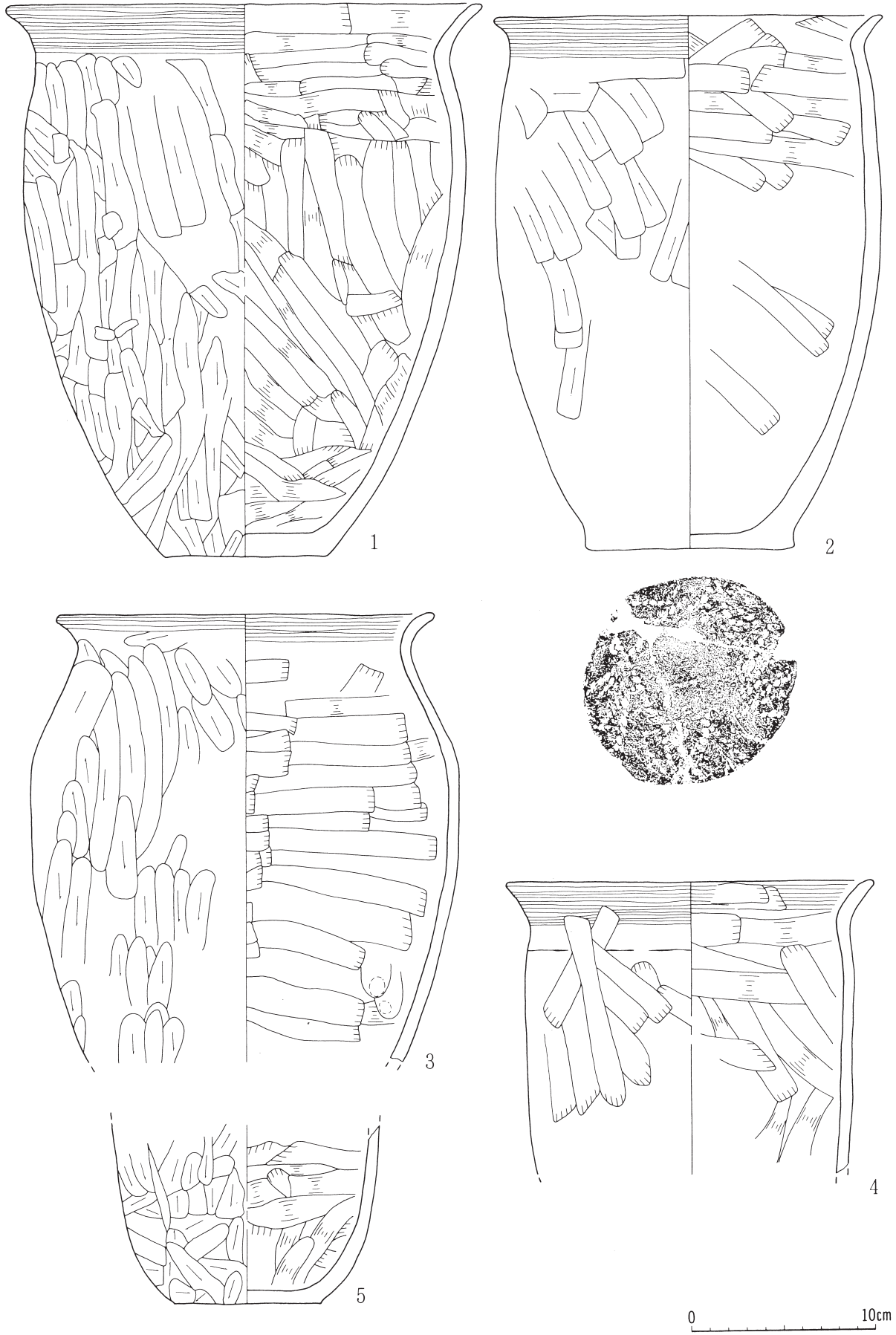


图28 第7号住居跡出土遺物(1)



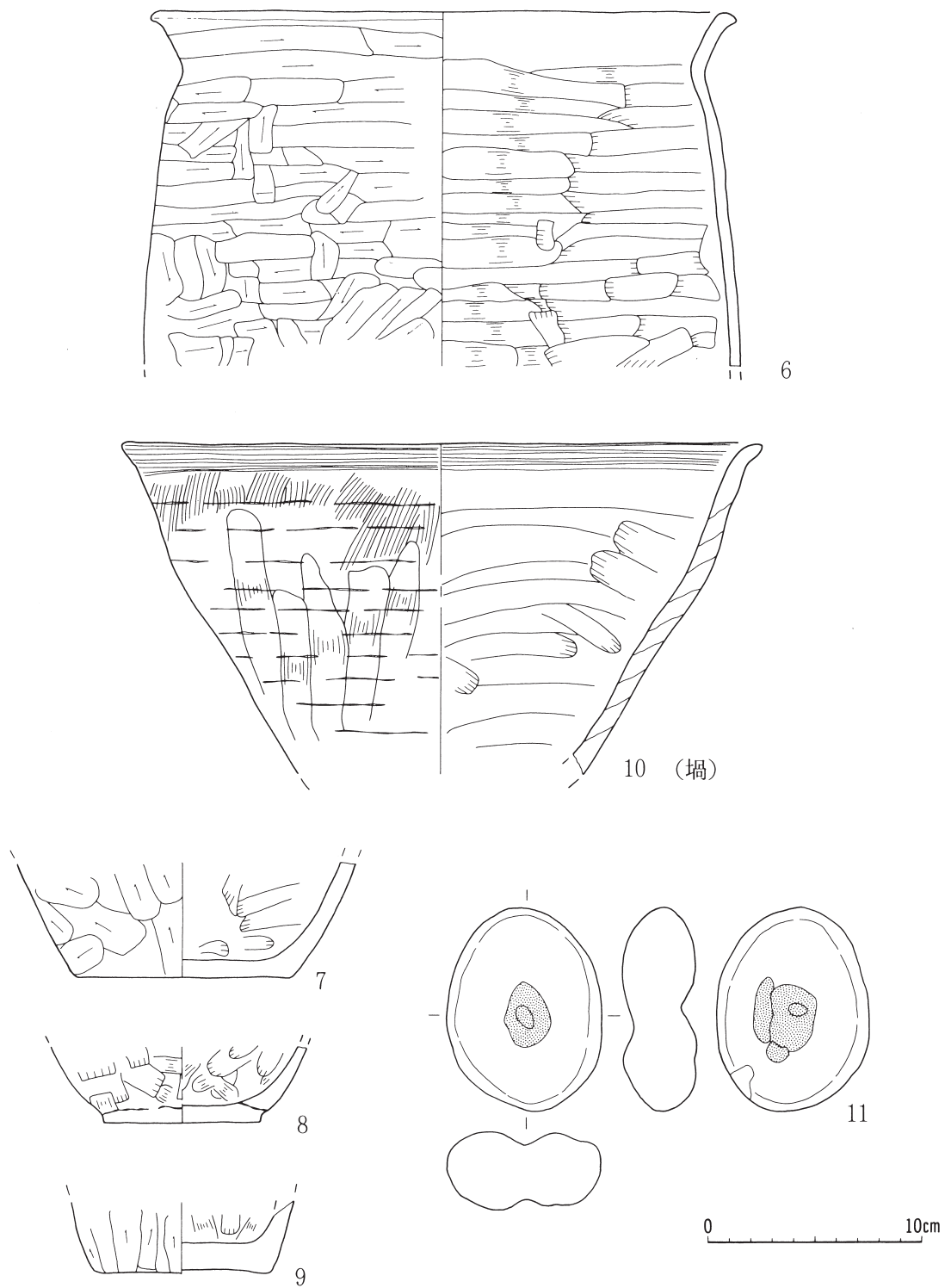


図29 第7号住居跡出土遺物(2)

### 第8号住居跡（図30）

〔位置〕 D・E-123・124グリッドに位置し、V層上面で褐色土の落ち込みを確認した。しかし、調査区が狭長地であるため、調査区外に延びる本住居跡の全容は把握できなかった。また、本住居跡の周辺には、南側に第12号（第4号掘立柱建物跡付属）・第14号住居跡、南西側には第13号住居跡、南東側には第7号住居跡（第2号掘立柱建物跡付属）が位置する。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 本住居跡の北東壁の一部と南東壁は調査区外のため、全容は把握できなかったが、検出した部分から推定すると、鋭角なコーナーから、ほぼ垂直に住居の縁が折れる張り出し部を持つ、一辺520cm程の不整な方形を呈すると思われる。床面積は推定30㎡であろう。本遺跡内では、中規模の住居跡である。

〔堆積土〕 13層に分層できた。全体にローム粒及び炭化物粒を含んだ褐色土で覆われている。また、床面付近に火山灰を微量含んでいる。

〔壁・床面〕 V層を壁面とし、壁は床面からほぼ垂直に直線的に立ち上がる。壁高は、南東壁33cm、北西壁60cm、南西壁44cm、北東壁51cm程と深く掘り込んでいる。床はほぼ平坦で、全体を締め固めたような貼床である。また、床面から溝とピットを検出した。

〔壁溝〕 張り出し部分も含めてほぼ一巡する。壁溝の幅は2～4cm、深さは1～17cm程である。

〔ピット・柱穴〕 5個のピットを検出した。支柱穴と考えられるものは、ピット2～4である。また、周溝底面より深さ20cm前後で楕円形の小ピットが6個検出した。なお、各ピットの深さは以下の通りである。ピット1…17.8cm、ピット2…13.5cm、ピット3…10.3cm、ピット4…22.2cm、ピット5…10.9cm

〔カマド〕 調査した範囲では検出されなかったが、調査区域外に位置するものと思われる。なお、本遺跡内のカマド検出状況から推測すると、南東壁に位置するものと思われる。

〔その他の附属施設〕 南西壁の南東側に200cm×120cm程の張り出し部分を有する。

〔出土遺物〕 覆土中から、土師器の甕の破片数点と須恵器の甕の破片2点及び、土製勾玉（図87-35）が1点出土した。

〔小結〕 本住居跡は、調査区外へ延びるため、カマドの検出は出来なかった。構築時期は、出土遺物などから、10世紀初頭の頃と考えられる。本遺跡の住居跡の中では、比較的新しい可能性が高い。

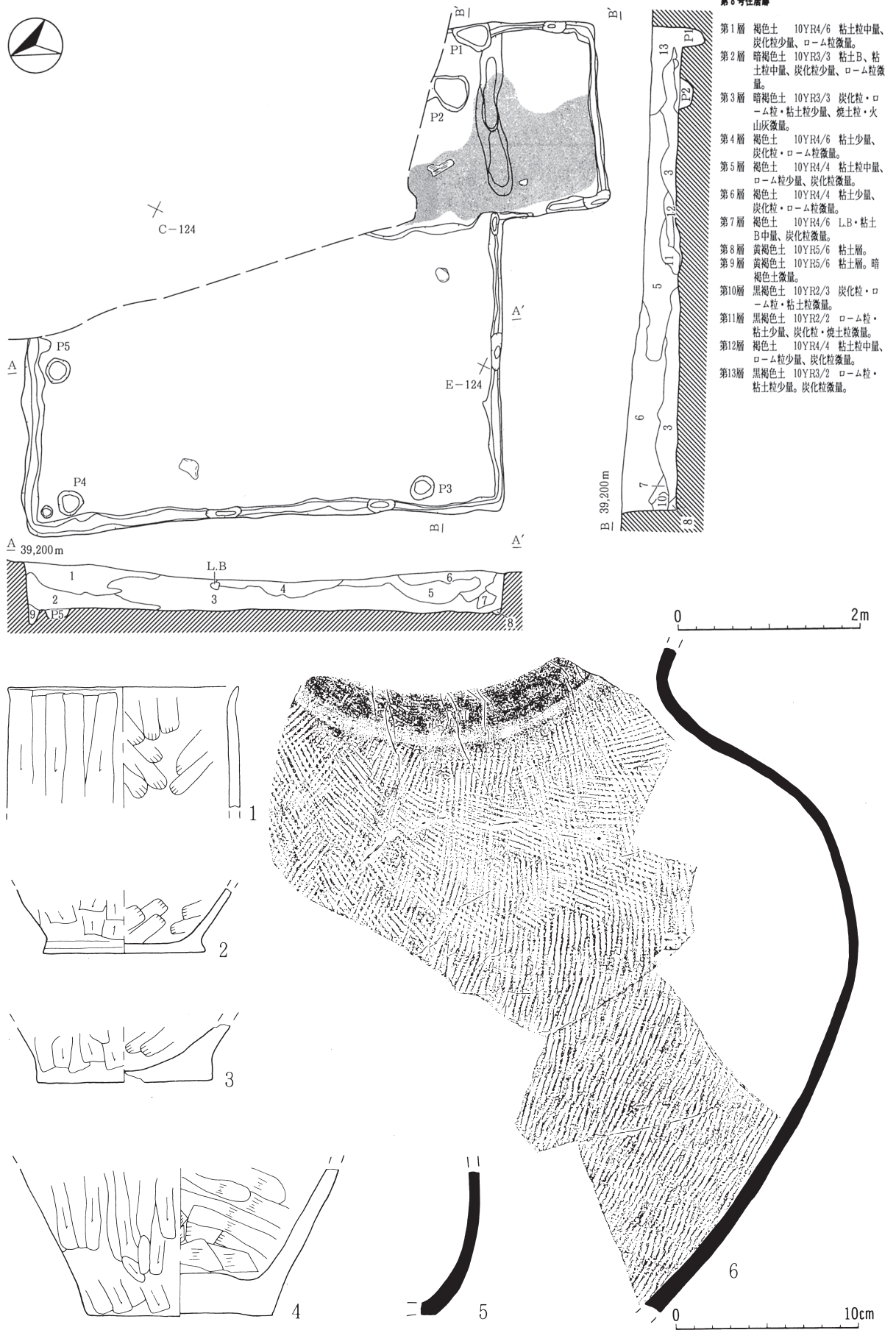


図30 第8号住居跡・出土遺物

### 第9号住居跡 (図31・32)

[位置] G～I-111・112グリッドに位置し、V層上面で褐色土の落ち込みを確認した。本住居跡の南西側には、第10号住居跡が位置する。

[重複] なし。

[平面形・規模] 南東壁辺405cm、北西壁辺348cm、南西壁辺357cm、北東壁辺323cmで、平面は方形を呈する。主軸方位はN-110°-Eと推定され、床面積は11.11㎡である。本遺跡内では、中規模の住居跡である。

[堆積土] 5層に分層できた。全体にローム粒及び炭化物粒を含んだ褐色土で覆われている。自然堆積の様相を呈する。

[壁・床面] V層を壁面とし、壁は床面からほぼ垂直に直線的に立ち上がる。壁高は、南東壁20cm、北西壁22cm、南西壁24cm、北東壁20cm程である。床は、ほぼ平坦で、全体を締め固めたような貼床である。また、床面から溝とピットを検出した。

[壁溝] カマド構築直下部分は、攪乱を受けているため不明だが、ほぼ一巡する。壁溝の幅は2～13cm、深さは5～9cm程である。

[ピット・柱穴] 主柱穴と考えられる4個のピットを各隅に検出した。なお、各ピットの深さは以下の通りである。ピット1…53.1cm、ピット2…38.2cm、ピット3…50.5cm、ピット4…52.2cm

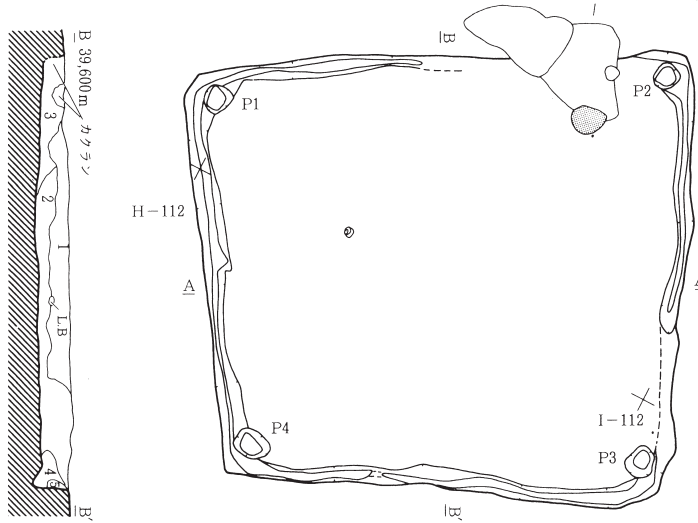
[カマド] 攪乱を受け、遺存状態が悪い。火床面と袖の芯材に使用されたとと思われる礫数個を検出ただけである。火床面は径25cm程の楕円形を呈する。南東壁の中央よりやや南寄りに位置するものと思われるが、カマドの全容は不明である。

[その他の附属施設] なし。

[出土遺物] 出土遺物の半数以上が須恵器の甕の胴部破片であり、本遺跡内の遺構内出土須恵器の大半をしめる。また、覆土中からは、土師器の坏や甕、埴の破片なども出土した。須恵器の胴部外面には、木目様格子目状の叩き目が主で、内面に当て具痕が認められるものもある。中でも、図32-8の内面には、青海波紋状の当て具痕が認められ、移入品の可能性が高い。

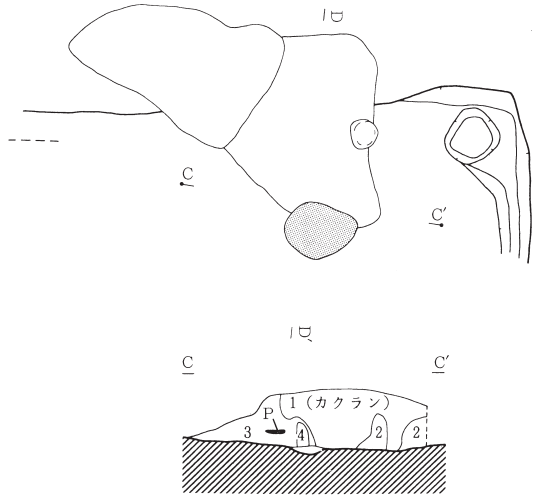
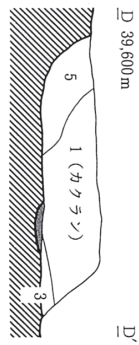
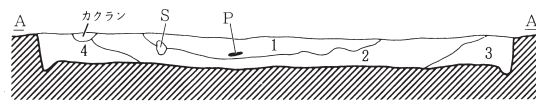
[小結] 本住居跡の構築時期は、出土遺物から、10世紀前半と考えられる。





**第9号住居跡**

- 第1層 黒褐色土 10YR3/2 草木根多量、炭化粒少量、ローム粒微量。
- 第2層 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒・草木根少量、炭化粒微量。
- 第3層 暗褐色土 10YR3/4 炭化物・ローム粒・草木根少量。
- 第4層 褐色土 10YR4/6 L.B・草木根少量、炭化粒微量。



**第9号住居跡 カマド**

- 第1層 暗褐色土 10YR3/4 草木根多量、炭化粒・ローム粒少量。
- 第2層 褐色土 10YR4/6 ローム層。焼土B多量。
- 第3層 褐色土 10YR4/4 ローム粒少量、炭化粒微量。
- 第4層 黄褐色土 10YR5/8 L.B混入。
- 第5層 褐色土 7.5YR4/4 焼土B少量、炭化粒微量。
- 第6層 明赤褐色土 5YR5/8 焼土層。

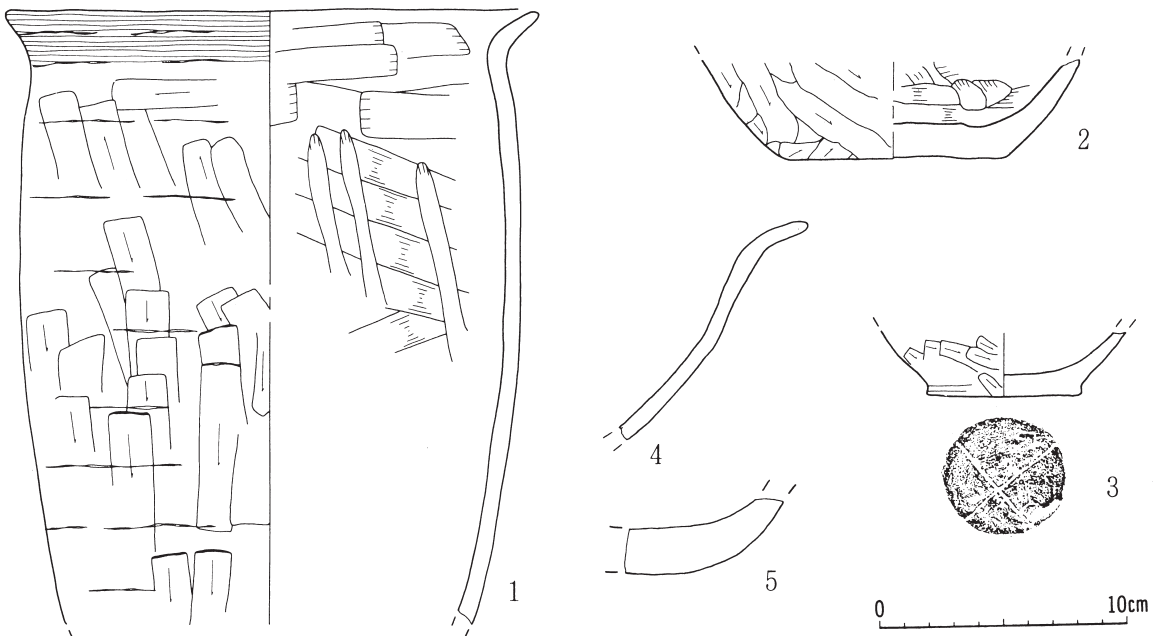


図31 第9号住居跡・出土遺物(1)

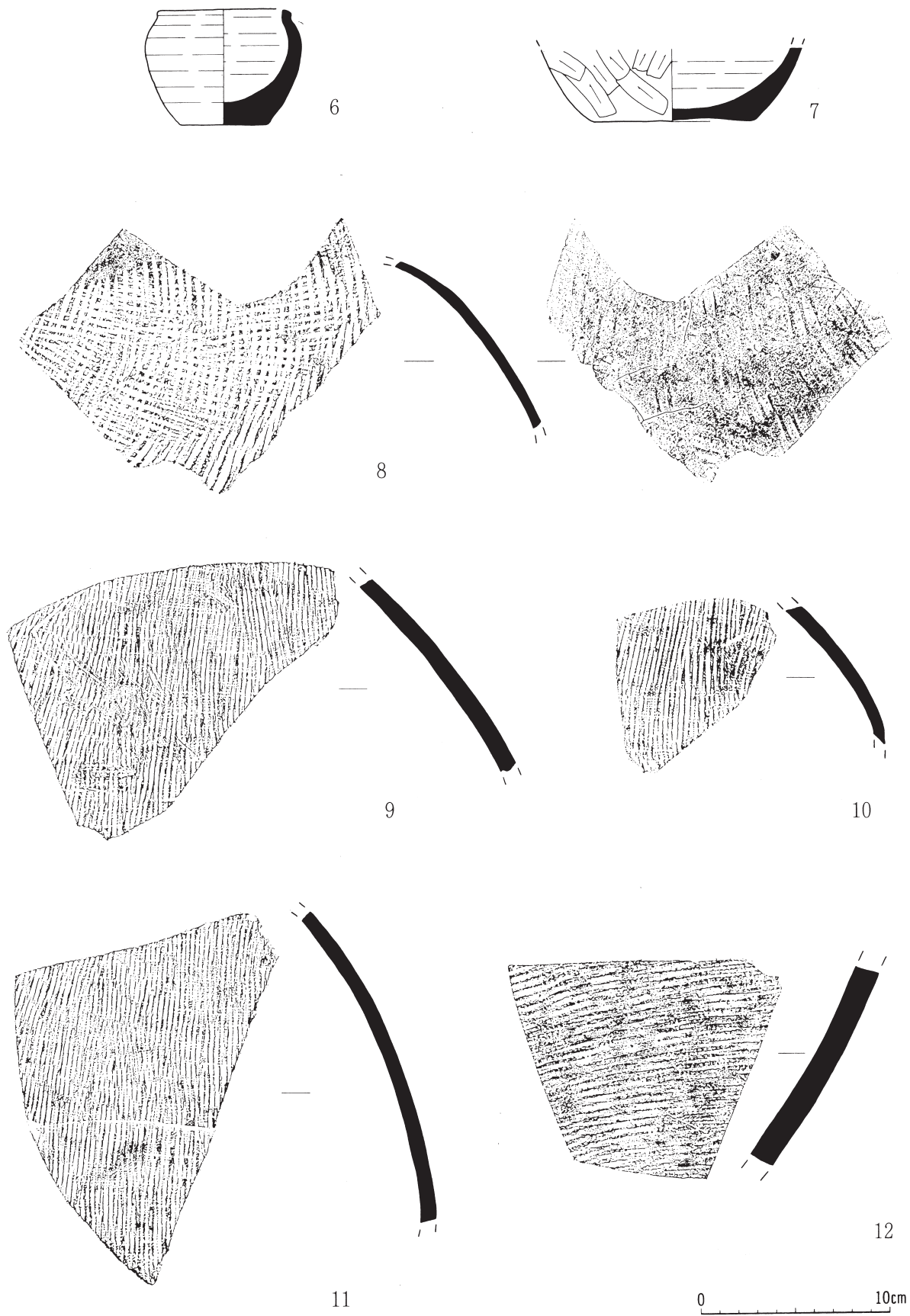


图32 第9号住居跡 出土遺物(2)

第10号住居跡 (図33)

[位置] J・K—111・112グリッドに位置し、V層上面で褐色土の落ち込みを確認した。本住居跡の北東側には、第9号住居跡が位置する。

[平面形・規模] 一辺240cm程の方形を呈する。主軸方位はN—127°—E、床面積は4.41㎡である。本遺跡内では、最も小規模の住居跡である。

[堆積土] 6層に分層できた。堆積土の主体は、にローム粒及び炭化粒を微量に含んだ黒褐色土である。床面直上には、ローム粒を多量に含む黄褐色土等の堆積が見られた。自然堆積の様相を呈する。

[壁・床面] V層を壁面とし、壁は床面から直線的にやや外反して立ち上がる。壁高は、南東壁27cm、北西壁31cm、南西壁37cm、北東壁33cm程である。床はほぼ平坦で、全体を締め固めたような貼床である。また、床面から炭化物少量と溝を検出した。

[壁溝] カマド構築部分を除いてほぼ一巡する。壁溝の幅は2～10cm、深さは5～13cm程である。

[カマド] 南東壁の中央からやや南西寄りに位置している。煙道部が地下式のカマドである。袖は破壊されており、遺存状態は良くない。袖、天井部は粘土で構築したと考えられ、周辺の床面から浮いた状態で粘土塊と芯材に使用されたと考えられる礫が数個出土した。火床面は若干窪んでいる程度であり、焼土の範囲は径20cm程の円形である。煙道部は、地山をトンネル状に掘り込んで構築しており、約15度の傾斜で下がりながら煙出し孔まで掘り込まれている。煙出し孔は、22cm×25cmの楕円形で、確認面から床面までは48cmの深さである。

[小結] 出土遺物がなく、本住居跡の構築時期については不明であるが、カマドの構築方法(地下式)などから、本遺跡内の住居跡の中では最も古いと考えられる。

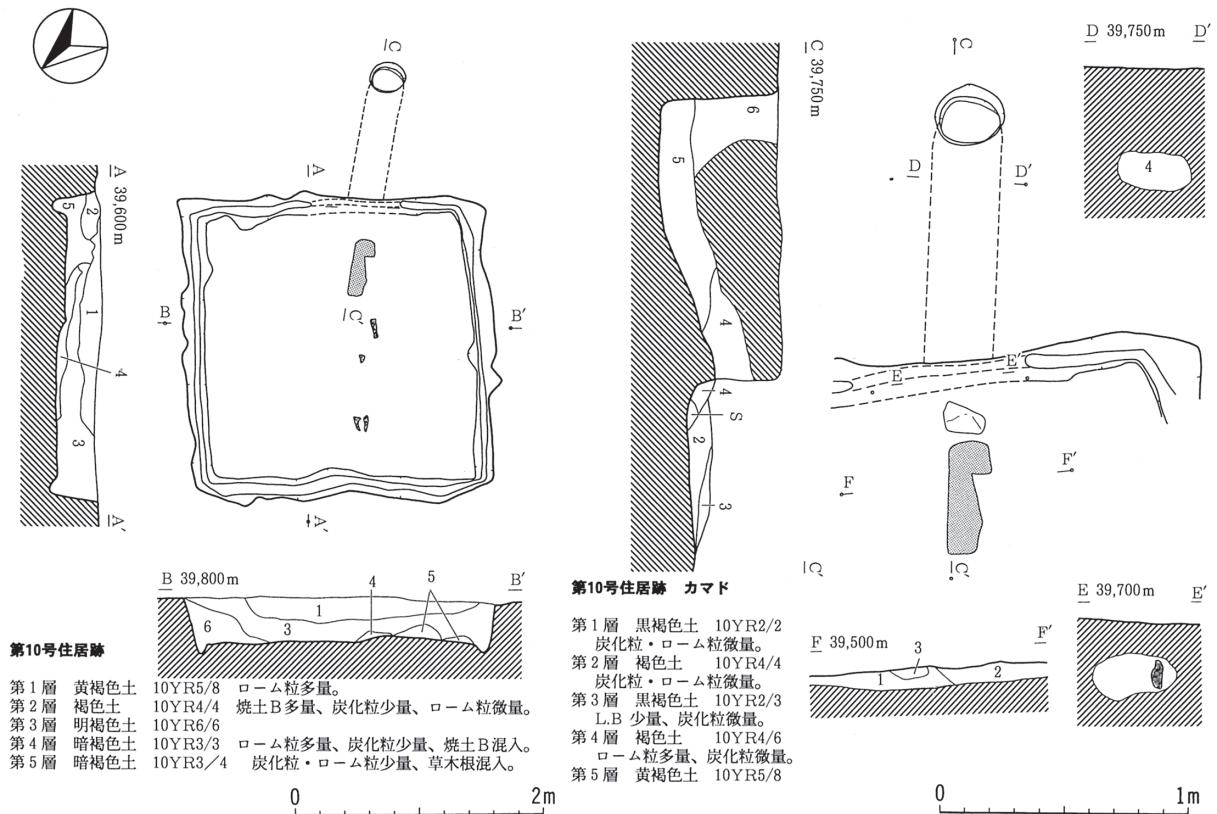


図33 第10号住居跡・同カマド

### 第11号住居跡（図34・35）

〔位置〕 K・L-101・102グリッドに位置し、V層上面で褐色土の落ち込みを確認した。周辺には本住居跡以外、他に遺構などはない。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 南東壁辺576cm、北西壁辺552cm、南西壁辺595cm、北東壁辺592cmの方形を呈する。主軸方位はN-138°-E、床面積は29.54㎡である。本遺跡内では、大規模の住居跡である。

〔堆積土〕 8層に分層できた。全体にローム粒を含む褐色土で覆われている。また、3層には火山灰（蛍光X線分析結果では十和田a火山灰に対応）を多量に含んでいる。

〔壁・床面〕 V層を壁面とし、壁は床面から直線的に外反して立ち上がる。壁高は、南東壁17cm、北西壁19cm、南西壁15cm、北東壁10cm程である。床はほぼ平坦で、全体を締め固めたような貼床である。カマドの周辺の床面から、ローム粒や不純物の混じりの多い火山灰を検出した。また、床面から溝とピットを検出した。

〔壁溝〕 カマド構築直下部分を除いてほぼ一巡する。壁溝の幅は2～8cm、深さは7～10cm程である。

〔ピット・柱穴〕 10個のピットを検出した。主柱穴と考えられるものは、ピット1～6である。しかし、ピット3・4及び5・6はそれぞれ並んでおり、主柱穴として機能したものは不明確である。なお、各ピットの深さは以下の通りである。ピット1…14.5cm、ピット2…66.2cm、ピット3…54.2cm、ピット4…59.0cm、ピット5…60.0cm、ピット6…52.0cm、ピット7…36.4cm、ピット8…42.3cm、ピット9…25.5cm、ピット10…26.4cm

〔カマド〕 南東壁の中央からやや南寄りに位置し、遺存状態は良好である。カマド本体の袖部を構築していたと思われる粘土塊を検出した。袖は粘土をつき固めて構築しており、袖の芯材には礫を使用している。燃焼部は床面から5cm程掘り込まれており、火床面は径30cm程の不整な楕円形を呈する。煙道部は地山を掘り込んで構築した半地下式で、壁の外に60cm程張り出している。

〔その他の附属施設〕 なし。

〔出土遺物〕 カマド付近から土師器の甕が2点、覆土中から土師器の坏1点と小型甕の底部が1点、須恵器の小皿が1点出土した。土師器の坏は、ロクロ成形で底部は回転糸切の平底、器形は内湾ぎみに立ち上がり口縁はやや外反する。甕は、口縁部を横位にナデ、体部を縦位にヘラナデで整形し、口縁は短く、大きく外反する。また、図35-4の須恵器の小皿は、本遺跡内出土遺物ではこの1点のみである。

〔小結〕 本住居跡の構築時期は、出土遺物から、9世紀末と考えられる。



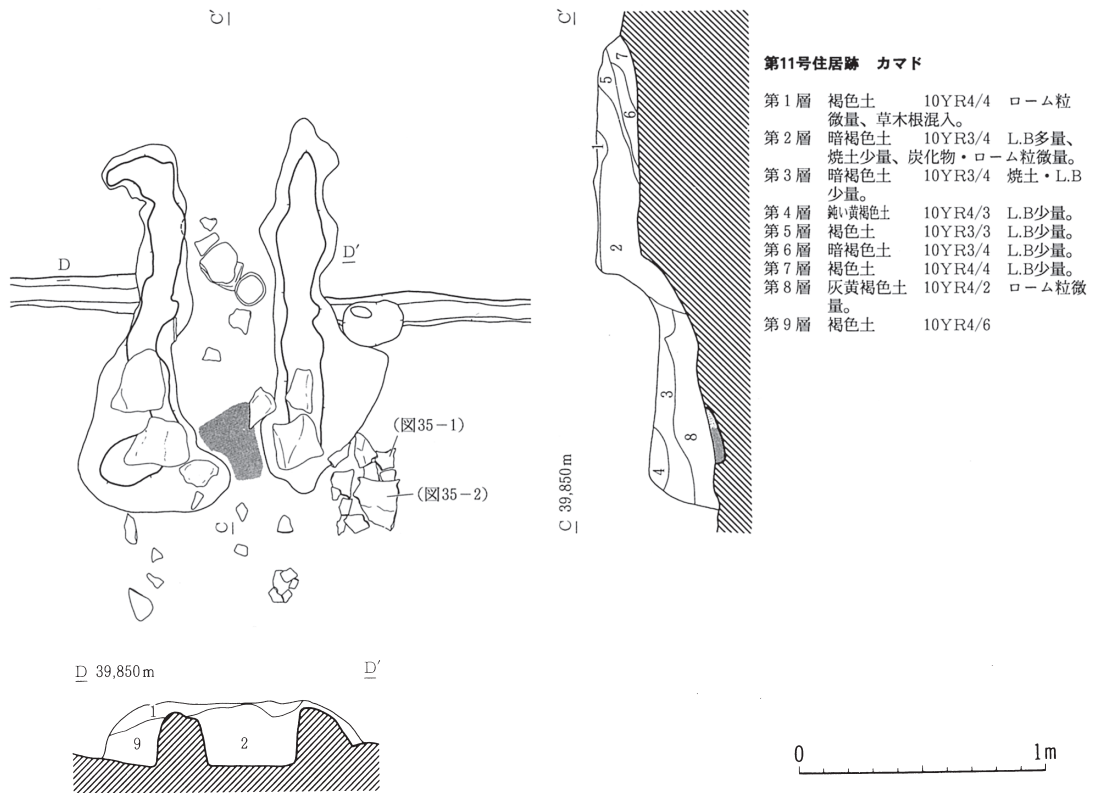
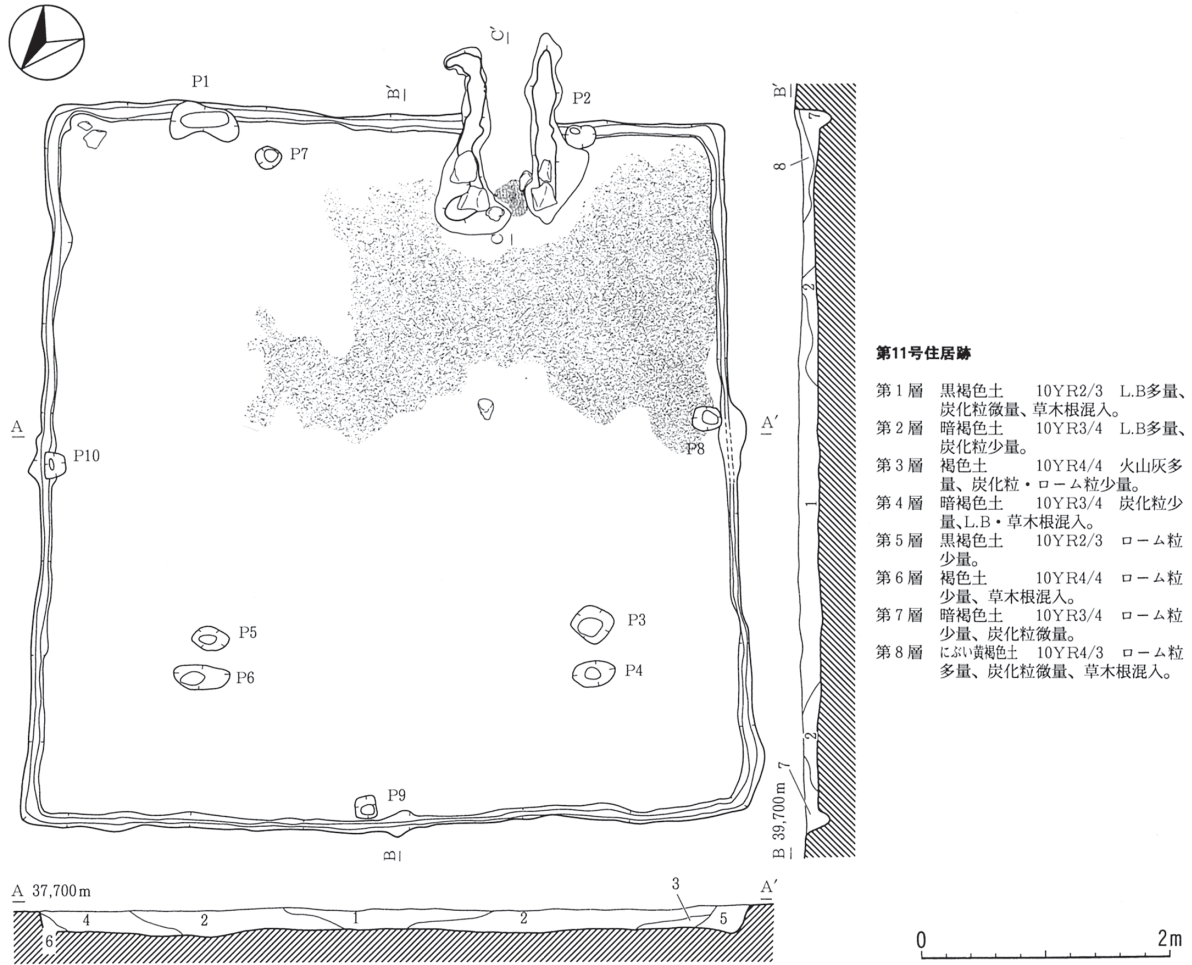


図34 第11号住居跡・同カマド

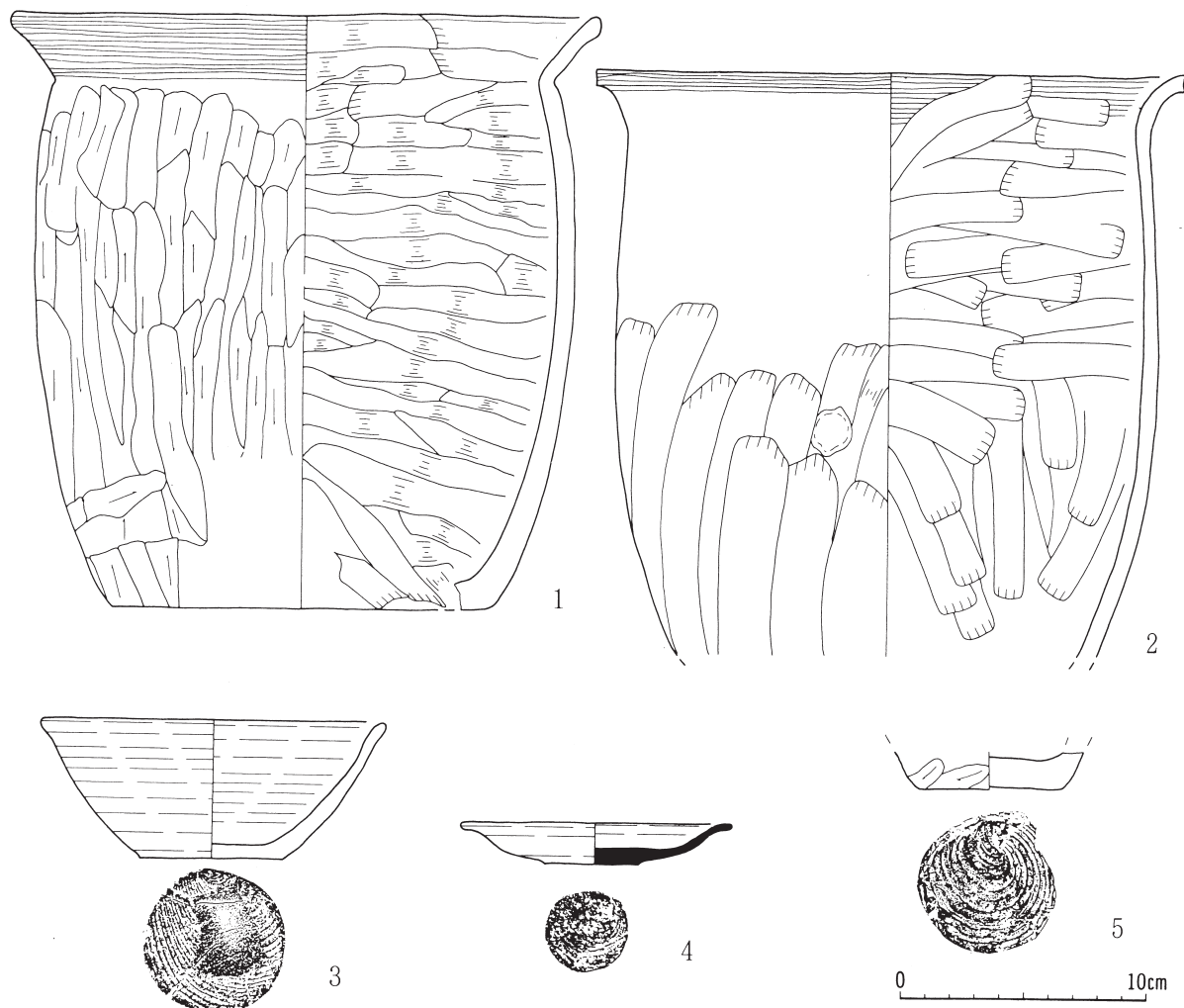


図35 第11号住居跡出土遺物

第12号住居跡（第4号掘立柱建物跡付属）（図36～39）

〔位置〕 F～H-126・127グリッドに位置し、V層上面で褐色土の落ち込みを確認した。本住居跡の周辺には、北側に第8号住居跡、北東側に第7号住居跡（第2号掘立柱建物跡付属）、北西側に第13号住居跡、西側に第1号住居跡等が密集している。

〔重複〕 第14号住居跡、第11号土坑と重複し、本住居跡は第14号住居跡よりは新しく、第11号土坑よりは古い。また、本住居跡の床面の掘り方を調査したところ、床面の北東、北西、南西側に壁溝を検出したことから、拡張した住居であることが認められた。当初、一辺約240cmの方形の住居跡であったものが、カマドのある南東壁のみを残して、拡張したものと考えられる。

〔平面形・規模〕 南東壁辺577cm、北西壁辺570cm、南西壁辺 534cm、北東壁辺 553cmの方形を呈する。主軸方位はN-123° -E、床面積は32.5㎡である。本遺跡内では、大規模の住居跡である。

〔堆積土〕 29層に分層できた。全体に炭化粒及びピローム粒を含む褐色土で覆われている。なお、22層は掘り方の層であり、23～29層は出入り口施設と思われる部分の堆積土である。また、床面に火山灰（蛍光X線分析結果では十和田a火山灰に対応）を含む。人為的堆積の様相を呈する。

〔壁・床面〕 V層を壁面とし、壁は床面から直線的に垂直に立ち上がる。壁高は、南東壁44cm、北

西壁56cm、南西壁45cm、北東壁43cm程と深く掘り込まれている。床はほぼ平坦で、全体を締め固めたような貼床である。また、床面から溝とピットを検出した。カマド付近の床面から、火山灰と炭化物を検出した。

〔壁溝〕 出入口と思われる施設の構築部分を除いてほぼ一巡する。壁溝の幅は2～18cm、深さは4～15cm程である。また、堀方調査では、床面の直下から拡張前の溝を検出した。南東壁と南西壁を利用し、拡張が行われている。拡張前の溝の幅は3～26cm、深さは10～31cm程である。

〔ピット・柱穴〕 5個のピットを検出した。主柱穴と考えられるものは、ピット1～4である。特に、ピット3・4の断面には柱を立てた痕跡が見られる。なお、各ピットの深さは以下の通りである。ピット1…68.5cm、ピット2…75.7cm、ピット3…55.5cm、ピット4…65.7cm、ピット5…15.1cm

〔カマド〕 2回の改築が行われている。いずれも南東壁の中央から南寄りに位置する。構築時期の新しい順にカマド①、カマド②、カマド③として記述する。カマド①は、半地下式のもので、遺存状況は良好である。袖から煙道部にかけて粘土をつき固めて構築しているが、改築により袖は床面にだけ残存している。煙道部底面は、煙出し孔にかけて徐々に高くなりなる。燃焼部の範囲は不明瞭である。カマド②は、①のすぐ南側に構築され、半地下式のものである。袖から煙道部にかけて粘土をつき固めて構築している。煙道部底面は、カマド③の煙道部を埋め立てて再利用している。火床面は径30cm程の円形である。カマド③、改築によりカマド本体は残存せず、煙道部のみ検出した。煙道部は地下式のもので、約20度の傾斜で下がりながら煙出し孔まで掘り込まれている。煙出し孔は住居より1m程離れて位置し、径20cm程の円形と思われる。

〔掘立柱建物跡〕 第4号掘立柱建物跡が竪穴部の南東壁側に隣接する。検出状況より、本住居跡に付属するものと考えられる。掘り方が対応する柱穴状のピットを6個検出した。ピットの深さは以下の通りである。ピット1…27.9cm、ピット2…38.4cm、ピット3…32.5cm、ピット4…48.9cm、ピット5…32.0cm、ピット6…32.4cm

〔その他の附属施設〕 本住居跡の南西壁の南東寄りに出入口と思われる付属施設を検出した。壁を斜めに削平し、残存部で約150cm程住居から張り出した緩傾斜面を作り、その上に盛土したものと考えられる。この部分は堅く締まっている。また、傾斜面のほぼ中央に深さ約20cmの段を有する。

〔出土遺物〕 カマド付近から、土師器の甕や小型甕が大量に出土した（総破片数約80点）。床面直上から土師器の坏1点のほか、床面や覆土中から甕の破片が数十点出土した。また、須恵器の壺の底部破片も1点出土している。出土遺物の中では、土師器の甕が大半をしめ、器形は、口縁部が短く、やや外反するものが多い、中には、底辺部にくびれを有するものも多く認められる。なお、図39—19の土師器の底部破片は、「製塩土器」と思われる。その他、鉄製品が5点出土（図39—21～25）。

なお、掘り方の調査中に土師器の土器片が十数点出土し、甕1個体（図38—3）となった。

〔小結〕 本住居跡の構築時期は、出土遺物等から、9世紀末から10世紀初頭と考えられる。



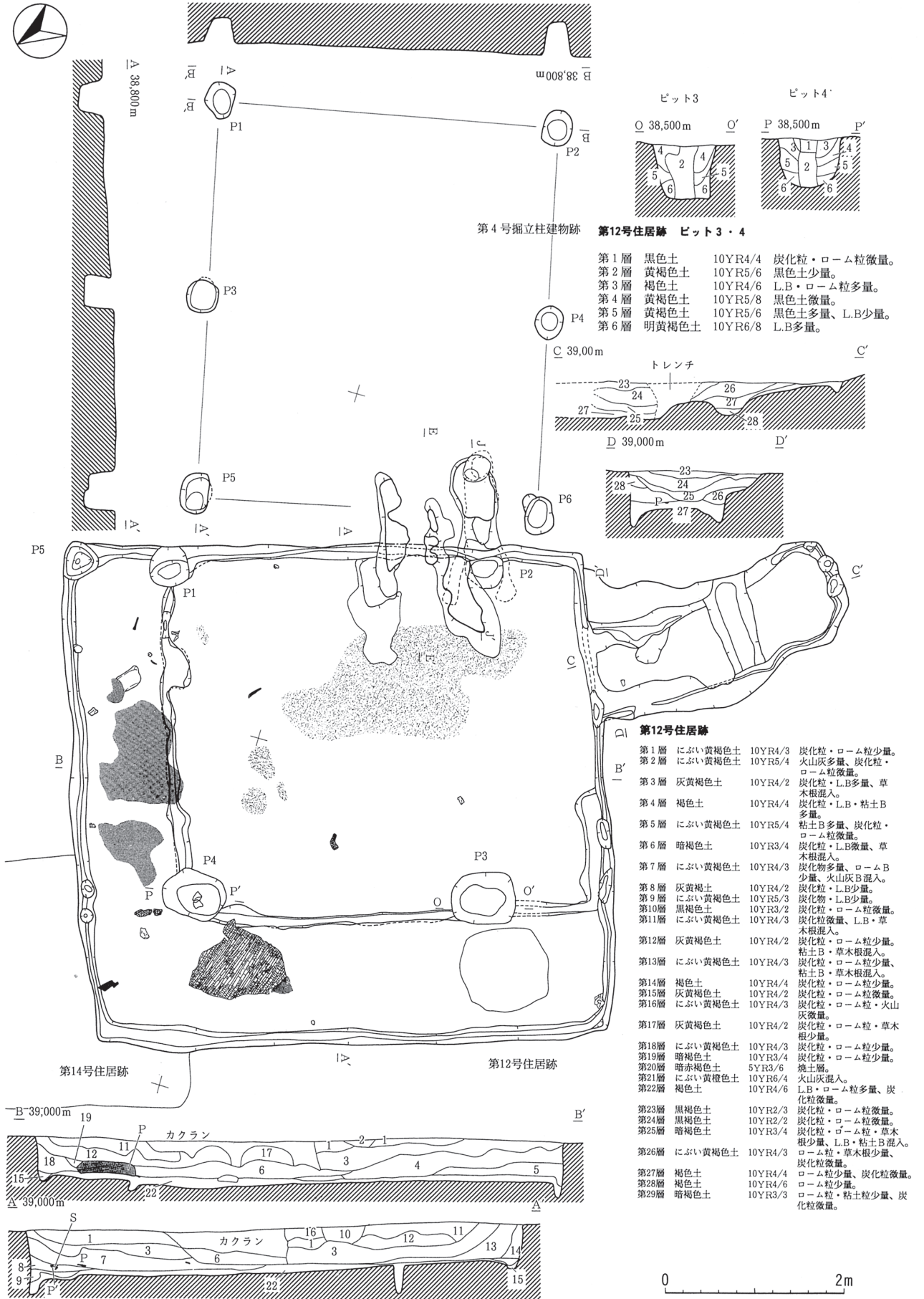


図36 第12号住居跡（第4号掘立柱建物跡付属）



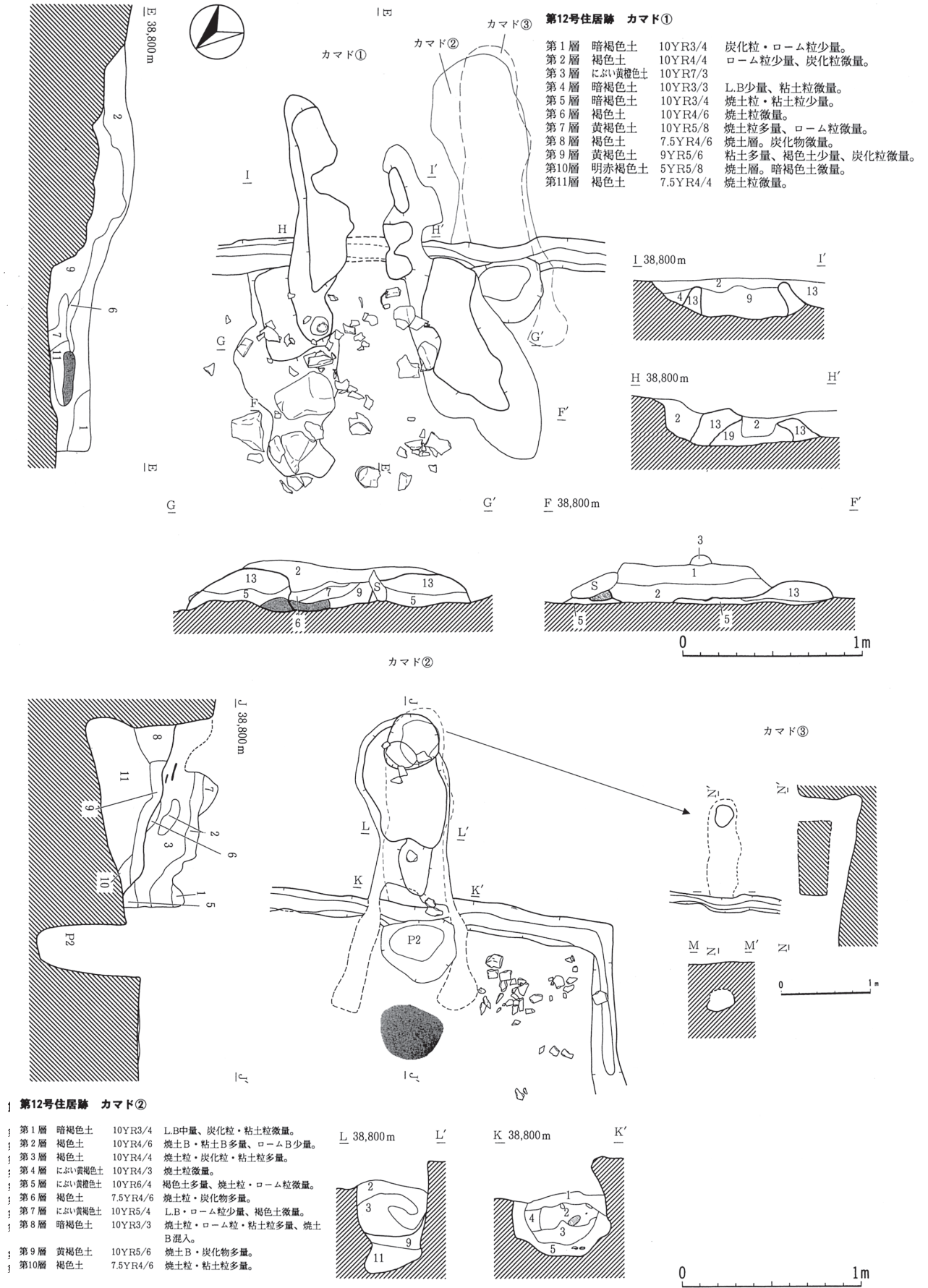


図37 第12号住居跡カマド

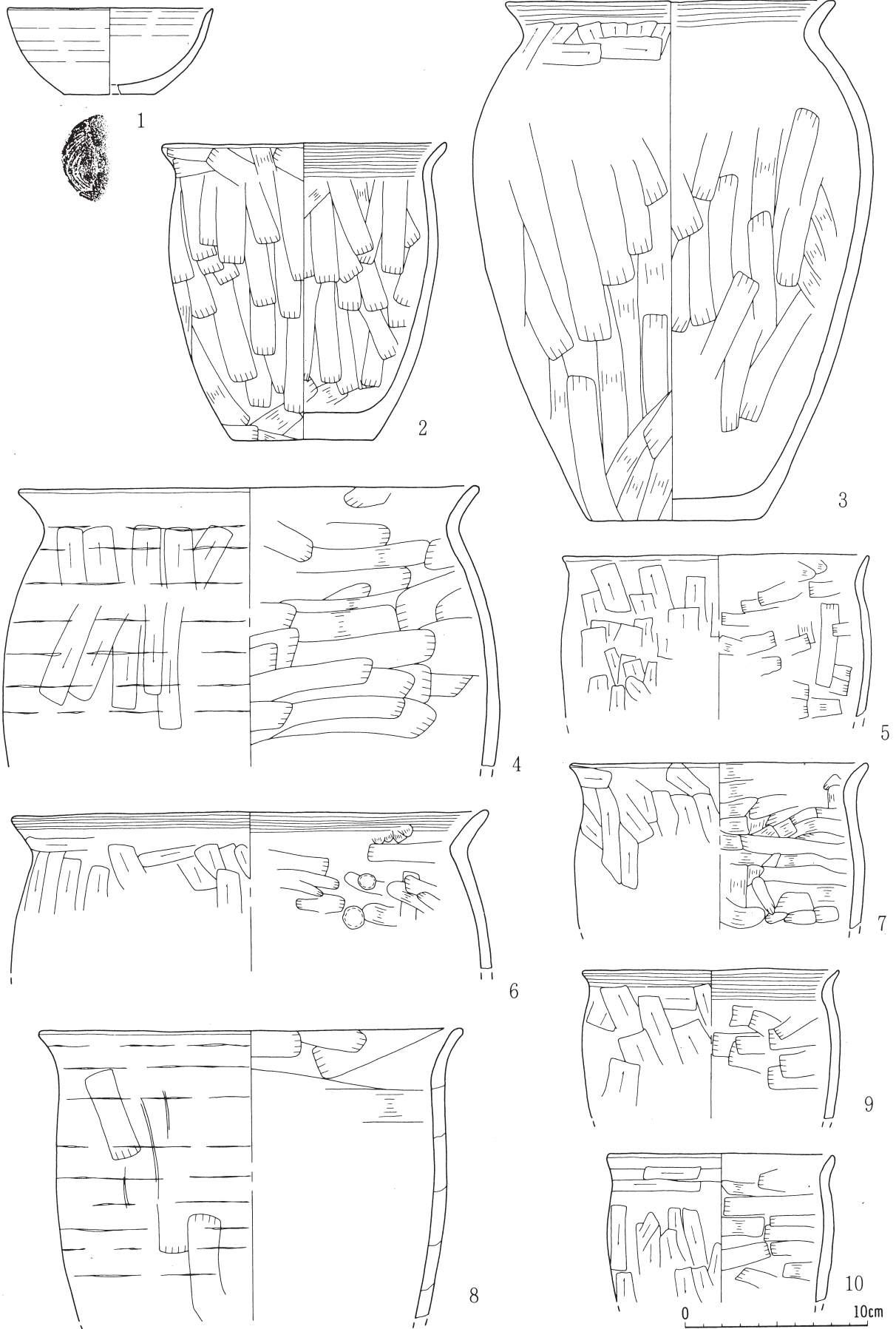


图38 第12号住居跡 出土遺物(1)

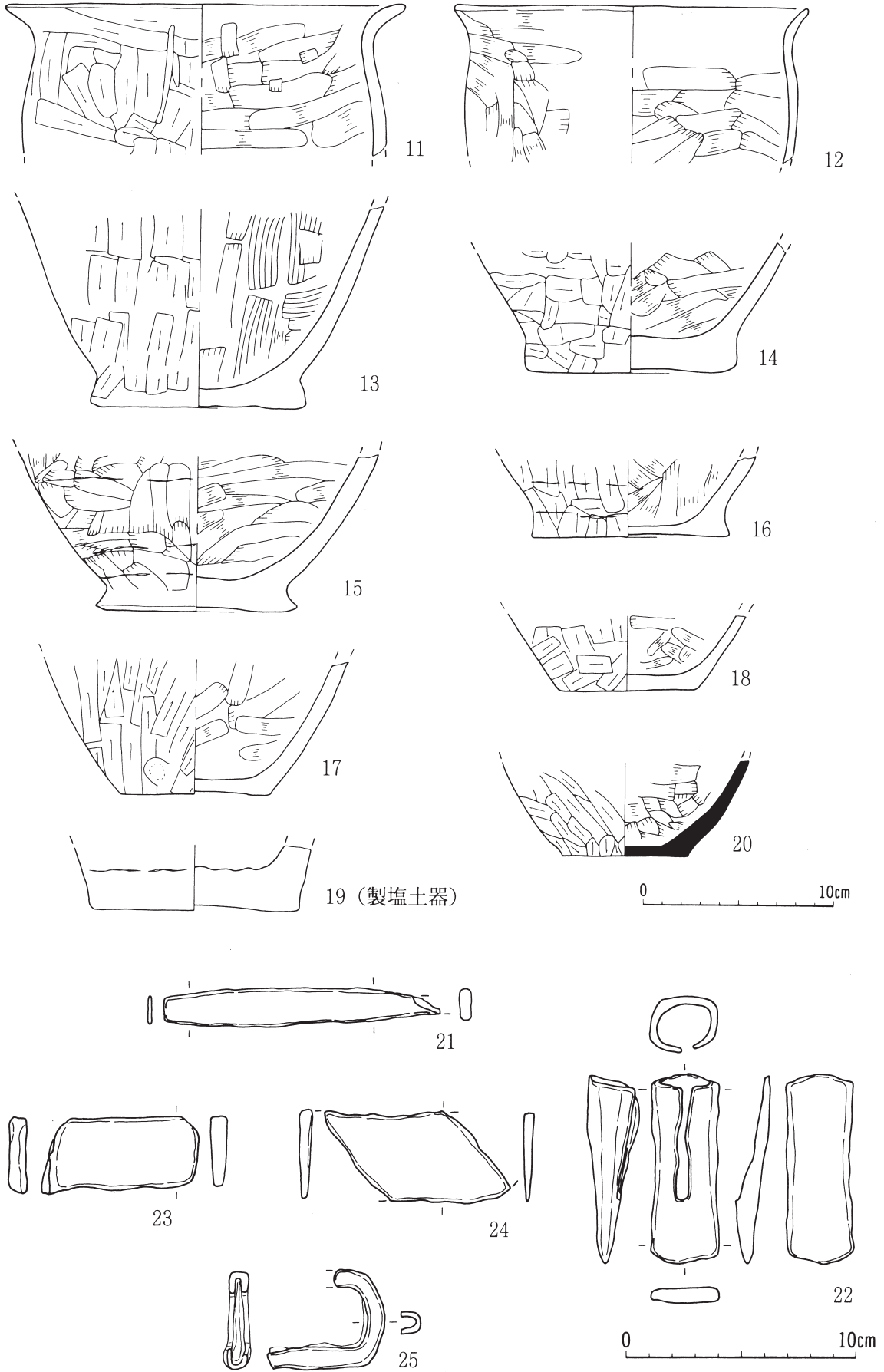


図39 第12号住居跡 出土遺物(2)

### 第13号住居跡（図40～42）

〔位置〕 G・H-123・124グリッドに位置し、V層上面で褐色土の落ち込みを確認した。本住居跡の周辺には、南東側に第12号（第4号掘立柱建物跡付属）・第14号住居跡、北東側に第8号住居跡、北西側に第16号住居跡が位置する。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 南東壁辺282cm、北西壁辺323cm、南西壁辺313cm、北東壁辺340cmの不整な方形を呈する。主軸方位はN-114°-E、床面積は9.13㎡である。本遺跡内では、小規模の住居跡である。

〔堆積土〕 10層に分層できた。全体にローム粒及び炭化物粒を含む褐色土で覆われている。自然堆積と考えられる。

〔壁・床面〕 V層を壁面とし、壁は床面から垂直に直線的に立ち上がる。壁高は、南東壁37cm、北西壁50cm、南西壁50cm、北東壁37cm程である。床は、ほぼ平坦で、全体を締め固めたような貼床である。また、床面からピットを検出した。

〔壁溝〕 なし。

〔ピット・柱穴〕 7個検出された。支柱穴は不明確である。ピット1からは大量の遺物が出土した。貯蔵穴として機能していたものと捉えられる。また、ピット6は、本住居跡のほぼ中央に位置し、カマド方向へ斜めに掘り込んでいる。ピット4からは、炭化物が出土し、炉として機能したものと考えられる。なお、各ピットの深さは以下の通りである。ピット1…26.0cm、ピット2…11.5cm、ピット3…13.4cm、ピット4…22.8cm、ピット5…15.8cm、ピット6…54.4cm、ピット7…41.6cm

〔カマド〕 南東壁の中央からやや東寄りに位置している。地下式のカマドであり、遺存状態は極めて良好である。袖・天井部は粘土質の灰黄褐色土で構築され、袖には芯材を使用していなかった。天井部の一部は、袖の両脇にも崩れ落ちている状態のまま検出された。燃焼部は床面から4cm程掘り込まれており、火床面は径35cm程の不整な楕円形を呈する。煙道部は地山をトンネル状に掘り込んで構築しており、約30度の傾斜で上がりながら煙出し孔まで掘り込まれている。なお、煙出し部分には、土師器の甕を煙突代わりとして利用している様子が確認できた。

〔その他の附属施設〕 なし。

〔出土遺物〕 土師器の甕の出土量が多く、特にピット1からの出土が目立つ。また、カマドの煙出し部分に使用されていた土師器の甕は図41-1と図42-11である。1は、煙出し孔部分に使われ、上から押しつぶされた状態で検出された。11は、ちょうど煙道部から煙出し孔へ向かうカーブの位置に口縁を焚き口に向けて埋め込んだ状態で検出された（写真図版参照）。その他、図41-9の土師器のように変わった作りの土器も1点出土している。

〔小結〕 本住居跡の構築時期は、出土遺物等から、9世紀後半と考えられる。



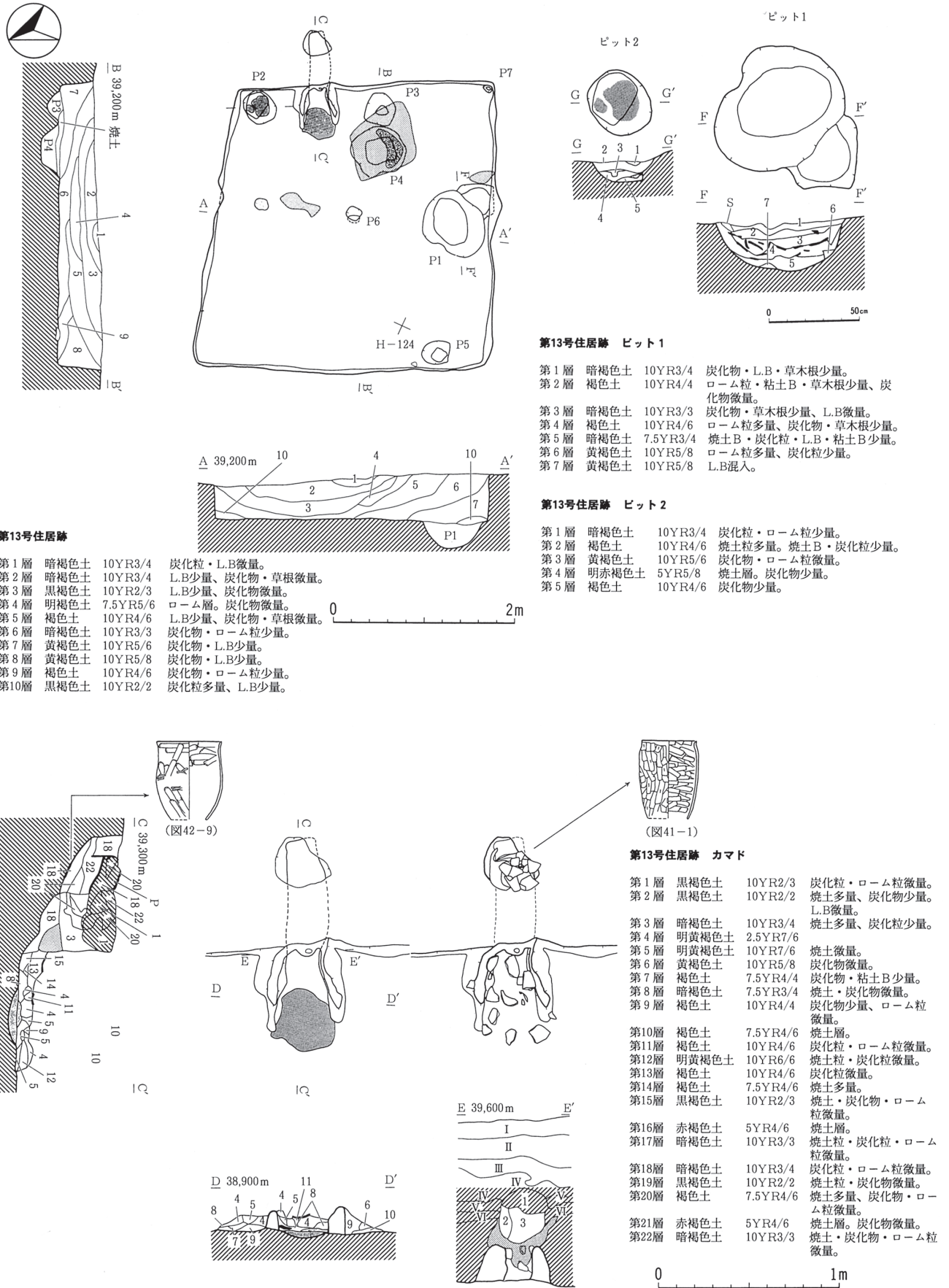


図40 第13号住居跡・同カマド

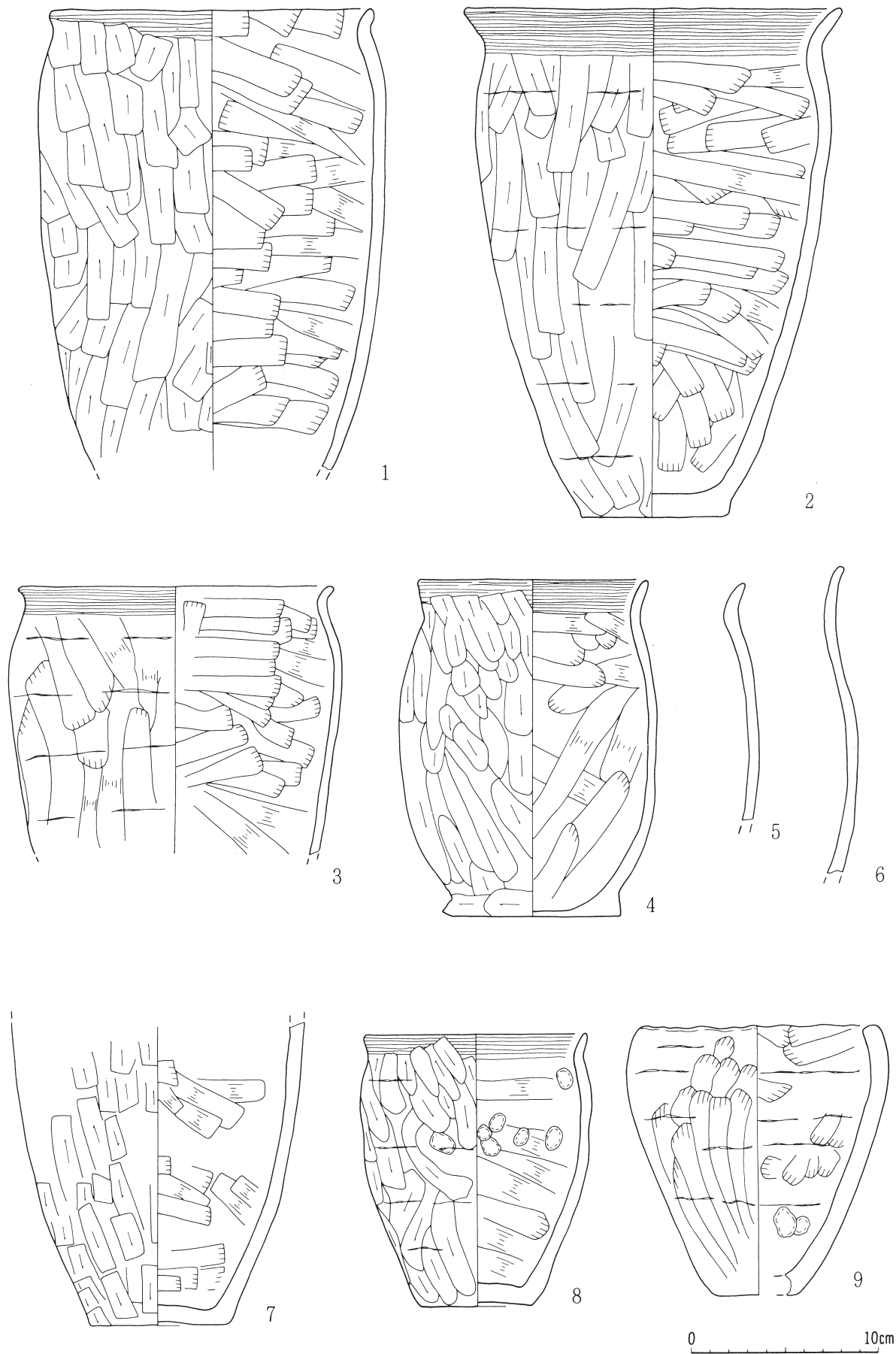


图41 第13号住居跡 出土遺物(1)

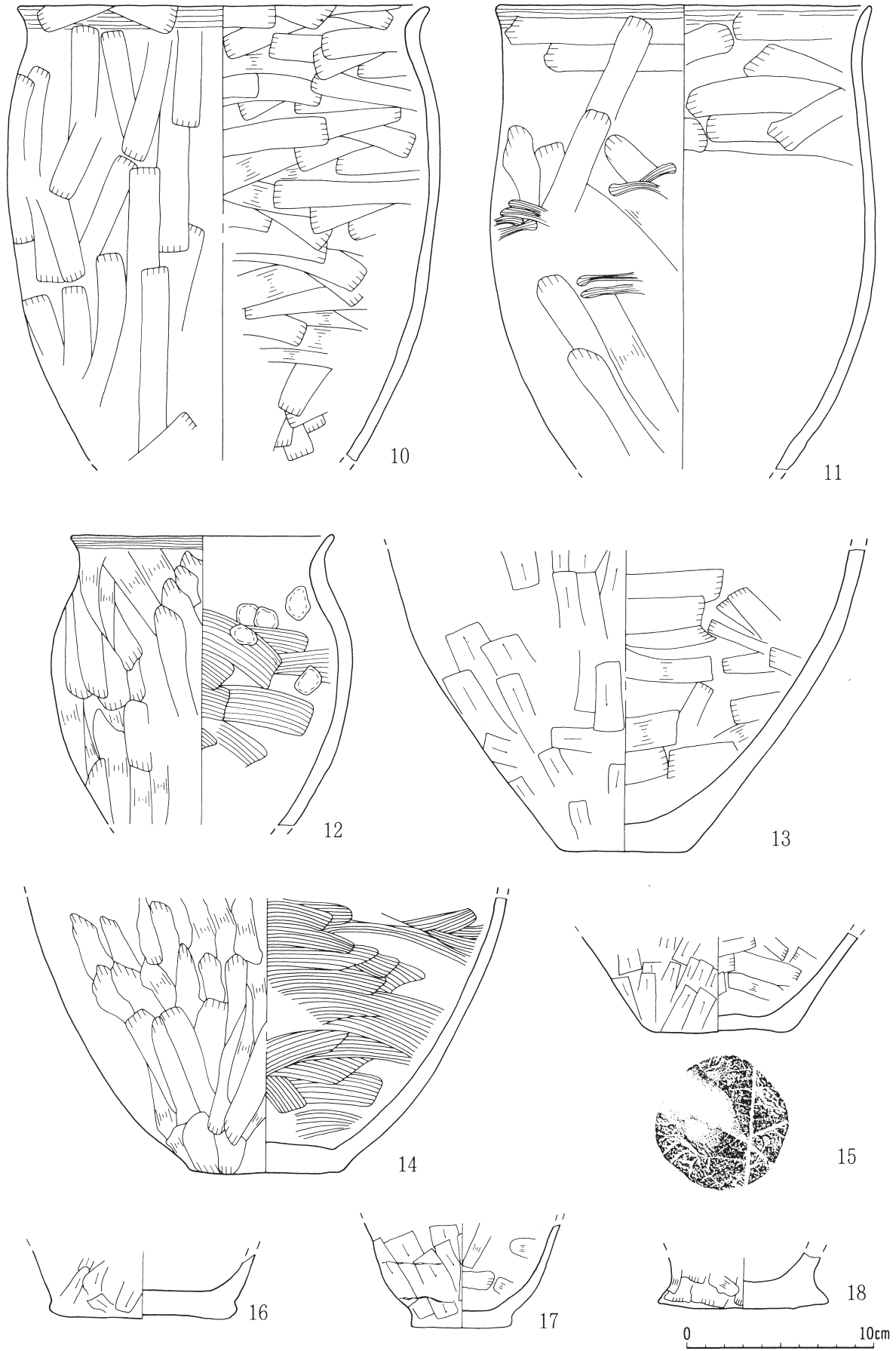


图42 第13号住居跡 出土遺物(2)

#### 第14号住居跡（図43）

〔位置〕 F・G-125・126グリッドに位置する。第12号住居跡確認時は、同住居の張り出し部と捉えて調査を進めたが、切り合い関係などから本住居跡と判断した。なお、本住居跡の周辺には、北側に第8号住居跡、東側に第7号住居跡（第2号掘立柱建物跡付属）、西側に第13号住居跡が位置する。

〔重複〕 第12号住居跡と重複し、本住居跡は、第12号住居跡よりは古い。

〔平面形・規模〕 第12住居跡と一部切り合っているため、検出した部分から推定すると一辺260cm程の方形を呈すると思われる。床面積は6.76㎡程になる。

〔堆積土〕 13層に分層できた。全体にローム粒及び炭化物粒を含む褐色土で覆われている。また、11層には多量の火山灰を含んでいる。自然堆積の様相を呈する。

〔壁・床面〕 V層を壁面とし、壁は床面からほぼ垂直に直線的に立ち上がる。壁高は、南東壁33cm、北西壁37cm、南西壁38cm、北東壁39cm程である。床はほぼ平坦で、全体が固く踏み締められている。また、床面から溝を検出した。

〔壁溝〕 第12号住居跡に一部切られているが、ほぼ一巡すると思われる。壁溝の幅は2～9cm、深さは9～18cm程である。

〔ピット・柱穴〕 なし。

〔カマド〕 第12号住居跡に切られているため、確認できない。

〔その他の附属施設〕 なし。

〔出土遺物〕 床面及び覆土中から、土師器の坏2点、甕の破片数点、ミニチュア土器1点などが出土した。図43-2の土師器の坏は、須恵器製作の影響を受けたと考えられている「あかやき」土器である。また、甕は底辺部にくびれを有し、口縁部が比較的大きく外反する。

〔小結〕 本住居跡の構築時期は、出土遺物等から、9世紀後半と考えられる。



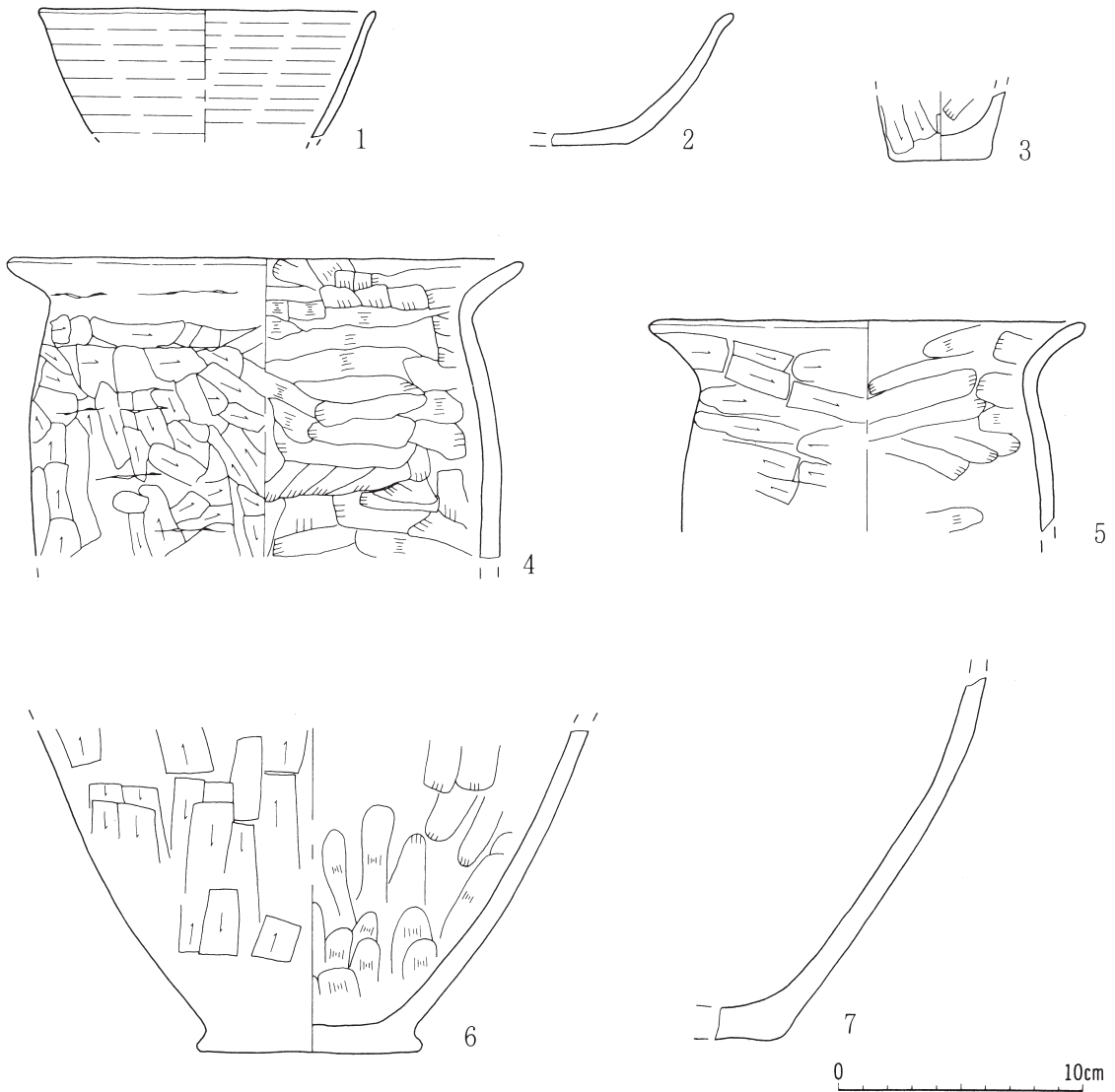
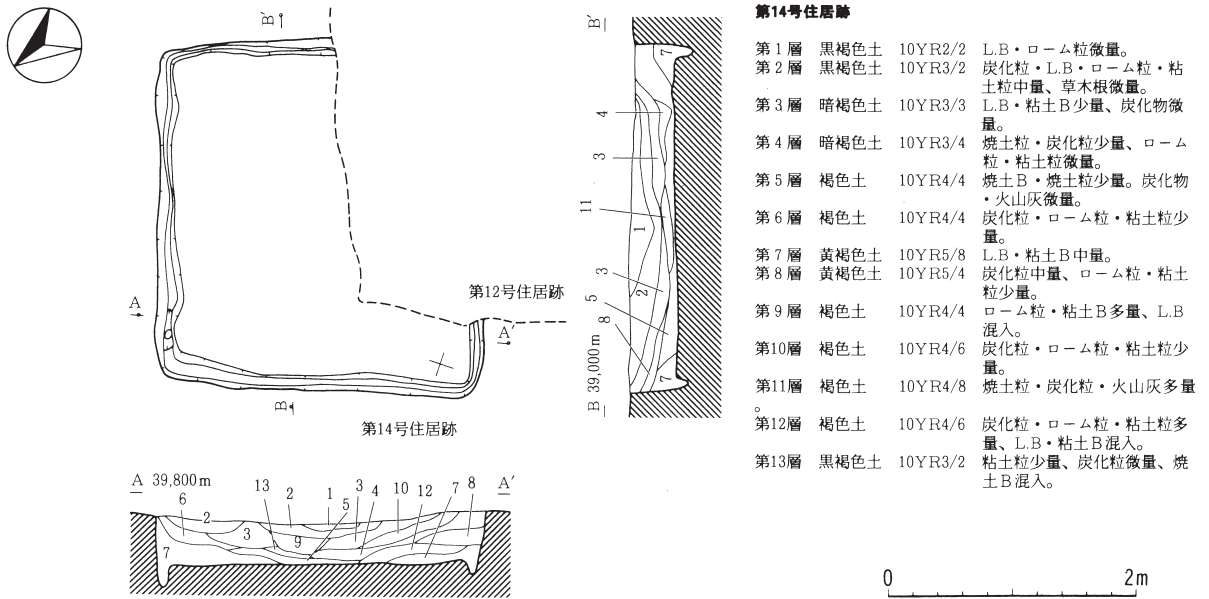


図43 第14号住居跡・出土遺物

### 第15号住居跡（第3号掘立柱建物跡付属）（図44）

〔位置〕 C・D-132・133グリッドに位置し、V層上面で褐色土の落ち込みを確認した。しかし、プランが調査区外に延びているため、地権者の承諾を得てプランが確認できる範囲まで拡張して調査を進めた。なお、本住居跡の周辺には、南西側に第6号住居跡（第1号掘立柱建物跡付属）、南側に第2号住居跡、北西側に第1号住居跡が位置する。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 南東壁辺371cm、北西壁辺391cm、南西壁辺365cm、北東壁辺374cmの方形を呈する。主軸方位はN-127°-E、床面積は11.81㎡である。本遺跡内では、中規模の住居跡である。〔堆積土〕 5層に分層できた。全体にローム粒を含む褐色土で覆われている。自然堆積の様相を呈する。

〔壁・床面〕 V層を壁面とし、壁は直線的に外反して立ち上がる。壁高は、南東壁16cm、北西壁16cm、南西壁12cm、北東壁10cm程である。床はほぼ平坦で、全体が固く踏み締められている。また、床面から溝とピットを検出した。

〔壁溝〕 カマド構築直下部分を除いてほぼ一巡する。壁溝の幅は2～16cm、深さは4～7cm程である。

〔ピット・柱穴〕 7個のピットを検出した。主柱穴と考えられるものはピット1～6である。また、カマドの左袖脇貯蔵穴として機能したものと考えられるピットを検出した。なお、各ピットの深さは以下の通りである。ピット1…22.7cm、ピット2…19.2cm、ピット3…14.8cm、ピット4…22.0cm、ピット5…51.8cm、ピット6…25.8cm、ピット7…38.6cm

〔カマド〕 南東壁の中央からやや南寄りに位置し、遺存状態はほぼ良好である。カマド本体の袖部を構築していたと思われる粘土塊を検出した。袖は粘土をつき固めて構築している。燃焼部はそれほど程掘り込まれていない。焼土の範囲は不明である。煙道部は半地下式で、壁の外側に15cm程張り出す程度である。なお、カマドの中央に土師器の甕を伏せており、支脚として利用している。

〔掘立柱建物跡〕 第3号掘立柱建物跡が竪穴部の南東壁側に隣接する。検出状況より、本住居跡に付属するものと考えられる。掘り方が対応する柱穴状のピットを4個検出した。ピットの深さは以下の通りである。ピット1…31.5cm、ピット2…32.8cm、ピット3…25.8cm、ピット4…17.0cm

〔その他の附属施設〕 なし。

〔出土遺物〕 覆土中から、土師器の甕の破片が数点だけ出土した。口縁部2点、底部3点の計5点である。

〔小結〕 本住居跡の構築時期は明確ではないが、同類の掘立柱建物跡を伴う住居跡と同時期（9世紀末から10世紀初頭）ではないかと思われる。

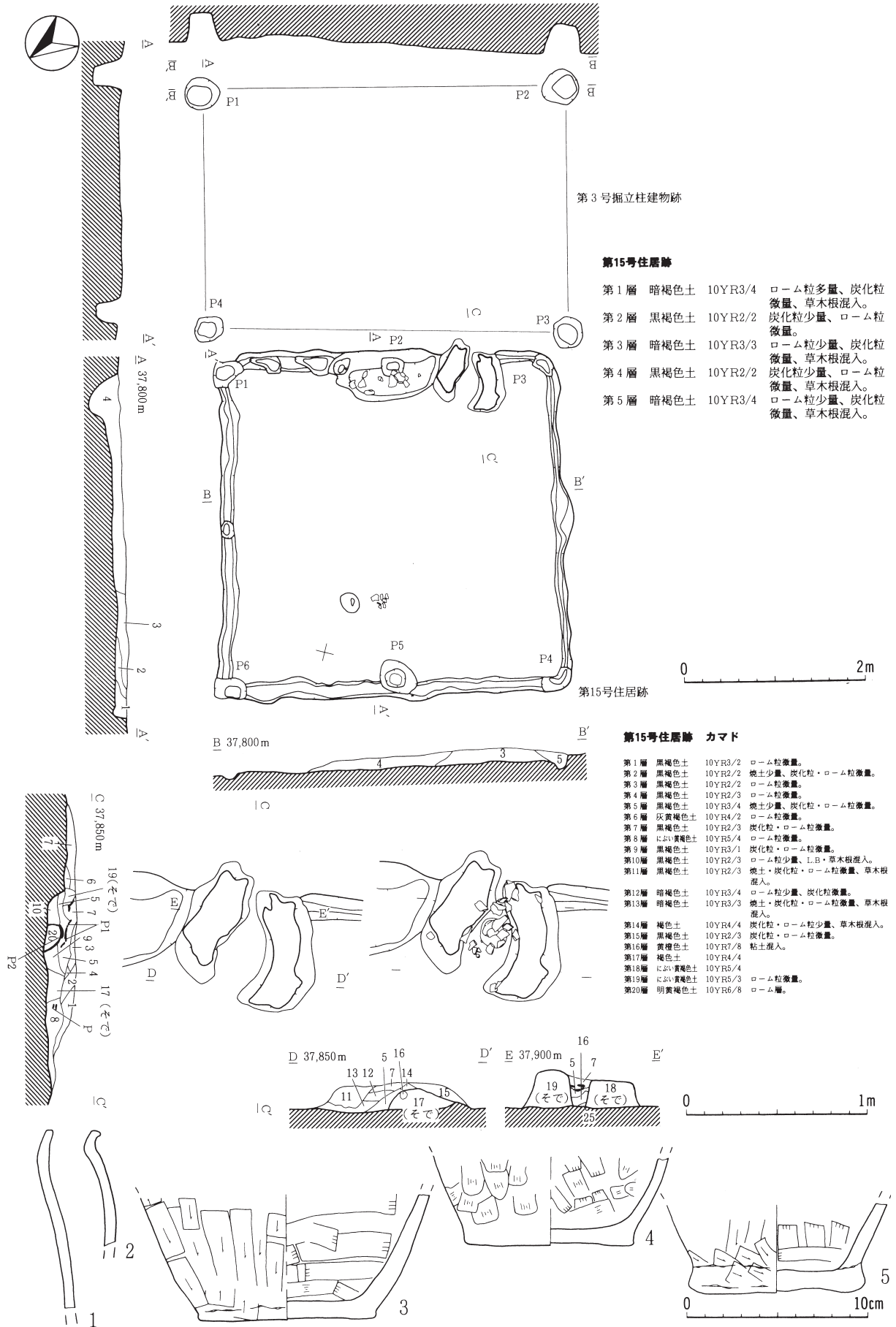


図44 第15号住居跡（第3号掘立柱建物跡付属）

### 第16号住居跡（図45）

〔位置〕 H-121・122グリッドに位置する。ほとんど削平されており、検出時の段階から床面の一部が確認された。本住居跡の南東側に第13号住居跡が位置する。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 削平により判然としないが、北壁と西壁の一部から、3 m程の方形を呈すると思われる。本遺跡内では、中規模の住居跡に相当する。

〔堆積土〕 本住居跡の南側半分以上は削平され、検出時にすでに床面の一部が確認されたような状況だったので、残っている北側の覆土についてのみ3層に分層できた。暗褐色土を主体とし、全体にローム粒や炭化粒を少量含んでいる。

〔壁・床面〕 V層を壁面とするが、立ち上がりは不明である。壁高は、北壁10cm程しか確認できなかった。床は半分以上削平されており、残っている部分では若干の凹凸はあるが、ほぼ平坦である。

〔壁溝〕 なし。

〔ピット・柱穴〕 なし。

〔カマド〕 検出されなかったが、遺物が集中して出土した東壁の北寄りにあったものと考えられる。

〔その他の附属施設〕 なし。

〔出土遺物〕 床面から土師器の甕がまとまって出土した。出土位置は、カマド周辺部と思われる。ほぼ完形品となったものが1点（図45—1）、口縁から底部破片1点、胴部から底部破片1点、網代痕が付いた底部破片1点（図45—4）の計4個体である。

〔小結〕 本住居跡の構築時期は、出土遺物から、9世紀末から10世紀初頭と考えられる。



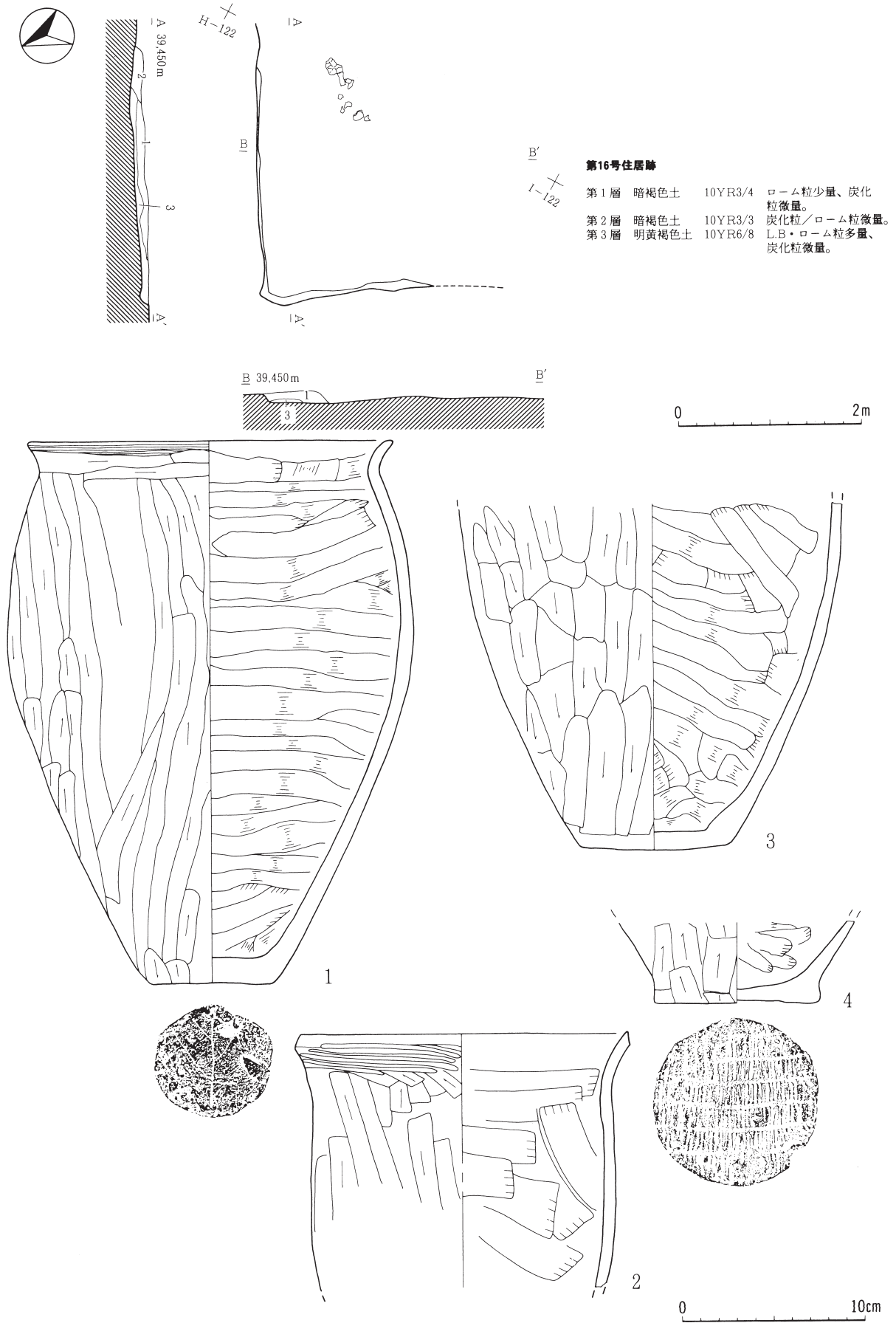


図45 第16号住居跡・出土遺物

## (2) 土坑

今回の調査で検出された平安時代の土坑は5基(第6・7・8・10・11号土坑)である。以下に各土坑について記載する。また、土坑内出土遺物については、各土坑ごとに一括して掲載した。

### 第6号土坑(図46・48)

[位置] H・I—140・141グリッドに位置する。本土坑の南東側には、第4号住居跡が隣接する。

[規模・形状] 開口部は248cm×221cm、底面が197cm×159cmで、深さは確認面から45cmである。平面形状は不整な楕円形、断面形状はナベ形である。

[壁・底面] V層を掘り込んで壁面としている。底面は、ほぼ平坦で緩やかに立ち上がる。

[堆積土] 11層に分層できた。全体にローム粒・炭化物粒の混入が目立ち、上層には火山灰が混入している。

[出土遺物] 覆土中から、土師器の坏1点、甕の破片数点、壺の口縁部破片1点、ミニチュア土器や、須恵器の坏1点が出土した。中でも、図48-1の須恵器の坏の胴部中央にはヘラ記号が刻まれている。

[小結] 本土坑は、第4号住居跡に隣接し、出土遺物の時期が類似することなどから、これとほぼ同時期に機能したものと考えられる。(9世紀末から10世紀初頭)

### 第7号土坑(図46・48)

[位置] E—145グリッドに位置する。

[規模・形状] 開口部は120cm×111cm、底面が111cm×110cmで、深さは確認面から17cmである。平面形状は不整な正方形、断面形状は箱形である。

[壁・底面] V層を掘り込んで壁面としている。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。全体に焼土粒・ローム粒・炭化物粒が混入し、底面直上に炭化物及び焼土を検出した。

[出土遺物] 覆土中から土師器の坏1個体(図48-8)と板状の炭化材が出土した。坏は、ロクロ成形で内面を黒色処理した後、放射状にミガキを施している。

[小結] 用途は不明であるが、平安時代の炭焼窯の可能性が考えられる。

### 第8号土坑(図46)

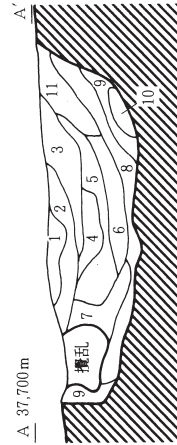
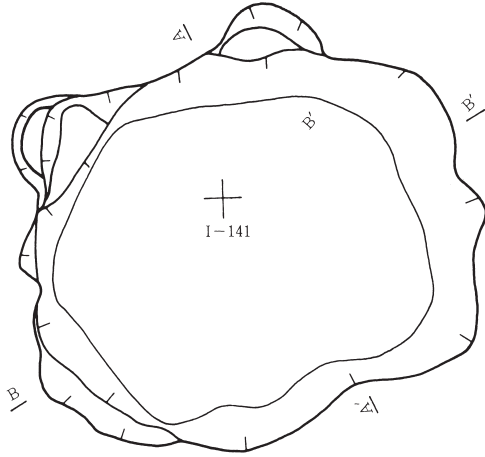
[位置] E—141グリッドに位置する。本土坑の南側には、3号住居跡が存在する。

[規模・形状] 開口部は73cm×67cm、底面が120cm×110cmで、深さは確認面から71cmである。平面形状は不整な円形、断面形状はフラスコ状を呈する。

[壁・底面] V層をフラスコ状に掘り込んで壁面としている。底面は、ほぼ平坦であり、ピット等は検出されなかった。

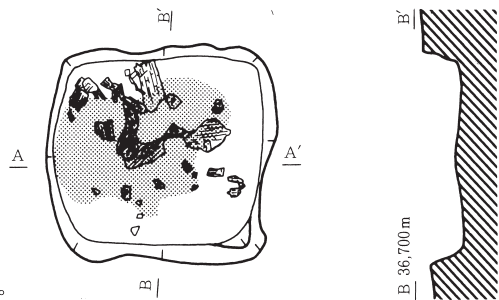
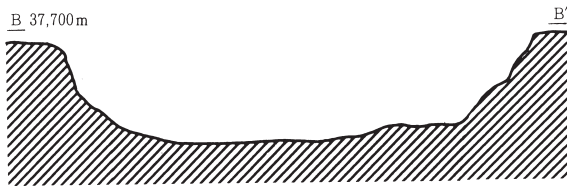
[堆積土] 10層に分層できた。暗褐色土を基調としており、全体にローム粒及び炭化物粒を混入している。全体にしまりがなく、混合土的な様相を呈することから、人為的堆積と考えられる。

[小結] 出土遺物もなく、時期や用途については不明である。



第6号 土坑

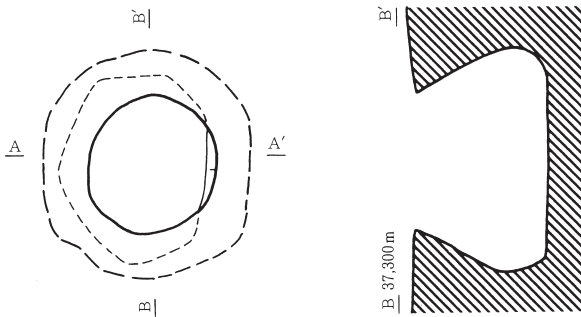
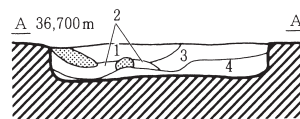
- 第1層 暗褐色土 10YR3/3  
火山灰多量、炭化粒微量。
- 第2層 黒褐色土 10YR2/2  
火山灰多量、炭化粒微量。
- 第3層 黒褐色土 10YR2/2  
炭化粒・ローム粒・火山灰微量、木根混入。
- 第4層 黒褐色土 10YR3/2  
ローム粒少量、炭化粒微量。
- 第5層 暗褐色土 10YR3/3  
炭化材多量、ローム粒少量、粘土粒微量。
- 第6層 暗褐色土 10YR3/3  
炭化粒・ローム粒少量、草木根混入。
- 第7層 にぶい黄褐色土 10YR4/3  
炭化粒・粘土粒少量、ローム粒微量。
- 第8層 黒褐色土 10YR2/2  
炭化粒・ローム粒少量。
- 第9層 褐色土 10YR4/4  
ローム層。8層の土との混合土。
- 第10層 黒色土 10YR1.7/1  
ローム粒少量、炭化粒微量。
- 第11層 黒褐色土 10YR3/2  
ローム粒多量、炭化粒微量。



第7号土坑

- 第1層 黒褐色土 10YR3/2 焼土粒・ローム粒・砂粒少量、炭化物微量。
- 第2層 暗褐色土 10YR3/3 焼土B混入、炭化物・ローム粒・砂粒少量。
- 第3層 暗褐色土 10YR3/3 炭化物・ローム粒・砂粒少量、灰微量。
- 第4層 黒褐色土 10YR2/3 ローム粒・砂粒・灰微量。

■ ~焼土範囲



第8号土坑

- 第1層 暗褐色土 10YR3/3 褐色土少量、ローム粒・木根微量。
- 第2層 黒褐色土 10YR3/2 炭化物・ローム粒・粘土粒少量、木根微量。
- 第3層 暗褐色土 10YR3/3 L.B少量、炭化物微量。
- 第4層 砂質 10YR3/4 ローム粒中量。
- 第5層 暗褐色土 10YR2/3 ローム粒少量、炭化物微量。
- 第6層 黒褐色土 10YR2/2 L.B中量、炭化物少量、草根微量。
- 第7層 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒・粘土・木根微量。
- 第8層 褐色土 10YR4/6 木根微量。
- 第9層 暗褐色土 10YR3/4 黄褐色土中量、炭化粒・ローム粒微量。
- 第10層 黒色土 10YR2/1 粘土B・ローム粒微量。

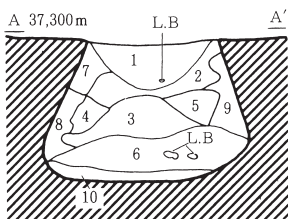


図46 平安時代の土坑(1)

### 第10号土坑（図47・48）

〔位置〕 E・F—133グリッドに位置する。本土坑は、掘立柱建物跡を伴う第6号及び第15号住居跡（第3号掘立柱建物跡付属）に挟まれるように位置し、南東側には第2号住居跡が位置する。

〔規模・形状〕 開口部は147cm×146cm、底面が102cm×99cmで、深さは確認面から55cmである。

平面形状は不整な円形、断面形状はナベ形を呈する。

〔壁・底面〕 V層を深く掘り込んで壁面としている。底面は、ほぼ平坦である。

〔堆積土〕 9層に分層できた。黒褐色土を基調とし、全体にローム粒の混入が目立ち、上層には焼土粒、下層には炭化物粒が混入する。また、確認面付近から火山灰（蛍光X線分析結果では十和田a火山灰に対応）を検出した。

〔出土遺物〕 1層から土器片の出土が多く、土師器の甕の破片数点、また、石匙1点が出土した。（図48—9～19）なお、本土坑出土の土器片と第6号住居跡出土のものが接合できたケースがみられた。

〔小結〕 遺物の出土量が非常に多く、焼土ブロックなども混入することから、捨て場として利用されていたものと考えられる。また、掘立柱建物跡を伴う第6号住居跡に隣接することからも、これらとほぼ同時期に機能したのと考えられる。

### 第11号土坑（図47）

〔位置〕 G—126グリッドに位置する。第12号住居跡の確認面で確認した。

〔重複〕 第12号住居跡内の西側に重複するが、これより新しい。

〔規模・形状〕 開口部は100cm×93cm、底面が94cm×88cmで、深さは確認面から80cmである。平面形状は不整な円形、断面形状はナベ形を呈する。

〔壁・底面〕 V層を浅く掘り込んで壁面としている。底面は、ほぼ平坦である。

〔堆積土〕 3層に分層できた。黒褐色土を基調とし、全体にローム粒・炭化粒・焼土粒が混入する。底面直上には硬くしまった焼土が全体に広がっている。

〔出土遺物〕 覆土から土器片が数点出土したが、数センチ程の破片ばかりだったため、器種や部位などについては不明である。

〔小結〕 出土遺物が小破片のため、用途については不明であるが、第12号住居跡が完全に埋まった状態の後に構築されたものである。



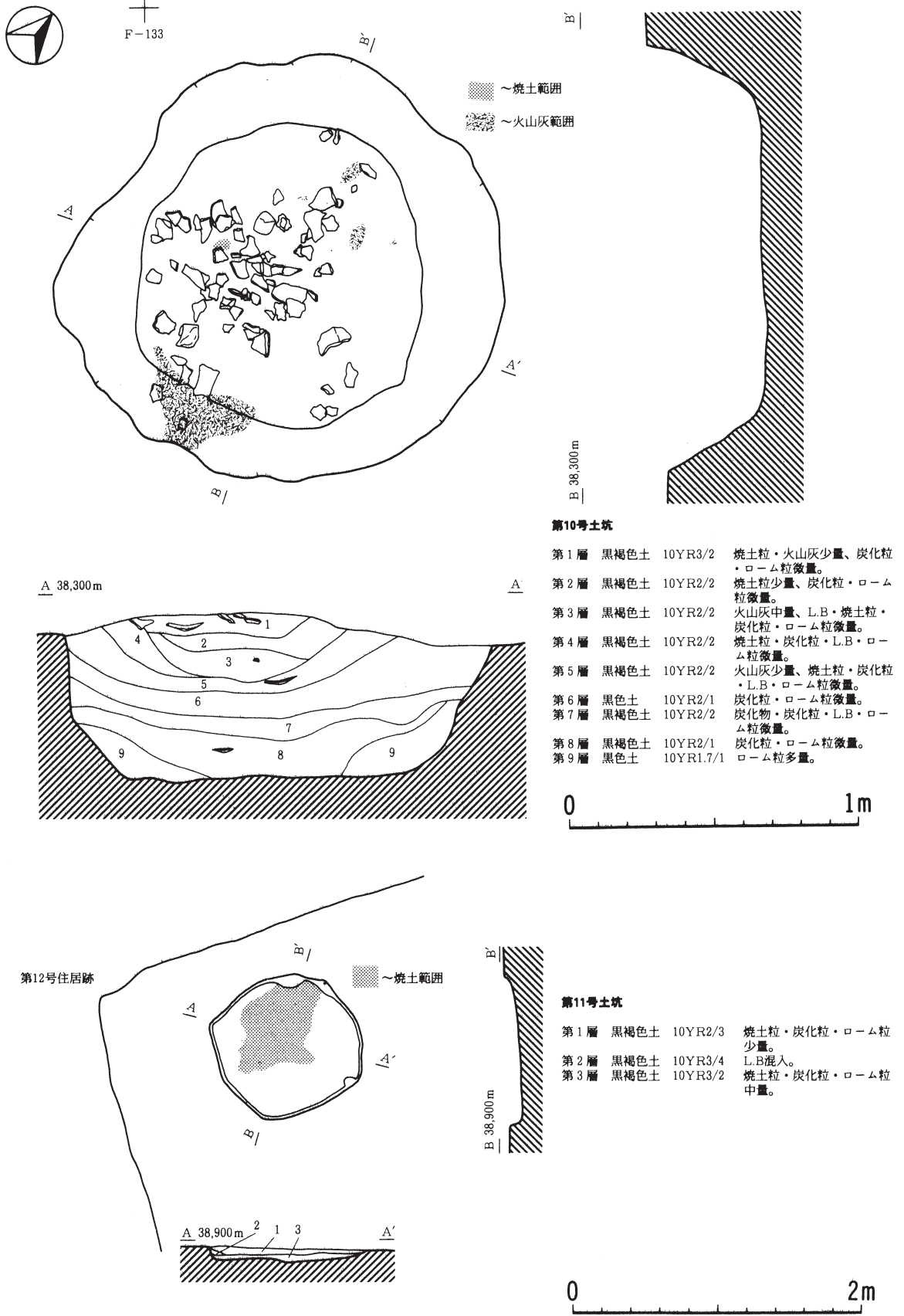
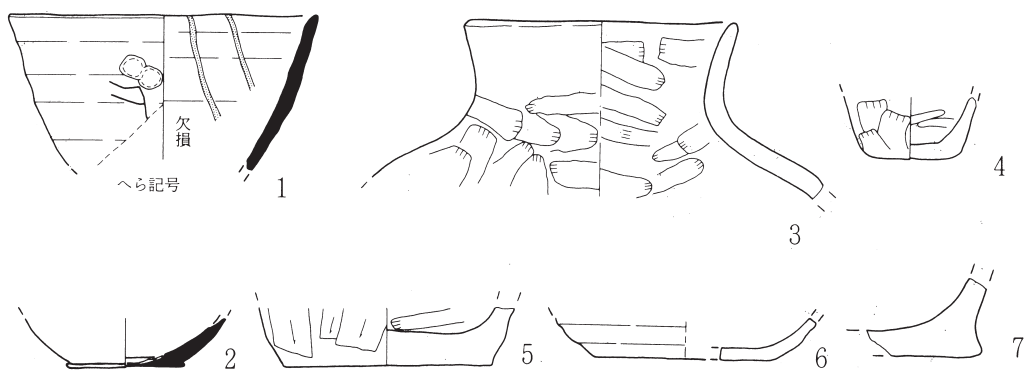
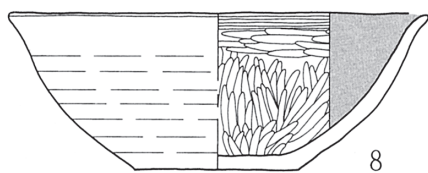


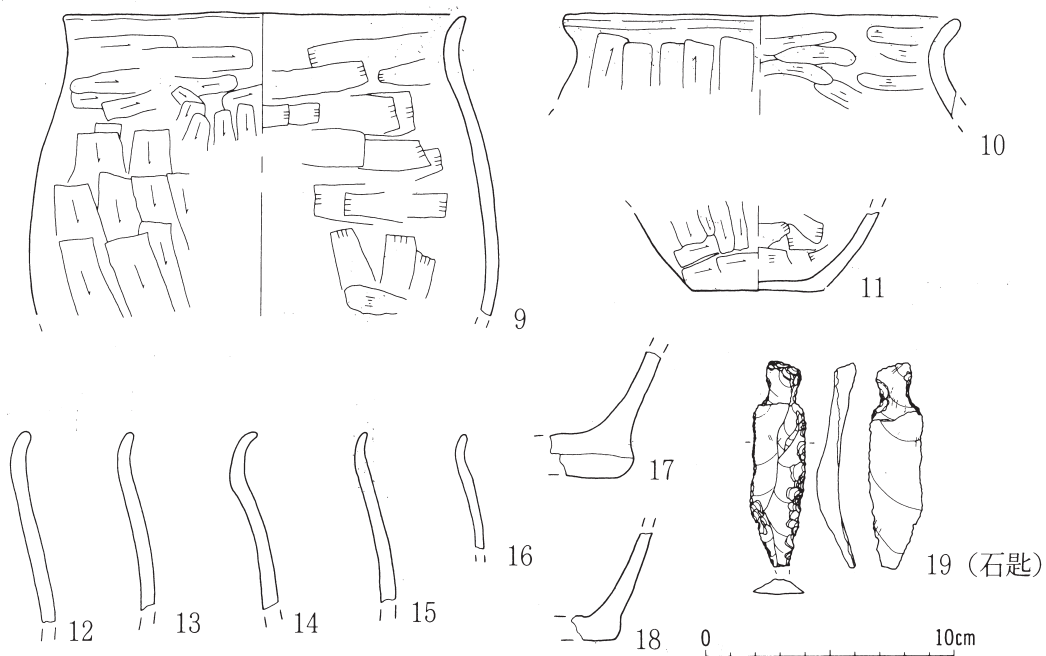
図47 平安時代の土坑(2)



第6号土坑出土



第7号土坑出土



第10号土坑出土

図48 平安時代の土坑出土遺物

図版番号	遺構名	層位	種類	器種	部位	成形	切離し	整形	色調(外)	色調(内)	口径	底径	器高	備考
図15-1	1H 床直	土師	甕	口~底	輪積み			底部篋削	黒 褐	褐 灰	(18.0)	6.8	26.5	すす付着
-2	1H カマド	土師	甕	口縁	輪積み			無	にぶい黄褐	にぶい黄橙	(24.0)			
-3	1H 床直	土師	浅鉢	略完形	輪積み			篋 無	にぶい赤褐	黒	11.0	7.0	14.4	
-4	1H 床直	土師	甕	底部				底部篋削	にぶい黄橙	にぶい黄橙		9.4		化粧粘土
-5	1H カマド	土師	甕	口~胴	輪積み			篋 無	にぶい黄橙	褐				
図17-1	2H 覆土	土師	坏	完形	ロクロ	回転糸切			にぶい橙	にぶい橙	12.8	5.2	6.4	
-2	2H カマド	土師	甕	口縁	輪積み			篋 無	にぶい橙	にぶい橙	(25.4)			
-3	2H 覆土	土師	甕	口縁				指 無	にぶい黄橙	明 褐	(12.8)			すす付着
-4	2H カマド	土師	甕	口縁	輪積み			無	にぶい黄橙	にぶい黄橙				化粧粘土
-5	2H 覆土	土師	甕	口縁	輪積み				にぶい橙	にぶい橙				
-6	2H 覆土	土師	甕	底部				底部篋削	にぶい黄褐	にぶい橙		(9.0)		
-7	2H カマド	土師	甕	底部	輪積み			底部篋削	にぶい橙	にぶい橙	7.6			
-8	2H 覆土	土師	甕	底部				篋 無	にぶい赤褐	にぶい橙		8.6		すす付着
-9	2H 覆土	土師	小甕	底部			回転糸切	篋 無	にぶい黄橙	にぶい黄橙		5.6		
-10	2H 覆土	須恵	坏	底部	ロクロ	回転糸切			褐 灰	褐 灰				火だすき
-11	2H カマド	須恵	甕	胴部				叩き目	灰 黄	灰 黄				木目様格子、当て具痕
図19-1	3H カマド	土師	坏	口縁	ロクロ	回転糸切			橙	橙	(12.0)	(5.0)	(5.0)	あかやき
-2	3H 床直	土師	浅鉢	口~底				ミガキ内黒	にぶい橙	黒	15.8	7.2	7.7	
-3	3H 床直	土師	壺	完形				指 無	にぶい橙	にぶい橙	7.5	5.7	6.7	底面に木葉痕
-4	3H カマド	土師	甕	底部	輪積み			篋 無	明 黄 褐	にぶい橙		7.2		
-5	3H 床直	土師	甕	底部				底部篋削	にぶい橙	にぶい橙		13.6		化粧粘土
-6	3H 覆土	土師	甕	底部				篋 無	にぶい橙	にぶい橙		8.8		
-7	3H カマド	土師	甕	底部	輪積み			底部篋削	明 黄 褐	明 黄 褐		(8.6)		底面砂粒付着
-8	3H カマド	土師	甕	口縁				ロクロ調整	にぶい橙	にぶい橙				
図23-1	4H 床直	土師	坏	完形	ロクロ	回転糸切		ミガキ内黒	にぶい黄橙	黒	11.8	5.2		灯明具、火ばね
-2	4H カマド	土師	坏	略完形	ロクロ	回転糸切		ミガキ内黒	にぶい橙	黒	13.2	6.0	5.6	
-3	4H 床下	土師	坏	口~底	ロクロ	回転糸切		ミガキ内黒	にぶい橙	黒	(15.4)	(6.0)	7.8	
-4	4H カマド	土師	坏	略完形	ロクロ	回転糸切			にぶい橙	にぶい橙	13.4	5.6	5.5	
-5	4H カマド	土師	坏	略完形	ロクロ	回転糸切			にぶい橙	にぶい橙	12.0	6.2	4.8	火ばね
-6	4H 床下	土師	坏	口~胴	ロクロ			ミガキ内黒	にぶい橙	黒	15.0			火ばね
-7	4H カマド	土師	坏	口~胴	ロクロ	回転糸切			にぶい赤褐	にぶい橙	(12.2)	(5.6)	(5.7)	
-8	4H 覆土	須恵	坏	口縁	ロクロ				灰 黄	灰 黄				ヘラ記号、火だすき
-9	4H 床直	土師	甕	完形				ロクロ調整	橙	橙	15.2	10.0	33.0	底面砂粒付着
-10	4H 床直	土師	甕	完形	輪積み			篋 無	にぶい黄褐	にぶい黄橙	16.0	10.2	33.0	
図24-11	4H カマド	土師	甕	口縁				篋 無	にぶい黄橙	にぶい黄橙	(21.8)			
-12	4H 床直	土師	甕	口縁				篋 無	黒 褐	黒	(18.8)			
-13	4H カマド	土師	甕	胴~底	輪積み			篋 無	にぶい赤褐	にぶい赤褐		10.6		底面砂粒付着
-14	4H カマド	土師	甕	胴~底				篋 無	にぶい赤褐	黒		10.0		底面砂粒付着
-15	4H カマド	土師	甕	胴~底				篋 無	にぶい赤褐	明 黄 褐		7.0		底面砂粒付着
-16	4H 覆土	土師	甕	底部	輪積み			底部篋削	にぶい黄橙	にぶい黄橙		10.6		
-17	4H 床直	土師	甕	底部				底部篋削	にぶい橙	にぶい橙		9.0		化粧粘土
-18	4H カマド	土師	甕	底部				底部篋削	にぶい橙	にぶい橙		8.2		化粧粘土
-19	4H 覆土	土師	甕	底部				底部篋削	にぶい黄褐	にぶい黄褐		8.0		
-20	4H 覆土	土師	甕	底部				底部篋削	にぶい赤褐	にぶい黄褐		8.4		底面砂粒付着
-21	4H 覆土	須恵	甕	胴部				叩き目	灰 黄	褐 灰				木目様格子目文
図26-1	6H 覆土	土師	小甕	口~底	輪積み			篋 無	にぶい黄橙	にぶい黄橙	(13.6)	7.0	14.5	底面砂粒付着
-2	6H 覆土	土師	甕	口~胴				篋 無	明 黄 褐	明 黄 褐	(15.0)			10土の土器片と接合
-3	6H 覆土	土師	甕	口縁				ロクロ調整	にぶい黄橙	にぶい橙	(19.0)			すす付着、ビット1
-4	6H カマド	土師	甕	口縁	輪積み			無	にぶい橙	にぶい橙	(20.4)			
-5	6H カマド	土師	甕	口縁	輪積み			無	明 褐	にぶい橙	(19.8)			
-6	6H カマド	土師	小甕	胴~底	輪積み			篋 無	にぶい赤褐	にぶい橙		6.8		底面砂粒付着
-7	6H 覆土	土師	坏	底部	ロクロ	ヘラ切り		篋 無	褐 灰	褐 灰		4.8		ビット1
-8	6H 覆土	土師	甕	底部				篋 無	にぶい橙	にぶい橙		5.6		化粧粘土
-9	6H カマド	土師	埴	口~胴				篋 無	にぶい橙	にぶい橙	(29.8)			
図28-1	7H カマド	土師	甕	口~底				篋 無	にぶい黄橙	にぶい黄橙	(25.4)	8.8	29.7	カマド支脚

表3 遺構内出土土器観察表(平安時代)

宇田野(2)遺跡・宇田野(3)遺跡・草薙(3)遺跡

図版番号	遺構名	層位	種類	器種	部位	成形	切離し	整形	色調(外)	色調(内)	口径	底径	器高	備考
-2	7H	カマド	土師	甕	完形			篋 撫	にぶい黄褐	にぶい黄橙	21.0	11.0	28.7	底面に縄目痕
-3	7H	覆土	土師	甕	口~胴			篋 撫	にぶい橙	にぶい黄橙	20.4			化粧粘土
-4	7H	カマド	土師	甕	口~胴			撫	にぶい橙	にぶい橙	(20.0)			化粧粘土
-5	7H	カマド	土師	甕	底部			篋 撫	にぶい赤褐	にぶい橙		7.5		カマド支脚
図29-6	7H	覆土	土師	甕	口~胴			ロクロ調整	明黄褐	明黄褐	27.0			
-7	7H	カマド	土師	甕	底部			篋 撫	明黄褐	明黄褐		9.8		
-8	7H	覆土	土師	甕	底部	輪積み		篋 撫	にぶい橙	にぶい橙		7.2		
-9	7H	覆土	土師	甕	底部	輪積み		篋 撫	にぶい赤褐	にぶい橙		8.0		
-10	7H	覆土	土師	埴	口~胴	輪積み		篋 撫	にぶい橙	にぶい橙	(29.8)		(15.3)	
図30-1	8H	床直	土師	甕	口縁			撫	にぶい橙	にぶい橙	(12.6)			すず付着
-2	8H	覆土	土師	甕	底部	輪積み		篋 撫	にぶい橙	にぶい橙		(8.4)		
-3	8H	覆土	土師	甕	底部	輪積み		篋 撫	明黄褐	にぶい橙		(9.6)		底面砂粒付着
-4	8H	床直	土師	甕	底部	輪積み		篋 撫	にぶい橙	にぶい黄褐		10.2		
-5	8H	床直	須恵	甕	底部	ロクロ			にぶい黄褐	にぶい黄橙				
-6	8H	床直	須恵	甕	胴部			叩き目	灰黄	灰黄				木目様格子目文
図31-1	9H	覆土	土師	甕	口~胴	輪積み		撫	褐	にぶい橙	(20.4)			
-2	9H	覆土	土師	甕	底部			篋 撫	にぶい橙	にぶい橙		(8.4)		
-3	9H	覆土	土師	坏	底部	ロクロ			橙	橙		5.2		底面に十字線刻
-4	9H	覆土	土師	埴	口~胴	輪積み		撫	褐灰	褐灰				すず付着
-5	9H	覆土	土師	埴	底部	輪積み			にぶい橙	明褐				
図32-6	9H	床直	須恵	壺	略完形	ロクロ			褐灰	褐灰	(7.0)	4.6	6.1	
-7	9H	覆土	須恵	壺	底部	ロクロ		篋 撫	黒	褐灰		6.4		
-8	9H	覆土	須恵	甕	胴部			叩き目	褐灰	褐灰				木目様格子目文、当て具痕
-9	9H	覆土	須恵	甕	胴部			叩き目	褐灰	褐灰				木目様格子目文
-10	9H	覆土	須恵	甕	胴部			叩き目	褐灰	にぶい黄橙				木目様格子目文
-11	9H	覆土	須恵	甕	胴部			叩き目	褐灰	褐灰				木目様格子目文
-12	9H	覆土	須恵	甕	胴部			叩き目	黒	黒				木目様格子目文、当て具痕
図35-1	11H	カマド	土師	甕	口~胴			篋 撫	明褐	にぶい橙	(23.8)	(15.6)	24.0	すず付着
-2	11H	カマド	土師	甕	口~胴			ロクロ調整	明褐	にぶい橙	(24.0)			
-3	11H	覆土	土師	坏	略完形	ロクロ	回転糸切		にぶい橙	にぶい橙	14.0	5.6	5.6	
-4	11H	覆土	須恵	小皿	略完形	ロクロ	回転糸切		褐灰	褐灰	(11.0)	3.8	1.7	灯明具?
-5	11H	覆土	土師	小甕	底部		回転糸切		にぶい黄橙	にぶい黄橙		5.8		
図38-1	12H	床直	土師	坏	略完形	ロクロ	回転糸切		にぶい橙	にぶい橙	11.2	4.8	4.7	
-2	12H	カマド	土師	小甕	略完形			篋 撫	にぶい赤褐	にぶい橙	(15.6)	7.6	16.0	
-3	12H	床下	土師	甕	略完形			篋 撫	にぶい橙	にぶい黄橙	(18.0)			
-4	12H	床直	土師	甕	口~胴	輪積み		撫	にぶい橙	にぶい橙	(25.0)			
-5	12H	床直	土師	甕	口~胴			撫	にぶい橙	にぶい橙	(17.0)			
-6	12H	覆土	土師	甕	口縁			撫	明黄褐	にぶい橙	(26.0)			
-7	12H	カマド	土師	甕	口~胴	輪積み		篋 撫	にぶい橙	にぶい橙	(16.2)			
-8	12H	カマド	土師	甕	口~胴	輪積み		撫	にぶい黄橙	にぶい黄橙	(25.0)			
-9	12H	床直	土師	甕	口縁	輪積み		撫	明褐	にぶい橙	(14.0)			
-10	12H	カマド	土師	甕	口~胴			撫	明褐	明褐	(12.4)			
図39-11	12H	カマド	土師	甕	口~胴			篋 撫	にぶい橙	にぶい黄橙	(21.0)			
-12	12H	覆土	土師	甕	口~胴	輪積み		撫	にぶい赤褐	にぶい橙	(18.4)			
-13	12H	覆土	土師	甕	胴~底	輪積み		底部篋削	にぶい赤褐	にぶい橙		11.2		
-14	12H	覆土	土師	甕	胴~底	輪積み		底部篋削	にぶい赤褐	にぶい橙	(10.6)			底面砂粒付着
-15	12H	覆土	土師	甕	底部	輪積み	ヘラ切り	底部篋削	にぶい橙	にぶい黄橙		9.0		
-16	12H	覆土	土師	甕	底部			底部篋削	明黄褐	にぶい橙		11.0		化粧粘土
-17	12H	床直	土師	甕	底部	輪積み		篋 撫	にぶい橙	にぶい橙		7.8		
-18	12H	カマド	土師	甕	底部			篋 撫	にぶい橙	にぶい橙		7.0		
-19	12H	覆土	土師	甕	底部				にぶい赤褐	にぶい赤褐		11.0		底面にモミ痕、製塩土器?
-20	12H	覆土	須恵	壺	底部			篋 撫	褐灰	褐灰		6.4		底面砂粒付着
図41-1	13H	カマド	土師	甕	口~胴	輪積み		篋 撫	にぶい橙	にぶい橙	16.8			煙出し孔に使用
-2	13H	覆土	土師	甕	略完形	輪積み		篋 撫	にぶい黄橙	にぶい黄橙	(22.2)	7.2	27.0	ヒット1
-3	13H	床直	土師	甕	口~胴	輪積み		撫	にぶい黄橙	にぶい黄褐	16.8			ヒット1



図版番号	遺構名	層位	種類	器種	部位	成形	切離し	整形	色調(外)	色調(内)	口径	底径	器高	備考
-4	13H	覆土	土師	小甕	完形	輪積み		篋 撫	にぶい黄橙	にぶい黄橙	12.4	9.6	17.7	底面砂粒付着、ビット1
-5	13H	覆土	土師	甕	口~胴			篋 撫	にぶい橙	にぶい橙				ビット1
-6	13H	覆土	土師	甕	口~胴	輪積み		撫	明黄褐	にぶい赤褐				ビット1
-7	13H	覆土	土師	甕	胴~底	輪積み		篋 撫	にぶい橙	にぶい橙		7.4		ビット1
-8	13H	覆土	土師	小甕	口~底	巻上げ	ヘラ切り	篋 撫	にぶい赤褐	にぶい橙	12.0	6.0	14.4	ビット1
-9	13H	床面	土師	不明	口~胴	輪積み		指 撫	にぶい橙	にぶい橙	(13.0)	(4.0)	28.4	ビット1
図42-10	13H	覆土	土師	甕	口~胴	輪積み		篋 撫	橙	橙	(22.0)			
-11	13H	カマド	土師	甕	口~胴	輪積み		篋 撫	橙	橙	19.8			煙出し孔に使用
-12	13H	床直	土師	小甕	完形	輪積み		篋 撫	にぶい黄褐	にぶい黄褐	13.8			
-13	13H	覆土	土師	甕	胴~底	輪積み		底部篋削	明黄褐	にぶい橙		7.0		ビット1
-14	13H	床直	土師	甕	胴~底			内ハケメ	明褐	明褐		8.0		底面砂粒付着、ビット1
-15	13H	カマド	土師	甕	底部			底部篋削	明黄褐	にぶい赤褐		7.0		底面に木葉痕
-16	13H	カマド	土師	甕	底部				にぶい赤褐	にぶい橙		8.4		
-17	13H	覆土	土師	小甕	底部			篋 撫	にぶい橙	にぶい橙		5.2		ビット1
-18	13H	床直	土師	甕	底部			底部篋削	にぶい赤褐	にぶい橙		9.2		底面砂粒付着
図43-1	14H	覆土	土師	坏	口~胴	ロクロ			にぶい黄橙	にぶい黄橙	(13.6)			
-2	14H	床直	土師	坏	口~底	ロクロ	回転糸切		橙	橙			5.4	あかやき
-3	14H	床直	土師	ミニ	略完形	手づくね			にぶい橙	にぶい橙	4.5	(4.0)	2.5	
-4	14H	覆土	土師	甕	口~胴	輪積み		篋 撫	にぶい黄橙	にぶい黄橙	(21.2)			
-5	14H	床下	土師	甕	口縁			篋 撫	にぶい黄橙	にぶい黄橙	(17.6)			
-6	14H	床直	土師	甕	胴~底			篋 撫	にぶい赤褐	にぶい黄橙		(9.4)		化粧粘土
-7	14H	覆土	土師	甕	胴~底			篋 撫	にぶい黄橙	にぶい黄橙				底面砂粒付着
図44-1	15H	覆土	土師	甕	口~胴	輪積み		指 撫	にぶい橙	にぶい橙				
-2	15H	覆土	土師	甕	口縁	輪積み		篋 撫	明黄褐	明黄褐				
-3	15H	覆土	土師	甕	胴~底	輪積み		篋 撫	にぶい黄橙	にぶい黄橙		9.0		底面砂粒付着
-4	15H	覆土	土師	甕	底部	輪積み		底部篋削	にぶい黄橙	にぶい黄橙		8.8		
-5	15H	覆土	土師	甕	底部			篋 撫	にぶい赤褐	にぶい黄褐		9.5		底面砂粒付着
図45-1	16H	床面	土師	甕	略完形	輪積み		篋 撫	にぶい赤褐	にぶい橙	(20.0)	6.0	30.0	底面に木葉痕
-2	16H	床面	土師	甕	口~胴			ロクロ調整	にぶい黄橙	にぶい黄橙	(18.0)			
-3	16H	床面	土師	甕	胴~底	輪積み		底部篋削	黒褐	にぶい黄橙		8.0		
-4	16H	床面	土師	甕	底部	輪積み		底部篋削	にぶい赤褐	黒		9.0		底面に網代痕
図48-1	6土	覆土	須恵	坏	口~胴	ロクロ			褐灰	褐灰	(12.5)	(5.0)	(7.0)	火だすき、ヘラ記号
-2	6土	覆土	須恵	坏	底部	ロクロ	回転糸切		にぶい黄褐	にぶい黄褐		(4.5)		
-3	6土	覆土	土師	壺	口縁			ロクロ調整	にぶい黄橙	にぶい黄橙	(11.0)			
-4	6土	覆土	土師	ミニ	底部	手づくね			にぶい黄橙	にぶい黄橙		3.0		
-5	6土	覆土	土師	甕	底部				にぶい橙	にぶい橙		8.5		
-6	6土	覆土	土師	小甕	底部	ロクロ	回転糸切	内 黒	にぶい橙	黒		(7.0)		
-7	6土	覆土	土師	甕	底部				明黄褐	にぶい黄褐				
-8	7土	覆土	土師	坏	略完形	ロクロ	回転糸切	ミガキ内黒	にぶい橙	黒	(17.0)	(6.6)	6.2	
-9	10土	覆土	土師	甕	口~胴			篋 撫	にぶい橙	にぶい橙	(21.0)			
-10	10土	覆土	土師	甕	口縁			篋 撫	明褐	褐	(16.0)			
-11	10土	覆土	土師	甕	底部			篋 撫	明褐	にぶい橙		(5.5)		
-12	10土	覆土	土師	甕	口縁			篋 撫	橙	橙				化粧粘土
-13	10土	覆土	土師	甕	口縁			篋 撫	にぶい橙	にぶい橙				
-14	10土	覆土	土師	甕	口縁			篋 撫	にぶい赤褐	にぶい橙				
-15	10土	覆土	土師	甕	口縁			篋 撫	明黄褐	明褐				すす付着
-16	10土	覆土	土師	甕	口縁			篋 撫	明黄褐	明褐				
-17	10土	覆土	土師	甕	底部	輪積み		底部篋削	にぶい橙	褐				
-18	10土	覆土	土師	甕	底部			篋 撫	明黄褐	にぶい橙				

遺構内出土石器・石製品計測表

図版番号	出土地点	層位	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	石質	器質	備考
図23-25	第4号住居跡	覆土	(180.0)	(175.0)	(18.0)	236.4	安山岩		環状石斧
図25-10	第6号住居跡	覆土	45.0	16.0	8.0	5.9	珪質頁岩	不定形	スクレーパー
図25-11	第6号住居跡	覆土	28.0	15.0	4.0	1.1	玉髓質珪質頁岩	石鏃	無茎平基
図29-11	第7号住居跡	覆土	93.0	69.0	35.0	415.7	輝緑岩	凹み石	両面中央1箇所
図48-19	第10号土坑	覆土	(81.5)	21.5	8.5	(12.4)	珪質頁岩	石匙	縦型石匙

## 5 平安時代の遺構内出土遺物の観察

平安時代の遺構に伴う土器は、完形・略完形品を含めて200点以上である。その他に、鉄製品5点(第12号住居跡出土)や石器5点が出土した。以下に、それぞれについて器種別に記載する。

なお、第8号住居跡の覆土中から、土製勾玉(図87—35)が1点出土したが「第2節 2土製品」の項に記載した。

### (1) 土師器

土師器は、本遺跡で検出された平安時代の遺構にほとんど伴うものである。須恵器と同様に、本遺跡の性格及び時代を考える上で、土師器は、その中心となる資料である。

出土数は、完形・略完形の他に破片資料も含めて、数百点に上る。しかし、器形や機種が不明の小破片は本報告書に掲載していない。以下には、本報告書に記載した土器についてのみ記載する。坏17点、甕106点、小型甕10点、浅鉢2点、壺2点、埴4点、ミニチュア土器2点、器形不明1点について、器形ごとに観察してみた。

#### [坏]

全ての坏がロクロ成形で、底部は回転糸切の平底である。切り離し後、無調整のものが多いが、底部にヘラ状工具によるケズリが見られるもの(第4号住居跡—1・2)と、内面に黒色処理を施しているもの(第7号土坑—8、第4号住居跡—1・2・3・4)がある。器形は、器高に対する底径の比が小さい、腕形のものが多くみられる。また、第9号住居跡—3の底面には、十字刻線を施している。

胎土は、いずれも精選されており、焼成も概ね良好である。また、「須恵器系土器」・「赤褐色土器」と名称されている、須恵器製作の影響を受けたと考えられている「あかやき」土器と思われる坏(第3号住居跡—1、第14号住居跡—2)も認められる。

また、第4号住居跡—1の坏の底には、油を注いだ痕跡と、口唇部内面に芯があったと思われる痕跡と外面には油が付着していることから、灯明具として利用したものと考えられる。

焼失家屋である第4号住居跡出土の坏の多くには火ばね痕が見られる。火災を受けた際のものと思われる。

#### [甕]

長胴甕が大半を占める。ほとんどが頸部から口縁部にかけて短く、やや外反する。また、頸部に段を有するものは認められない。

器体表面の口縁部は、横位のヘラナデ、胴部は縦位のヘラナデやヘラケズリで整形しているものが多く、内面の仕上げはヘラナデによるものが多い。また、胴部下半に化粧粘土を貼り付けて整形しているものも多くみられる。

第4号住居跡出土—9・10のように体部に対し、口径が小さく、口辺がくの字状に鋭く外反するものも認められる。

底部については、底辺部にくびれを有するものもみとめられる。比較的古い段階の特徴である。

また、底面に砂粒が付着しているものが目立つ。中には、縄目痕(第7号住居跡—2)、モミ痕(第12号住居跡—19)、木葉痕(第13号住居跡—15、第16号住居跡—1)、網代痕(第16号住居跡—4)

なども認められる。

[小型甕]

器高が20cm以下の甕を小型甕とした。第6号土坑—6は、底部片で、ロクロを使用している様子がうかがえる。その他は、巻き上げ及び輪積みにより成形している。口辺部は横位のヘラナデ、胴部は縦位のヘラナデにより整形している。また、底面に砂粒が付着しているものが3点認められる。

[浅鉢]

いずれも住居跡の床面からの出土である。

第1号住居跡—3は、輪積みによる成形後、ヘラナデによる調整を施している。また、胎土中には砂粒を多量含む。底面は、ヘラケズリ調整を施している。

第3号住居跡—2は、ロクロを使用せず、口辺部を横位にユビナデで調整、胴部は若干のヘラナデ調整がわれている。内面は、黒色処理を施した後、ミガキを施している。底面はヘラナデ調整を施したものであると思われる。

[壺]

第3号住居跡—3は、床直からの出土で、口径7.5cm、底径5.7cm、器高6.7cmを呈する小型のもので、口縁部にユビナデを施し、胴部をヘラナデで調整している。内面は、ユビナデで調整し、底面には木葉痕が認められる。

第6号土坑—3は、口縁部破片である。推定口径11cmを呈する。内外面ともユビナデによる調整を施している。色調は、内外面ともにぶい黄橙色である。

[埴]

第6号住居跡—9及び第7号住居跡—10は、粘土紐の巻き上げ、あるいは輪積みにより成形した後、内外面をヘラナデで調整している。器形は比較的小さく、胴部の立ち上がり之急である。また、色調は、内外面ともにぶい橙色で、外面には、すすが付着している。どちらも、底部の形状は不明。

第9号住居跡—4・5は、口縁から胴部にかけての破片と底部破片であるが、全体形は不明。

[手づくね]

2点出土した。いずれもミニチュア土器である。(第6号土坑—4、第14号住居跡—3)

[器形不明]

1点出土した。第13号住居跡の床面からの出土(図41—9)で、粘土紐を巻き上げて成形しており、ユビナデにより調整を加えているが、製作途中かといったように、非常に粗末に感じられる。厚さも7mmあり、大きさの割には重い。



## (2) 須恵器

須恵器はいずれも破片資料で、坏3点、甕9点、壺3点、小皿1点の総計16点が出土した。中でも第9号住居跡からの出土が大半をしめる。これらを器形ごとに観察してみた。

### [坏]

3点が出土した。すべてロクロ成形である。

第6号土坑—1の胴部中央及び、第4号住居跡—8には、ヘラ記号が認められる。

第2号住居跡—10は、底部片で、回転糸切の平底である。

また、3点とも火だすき痕が見られる。色調は、表裏面とも褐灰色及び灰黄色を呈する。

### [甕]

胴部片が9点出土した（第2号住居跡—11、第4号住居跡—21、第8号住居跡—5・6、第9号住居跡—8・9・10・11・12）。器表面には、木目様格子目状の叩き目が主で、器内面には、当て具痕が認められるものと無文のものがある。特に第2号住居跡—11の裏面には、青海波状の当て具痕が認められることから、移入品の可能性が高いと思われる。色調は、表裏面とも褐灰色や灰黄色を呈し、断面は茶褐色を呈する。

### [壺]

3点出土した。第9号住居跡—6は、口径7.0cm・底径4.6cm・器高6.1cmを呈する小型の壺である。ロクロを使用し、底面は低速の回転糸切による切り離し後、ヘラナデによる調整を施している。色調は表裏とも褐灰色を呈する。

第9号住居跡—7、第12号住居跡—20のものは、底部破片で、いずれもロクロを使用して成形した後、底部付近の外表面をヘラナデによって調整している。色調は、表裏面とも褐灰色で、断面は茶褐色を呈する。なお、20の底面には砂粒が付着している。

### [小皿]

1点出土した（第11号住居跡—4）。推定口径7.0cm・底径4.6cm・器高1.7cmを呈し、波反り口縁である。ロクロを使用し、底面には回転糸切痕が見られる。外面は、二次焼成により溶けた様子がうかがえる。

## (3) 鉄製品（図39—21～25）

本遺跡からは、刀子、斧、山刀などの鉄製品が5点出土している。全て第12号住居跡の床面や覆土からの出土である。当時、農耕具や工具を使用した生活の一端がうかがえる。また、これらの鉄製品が出土した時点で、表面に錆が著しく付着していたため、使用跡や刃部などの詳細については不明である。なお、実測図は保存処理後に器形を重視して図化したものである。

21は、カマド付近の覆土から出土した刀子である。カマド付近からの出土であることから、包丁として使われていた可能性がある。しかし、刃部の位置などが不明なため、形状などから鑿とも考えられる。22は、床面から出土した斧（手斧）である。23は、床面から出土した山刀の柄部と思われる。24は、覆土から出土した山刀の一部と思われる。25は、床面から出土した鞆尻の一部と思われるが、その形状から、石帯のバックル部分の可能性もある。



#### (4) 石器・石製品

本遺跡の平安時代の遺構内から、5点の石器・石製品が出土した。いずれも覆土中からの出土であるが、縄文及び弥生時代の土器片などが混在して出土していることから、各遺構に伴う可能性は低いと思われる。

第4号住居跡の覆土中から、環状石斧(図23-25)が出土した。半欠品である。全面研磨によって、器面は平滑に加工されている。縁辺部は、敲打による潰しの後に研磨されたようで、部分的に敲打痕が残存している。孔は両面からの穿孔で、一方から6割程度とやや度合いが高い。孔の内部は器面ほどではないが、研磨されており、中心部は特に平滑である。

刃部には、全体に微細な剝離を伴うササクレが認められる。

平安期の住居跡覆土からの出土であるが、弥生時代の土器片などが混在して出土していることから、時期は特定し得ない。ただ、共伴遺物の時期から弥生時代(砂沢期)の可能性が高い。

(白鳥 文雄)

第6号住居跡の覆土中から、剥片石器2点が出土した(図26-10・11)。10は、不定形スクレーパーである。11は、石鏃であり、無茎平基を呈し尖端部が鋭利な作りとなっている。石材は10が珪質頁岩、11が玉髓質珪質頁岩である。

第7号住居跡の覆土中から、凹み石が1点出土した(図29-11)。両面の中央部分にそれぞれ1ヶ所ずつ凹みを有する。石材は輝緑岩である。

第10号土坑の覆土中から、石匙が1点出土した(図48-19)。縦型石匙である。片面加工で、両面とも側縁の一部に未加工部分を残している。使用されている石材は、珪質頁岩である。

(山内 実)

## 6 時期不明の遺構

### (1) ピット群1

弥生時代の土坑墓域の南側斜面から44個のピットを検出した。検出面はV層上である。これらは、J～L—155～157グリッドの範囲に位置する。直径は最大で55cm、最小で18cmである。深さは、最深23cmであるが、大半は10cm前後と浅い。相互の位置関係についても規則性は見られない。出土位置から、弥生時代の可能性もあるが、時期については不明である。

### (2) ピット群2

第3号住居跡（平安時代）の東側から19個のピットを検出した。これらは、E・F—142・143グリッドの範囲に位置する。直径は最大で40cm、最小で16cmである。深さは、最深17cmであるが、大半は10cm前後と浅い。相互の位置関係についても規則性は見られない。時期についても不明である。

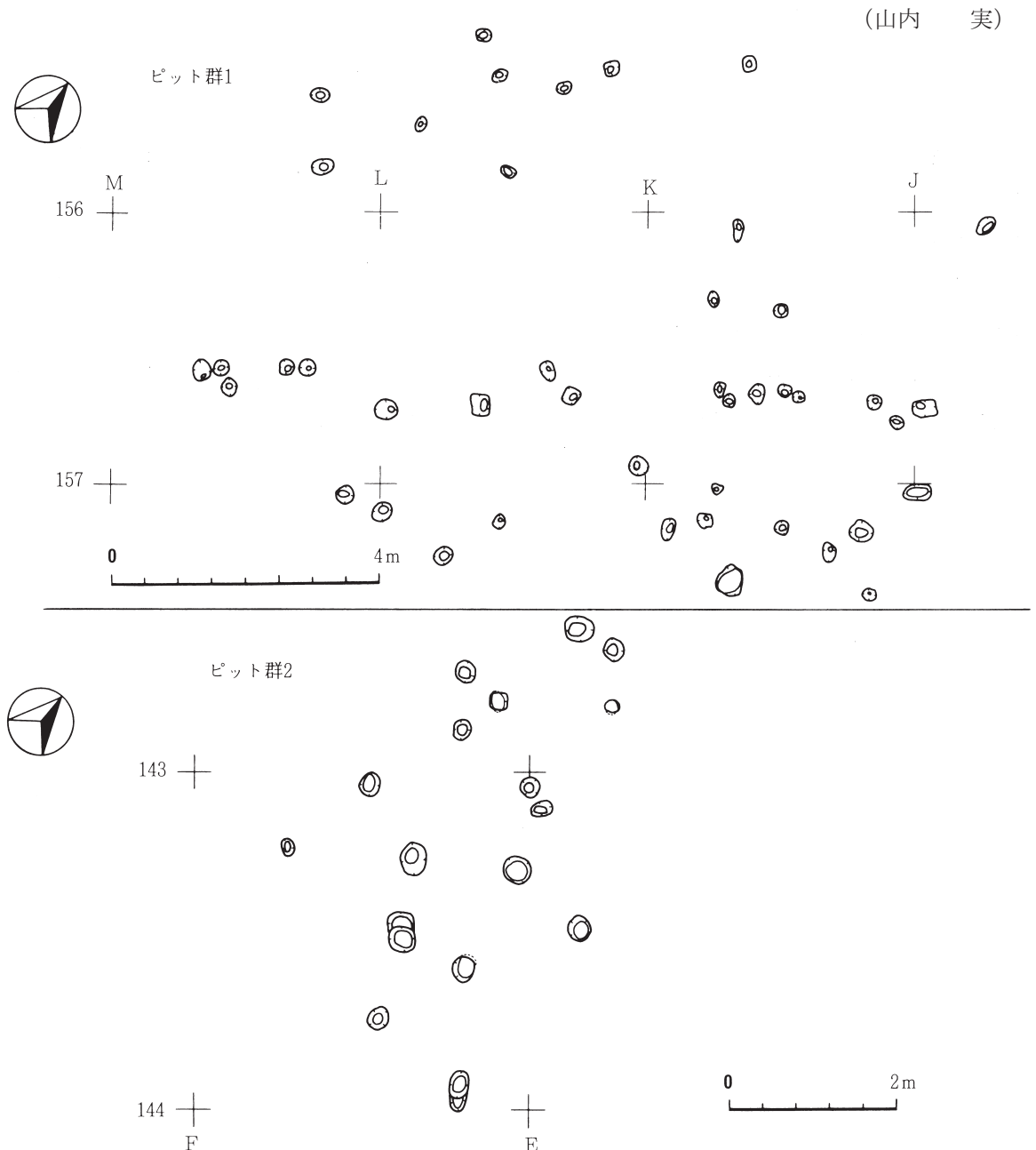


図49 時期不明の遺構